千葉県八千代市

川崎山遺跡h地点

－店舗建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書－

2004

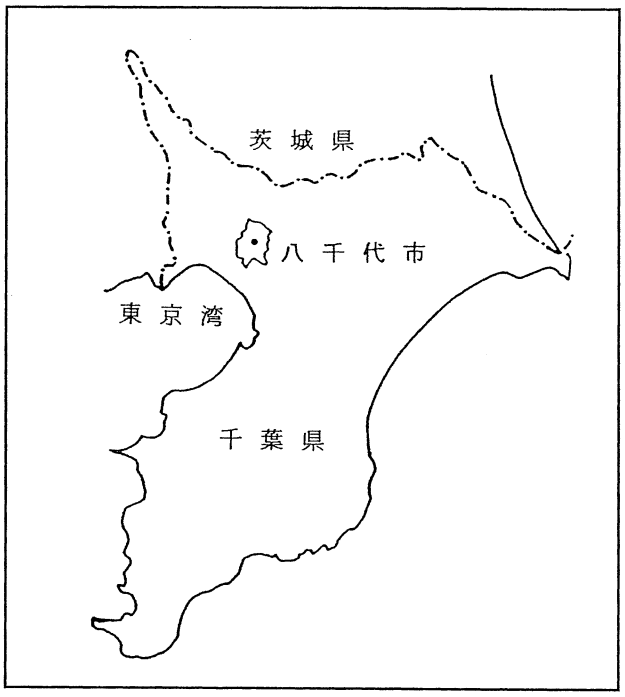
寺沢　鴻

八千代市遺跡調査会

千葉県八千代市

川崎山遺跡h地点

－店舗建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書－



2004

八千代市遺跡調査会

序　　文

八千代市は千葉県北西部に位置し，印旛沼と新川周辺に広がる台地上や低地の地の利を得て農業を中心として発展してきました。他面，首都30キロ圏に位置していることから，昭和30年代以降は経済の高度成長化に伴い，首都圏の住宅都市としての性格を強めてきました。本市は，都心や近郊都市への通勤エリアとして京成電鉄線，第３セクターの東葉高速鉄道等の交通網が整備され，また大学の誘致と周辺に住宅を整備した文教都市としての事業も成果をあげつつ更に進められています。一方，市中央部を南北に貫流する新川を市民の憩いの場とする目的で，遊歩道の整備や新川千本桜植栽事業として川沿いに桜を植樹する計画が完了し，今後生かされていく事となります。

今回の発掘調査の契機となった店舗建設事業は，市域中央部の東葉高速鉄道村上駅に至近の位置にある当該地に，乗降客の利便に供する店舗を建設のため，調査を実施しました。

調査の結果，弥生時代後期と古墳時代中期の集落跡を発見することができました。特に古墳時代中期については，通常の集落には見られない石製模造品の工房跡が発見され，当時の地域の動向を考える上で一級の資料を提供することができました。

本書を刊行するにあたり，この報告書が八千代市の弥生時代，古墳時代を考古資料を通じて考えるきっかけになっていただければ幸いです。

最後に，発掘調査から報告書刊行に至るまでご指導・ご協力いただいた千葉県教育庁文化財課，八千代市教育委員会，寺沢鴻氏，寺沢一三氏をはじめ，関係諸機関の皆様に対して深く感謝いたします。また，非常に限られた期間での発掘調査で苦労を共にわかちあっていただいた調査補助員の方々，特殊な遺物の整理作業で骨を折られた整理補助員の方々にもあわせてお礼申し上げます。

平成16年９月15日

八千代市遺跡調査会
会長　　三浦幸子

凡　　例

1　本書は，八千代市萱田字中台2292-1に所在する川崎山遺跡ｈ地点の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，寺沢鴻氏の委託を受け，八千代市遺跡調査会が実施した。

3　発掘調査・本整理作業は以下のとおり実施した。

本調査

期　　間　平成11年５月７日～同年６月14日

面　　積　966㎡

担　　当　森　竜哉

備　　考　八千代市遺跡調査会による委託事業

本整理作業

期　　間　平成14年２月１日～同年３月29日

担　　当　森　竜哉

備　　考　八千代市遺跡調査会による委託事業

4．本書の編集・執筆は森竜哉がおこなった。

5．現場の遺構，遺物及び報告書掲載の遺物写真は森が撮影した。

6．本書の作成・刊行については，下記の整理補助員と森が協力して行い，森が統括した。

〔整理補助員〕古滝洋子　杉山由美子　日向洋子

7．出土遺物，実測図等の資料は，八千代市教育委員会において保管している。

8．本書の遺構番号は，発掘調査時の番号を使用している。

9．遺構・遺物の縮尺は下記のとおり統一している。

〔遺構〕住居跡(D)1/60　土坑(P)1/30

〔遺物〕土器1/3　土・石製品1/3　石製模造品類　原石1/3　成品・未成品1/1

10. 遺構平面図中の「―・―」は，硬化面を示したものである。

11. 遺構・遺物のスクリーントーンは下記のとおり統一している。

炉・焼土・赤彩・繊維土器　　粘土全般

12. 本書使用の地形図は，下記のとおりである。

第１図　参謀本部陸軍部測量局発行　1/20,000　第一軍管区地方迅速測図(明治15年発行)

第２図　八千代市発行　1/2,500　八千代都市計画基本図

13. 本書使用の航空写真は，昭和54年八千代市撮影のものである。

14. 発掘調査から整理作業において下記の諸氏・機関にご指導，ご協力いただきました。記して感謝いたします。(敬称略)

寺沢鴻　寺沢一三　高花宏行　寺村光晴　千葉県教育庁文化財課　八千代市教育委員会

本　文　目　次

序　文
凡　例

第１章　序説
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の方法と経過……1
　第３節　遺跡の位置と環境……1

第２章　検出された遺構と遺物
　第１節　縄文時代……4
　第２節　弥生時代……4
　第３節　古墳時代……10

第３章　まとめ
　第１節　縄文時代……29
　第２節　弥生時代……29
　第３節　古墳時代……30
報告書抄録

挿　図　目　次

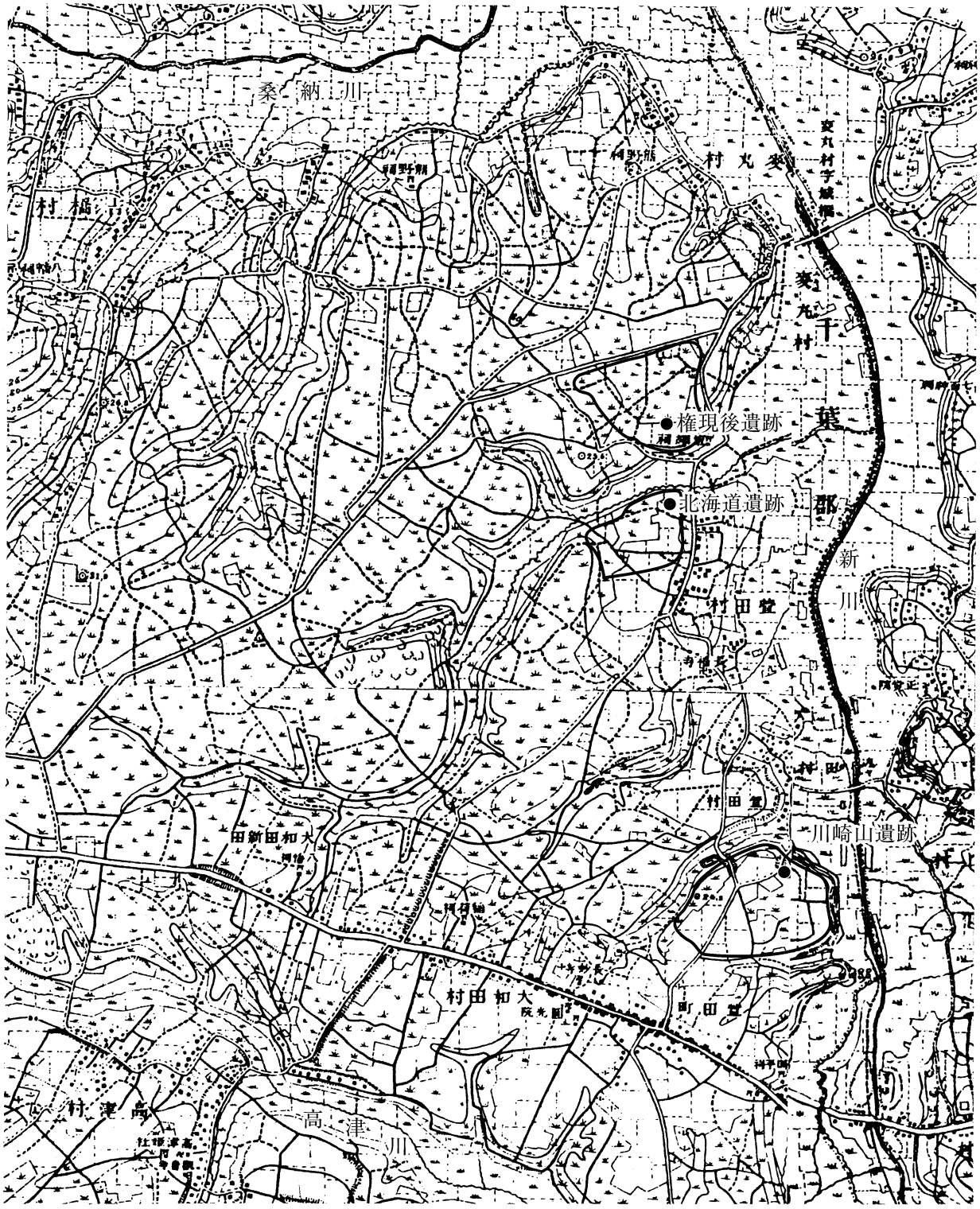
第１図　川崎山遺跡周辺の地形……0
第２図　川崎山遺跡各地点位置図……2
第３図　川崎山遺跡ｈ地点遺構配置図……3
第４図　縄文時代土器拓影図……4
第５図　01Ｄ遺構実測図……6
第６図　01Ｄ炭化物検出状況図……6
第７図　01Ｄ出土遺物……6
第８図　02Ｄ遺構実測図……7
第９図　02Ｄ出土遺物……7
第10図　04Ｄ遺構実測図……8
第11図　04Ｄ出土遺物……9
第12図　03Ｄ遺構実測図……11
第13図　03Ｄ焼土・粘土検出状況図……12
第14図　03Ｄピット土層断面図……12
第15図　03Ｄ出土遺物(1)……13
第16図　03Ｄ出土遺物(2)……14
第17図　03Ｄ出土遺物(3)……15
第18図　03Ｄ出土遺物(4)……16
第19図　03Ｄ出土遺物(5)……17
第20図　03Ｄ出土遺物(6)……18
第21図　03Ｄ出土遺物(7)……19
第22図　03Ｄ石製模造品等遺物分布図(1)……19
第23図　03Ｄ石製模造品等遺物分布図(2)……20
第24図　06Ｄ遺構実測図……22
第25図　06Ｄ焼土・粘土検出状況図……22
第26図　06Ｄ出土遺物(1)……23
第27図　06Ｄ出土遺物(2)……24
第28図　06Ｄ出土遺物(3)……25
第29図　06Ｄ石製模造品等遺物分布図……26
第30図　05Ｄ遺構実測図……28
第31図　05Ｄ焼土検出状況図……28
第32図　05Ｄ出土遺物……28
第33図　01Ｐ遺構実測図……29
第34図　03D・06D 作業導線想定図……31
第35図　03D・06D 石製模造品各工程模式図……32

表　目　次

第１表　川崎山遺跡各地点遺構概要……3
第２表　01Ｄ出土遺物観察表……5
第３表　02Ｄ出土遺物観察表……5
第４表　04Ｄ出土遺物観察表……9
第５表　05Ｄ出土遺物観察表……27
第６表　03Ｄ出土遺物観察表(1)……34
第７表　03Ｄ出土遺物観察表(2)……34
第８表　06Ｄ出土遺物観察表(1)……35
第９表　06Ｄ出土遺物観察表(2)……36

写真図版目次

図版１　遺跡周辺の地形
図版２　遺跡全景
図版３　01Ｄ遺構
図版４　02Ｄ・04Ｄ遺構
図版５　05Ｄ遺構
図版６　03Ｄ遺構(1)
図版７　03Ｄ遺構(2)
図版８　03Ｄ遺構(3)・06Ｄ遺構(1)
図版９　06Ｄ遺構(2)
図版10　06Ｄ遺構(3)
図版11　縄文時代・01・02・04D 遺物
図版12　04Ｄ遺物(2)・03D 遺物(1)
図版13　03Ｄ遺物(2)
図版14　03Ｄ遺物(3)
図版15　03Ｄ遺物(4)
図版16　03Ｄ遺物(5)・05Ｄ遺物
図版17　06Ｄ遺物(1)
図版18　06Ｄ遺物(2)
図版19　06Ｄ遺物(3)



第１図　川崎山遺跡周辺の地形（S＝1：20,000）

第１章　序　説

第１節　調査に至る経緯

平成11年３月，寺沢鴻氏から店舗建設のため，当該地に埋蔵文化財が所在しているか否かの照会が八千代市教育委員会に提出された。現地踏査では山林が良好に遺存している状況であった。当該地は周知の遺跡範囲内であり，近接地において発掘調査が実施され、多くの遺構・遺物が検出されていることから遺跡が所在する可能性が高いと考えられた。このため，照会地全域において確認調査が必要と判断し，その旨回答した。八千代市教育委員会は、事業者との協議により現況保存がむずかしいと判断されたため，記録保存として発掘調査を実施することとなった。確認調査は，事業計画が整い土木工事にかかる発掘の届出をまって平成11年４月に国庫補助事業として実施された。調査の結果，縄文時代，弥生時代後期，古墳時代中期の土坑・住居跡等の遺構，遺物が検出された。詳細は『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成12年度』参照のこと。

第２節　調査の方法と経過

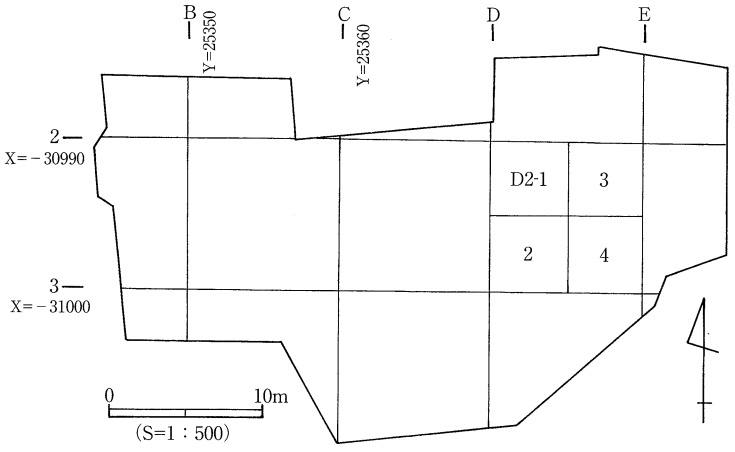
確認調査の成果から，表土下がソフトロームという基本層序だったため，遺物包含層は存在しないことが明白であった。確認面はソフトローム上面とした。

調査区の設定は，公共座標系に沿って10m方眼を設定し１グリッドとした。１グリッド内を5m毎に分割して最小グリッドとした。遺構外遺物の取り上げや遺構位置は，この最小グリッドを呼称した。呼称方法は東西にアルファベット，南北に数字とした。（下のグリッド配置図参照）

調査経過は，平成11年５月７日～６月14日の期間で実施した。事業区域の東側の一部を除いて本調査範囲のため，排土は場外処理となった。また工事計画上，西側から東側に遺構調査を行い順次引渡しを行った。５月７日～13日重機による表土剥ぎと排土処理，５月13日～17日遺構内切り株処理及びプラン確認作業，５月18日～５月25日01D.02D.03D.04D 遺構調査，５月25日～６月８日05D.06D 遺構調査，６月１日～６月10日遺構平面図作成，６月７日～６月14日遺物洗い，６月14日器材撤収を行い現場調査を終了した。

第３節　遺跡の位置と環境（第１～３図）

八千代市の地形は，市域中央やや東側を南北に貫流する新川と支流の神崎川，桑納川，高津川等の河川によって開析された支谷と台地から形成される。台地の形状は標高が南西側で高く，北東側に向けて段々低くなっている。これを段丘面の違いに従ってみると，南側が標高25～30mの下総上位面，北から東方向に標高20～25mの下総下位面と標高11～16mの千葉段丘面という３枚の段丘からなっている。5m 以下は沖積面で低地である。

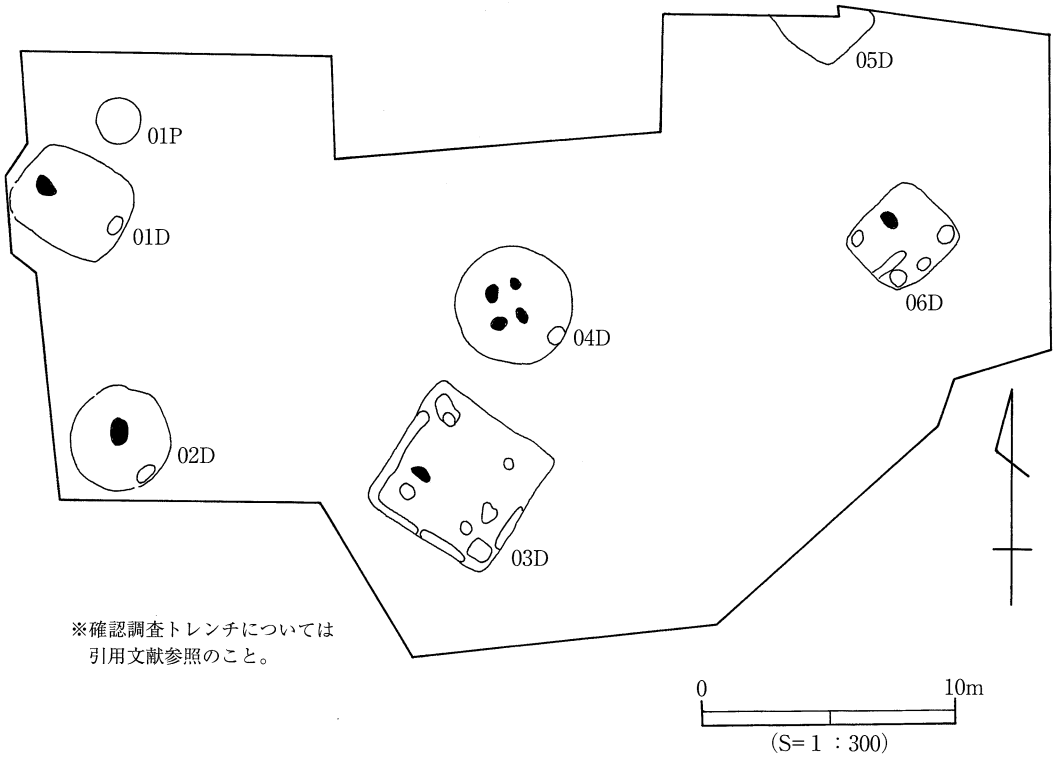


川崎山遺跡は本市南部萱田町地区の新川西岸を臨む台地上に位置している。標高20～23mで新川の低地との比高差は13～16mである。この台地は新川西岸から入り込む谷津によって北側と南側が開析されている。

第２図　川崎山遺跡各地点位置図（S＝1:5,000） ※スクリーントーン部分がｈ地点本調査範囲

本遺跡は平成15年10月現在10地点の発掘調査が実施されている。

地点名	遺　構　概　要	遺　物
a	弥生時代後期竪穴住居跡４軒，古墳時代中期竪穴住居跡３軒，時期不明溝状遺構１条，同土坑２基（本調査）	縄文土器（早期夏島式・条痕文系・前期黒浜式・十三菩提式・中期阿玉台式）　弥生土器（後期）古墳時代中期土師器・石製模造品（臼玉，棗玉，有孔円板，剣形品）
b	縄文時代陥穴１基（確認・本調査）	縄文土器（早期条痕文系・前期黒浜式・中期五領ヶ台式・下小野式・阿玉台式・後期加曽利Ｂ式）
c	先土器時代ユニット１カ所，縄文時代陥穴25基，弥生時代後期竪穴住居跡25軒，古墳時代前～後期竪穴住居跡25軒，奈良時代竪穴住居跡１軒（本調査）	先土器時代遺物（掻器，２次加工の剥片）　縄文土器等（早期井草式・前期浮島Ⅲ式・中期加曽利 E2式・後期加曽利 B2式・石鏃・石皿）　弥生土器等（後期弥生町式・臼井南式・土製品）　古墳～奈良・平安時代土師器（五領式・和泉式・鬼高式）・石製模造品（剣形品，有孔円板）・土製品
d	縄文時代陥穴17基・土坑48基，弥生時代後期竪穴住居跡５軒，古墳時代初頭竪穴住居跡19軒，古墳時代中期竪穴住居跡１軒，弥生～古墳時代掘立柱建物跡２棟・土坑11基平安時代竪穴住居跡１軒，近現代溝10条〔図示範囲は確認調査段階〕（本調査）	縄文土器（早・前・晩期）・尖頭器・石鏃　弥生土器（後期）・土製品・石製品　古墳時代（初頭）土師器・土玉・砥石・軽石・石製品・鉄製品・鉄滓　古墳時代（中期）土師器・石製模造品・軽石　弥生～古墳時代異形器台・高坏　平安時代土師器・砥石・鉄製品
e	縄文時代陥穴１基（確認・本調査）	粘土塊１点



第３図　川崎山遺跡ｈ地点遺構配置図

地点名	遺　構　概　要	遺　物
f	平安時代竪穴住居跡３軒　（本調査）	平安時代土師器・須恵器・灰釉陶器等
g	縄文時代陥穴４基　（確認・本調査）	なし
i	検出遺構なし　（確認調査）	なし
j	縄文時代陥穴３基，時期不明溝３条　（確認・本調査）	なし

第１表　川崎山遺跡各地点遺構概要

概観してみると，縄文時代陥穴群が台地中央部を中心に分布し，弥生時代後期中葉～後半にかけて台地縁辺部に集落が展開する。同様の占地で，古墳時代前期初頭と中期に比較的大きな規模で集落が営まれる。古墳時代後期～奈良・平安時代にかけては，散漫な検出例で，集落としては急速に衰退していくようである。

〔各地点引用文献〕

a 地点　平岡和夫他 1979『萱田町川崎山遺跡』八千代市・八千代市遺跡調査会
b 地点　八千代市教育委員会 1992『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告　平成３年度』
　　八千代市教育委員会 2002『千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書１』
c 地点　小川和博他 1999『千葉県八千代市川崎山遺跡　埋蔵文化財発掘調査報告書』八千代市
　　川崎山遺跡調査会
d 地点　常松成人・川口貴明 2003『千葉県八千代市川崎山遺跡ｄ地点』八千代市遺跡調査会
e 地点　八千代市教育委員会 1998『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成９年度』
f 地点　八千代市教育委員会 1999『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成10年度』
g 地点　八千代市教育委員会 1999『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成11年度』
h 地点　八千代市教育委員会 2000『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成12年度』
i 地点　八千代市教育委員会 2000『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成12年度』
j 地点　八千代市教育委員会 2003『千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書』

第２章　　検出された遺構と遺物

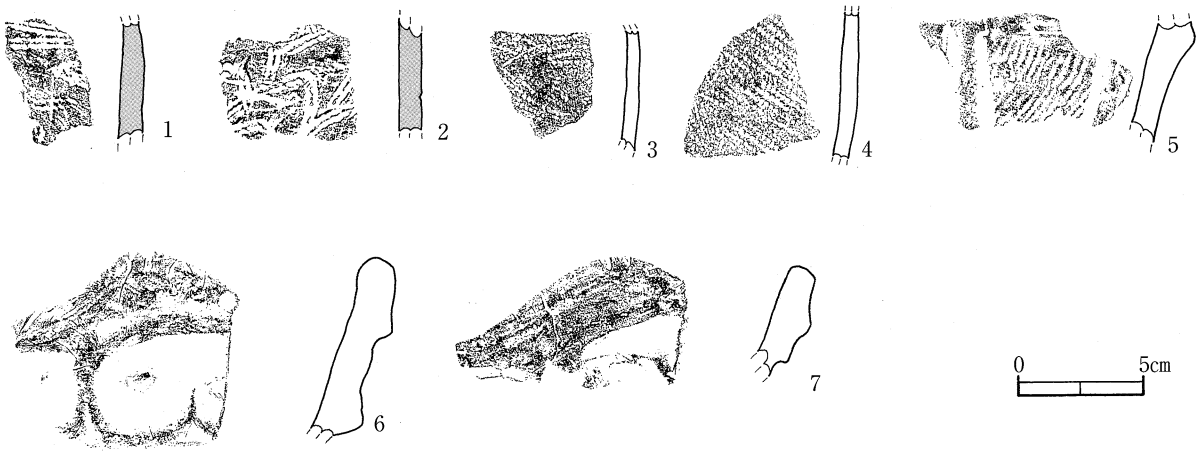
第１節　縄文時代

今回の調査では，本時代の遺構は検出されなかった。前述したが，本遺跡の他地点からも縄文時代にかかる遺構は陥穴遺構のみで，住居跡等は検出されていない。

出土遺物　（第４図　図版11）

出土した土器は砕片をふくめても20点程度と少なかった。

１～２は黒浜式土器である。撚糸文を施し，古段階に想定される。３～４は前期後半に想定される土器群で，薄い器面に細かい単節縄文を施す。胎土に雲母，長石，砂粒を混入する。５～７は加曽利Ｅ㈱式土器である。胎土，色調から同一個体の可能性がある。緩い波状口縁で，隆帯による渦巻文と沈線に区画化された縄文帯が見られる。



第４図　縄文時代土器拓影図

第２節　弥生時代

後期の住居跡３軒を検出した。位置は調査区中央から西側に偏って点在する。本遺跡のａ，ｃ地点において各々４軒, 13軒が検出されている。また，南側の谷津を隔てた上ノ山遺跡では５軒が検出されている。これらの遺構は後期においても時間幅がみられ，中葉から後半に位置づけられる。

０１Ｄ住居跡（第５．６図　図版３）

状　況　主軸方向　N－65°－W

規　　模　4.65m ×3.7m の隅丸長方形

確認面　ソフトローム上面　壁高はＢ－Ｂ’間　Ｂ20cm　Ｂ’30cm　Ｃ－Ｃ’間　Ｃ39cm　Ｃ’15cm

床　面　ハードローム上面を床面としている。住居掘り方は壁際で深く，中央がやや高い。当初の掘り込み後, 3～5cm 程度部分的に埋めて平坦面としている。硬化面はP1から炉にいたる部分で締まっている。

炉　　90cm ×60cm の楕円形で深さ8cm を測る。E' 側に偏って強く焼けた底面が見られる。

ピット　P1のみである。85cm ×57cm の楕円形で深さ4～6cm である。炉及び床の硬化面との位置関係から出入り口ないし貯蔵用にかかる施設と考えられる。

その他　住居壁際を巡る状態で炭化材が検出された。床面に密着し，焼土はあまり含まれていない。炭化物の量，向き等から見ても焼失家屋とは考えられない。

遺　物（第７図　図版11　第２表）

全体で40点程度出土している。位置はP1を中心に出土している。図示した遺物は甕形土器の口縁～胴部の２点である。

第２表　０１Ｄ出土遺物観察表　（単位：cm）

挿図番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	手　法　上　の　特　徴
第７図１	弥生　甕	—	—	—	長石　雲母小片	黒茶褐色	二段のＳ字状結節文の上下に付加縄文施文。外面に炭化物付着。胴部一部遺存
2	弥生　甕	19.5	5.1	—	長石	外暗褐色 内淡茶褐色	二段の輪積痕口辺で上段に付加縄文施文。口縁部はコの字状で縄文押圧　口縁部1/5 遺存

０２Ｄ住居跡（第８図　図版４）

状　況　主軸方向　N－34°－W

規　　模　4.15m の円形　西側で大きくカクランを受けている。

確認面　ソフトローム上面　壁高はＡ－Ａ'間　Ａ－cm　Ａ'31cm　Ｂ－Ｂ'間　Ｂ35cm　Ｂ'34cm

床　面　ハードロームを10cm 程度掘り下げ床面としている。住居掘り方はほぼ平らで，3cm 程度全体的に埋め戻して平坦面としている。硬化面はP1から炉にかけて直線上に広がっている。

炉　　105cm ×70cmの楕円形で深さ6～12cmである。全体に焼土が堆積し，被熱した底面が見られる。

ピット　P1のみである。80cm ×40cm の楕円形で深さ12cm である。炉及び床の硬化面との位置関係から出入り口ないし貯蔵用にかかる施設と考えられる。

遺　物（第９図　図版11　第３表）

全体で20点程度出土している。位置は東壁際を中心に集中している。図示した遺物は甕形土器の口縁部１点のみである。

第３表　０２Ｄ出土遺物　（単位：cm）

挿図番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	手　法　上　の　特　徴
第９図１	弥生　甕	18.7	7.2	—	長石　雲母小片	外暗褐色 内淡茶褐色	複合口縁上に付加縄文施文。口縁部はコの字状で縄文押圧。外面きめの細かいハケなで。内面ハケ・ヘラなでとヘラ磨き。口辺部～頸部1/4 遺存

０４Ｄ住居跡（第10図　図版４）

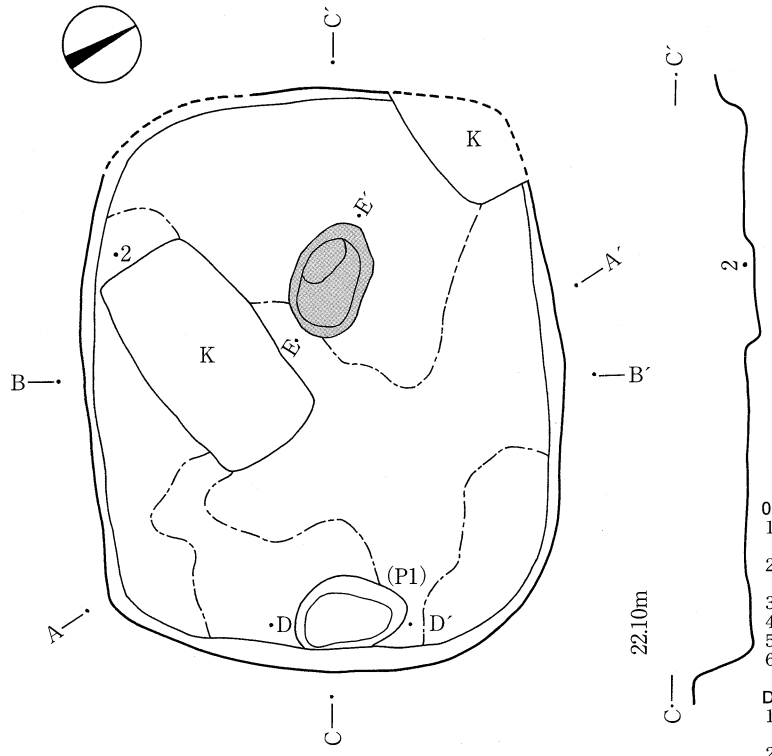
状　況　主軸方向　N－68°－W

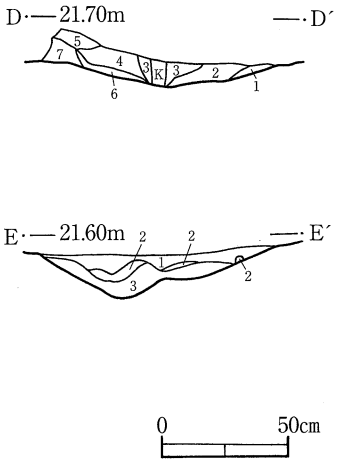
規　　模　4.65m ×4.4m のほぼ円形

確認面　ソフトローム上面　壁高はＢ－Ｂ'間　Ｂ50cm　Ｂ'22cm　Ｃ－Ｃ'間　Ｃ41cm　Ｃ'39cm

床　面　ハードロームを20cm 程度掘り下げ床面としている。住居掘り方はほぼ平らで，3cm 程度全体的に埋め戻して平坦面としている。ハードロームで全体的に締まっているが，部分的によく硬化している。

炉　　１～４が検出された。炉1 98cm ×80cm の楕円形で深さ11～15cm である。底面はやや被熱している。炉2 65cm×45cm の楕円形で深さ６cm である。底面は被熱している。炉3 78cm×65cmの楕円形で深さ14～16cm である。底面はやや被熱している。炉4 48cm ×35cm の楕円形で深さ４cm を測る。底面は焼けていない。





01D 土層説明

1．黒 褐 色 土　1㎜大ローム粒混入。粒子細かく，ややしまる。
2．黒 褐 色 土　1層類似。ローム粒やや多い。しまっている。
3．暗 褐 色 土　ローム粒主に暗褐色土混入。
4．暗 褐 色 土　ローム，黒色土混合層。しまっている。
5．暗 褐 色 土　炭化物主体。焼土ふくまず。
6．暗 褐 色 土　4層類似。ややしまりにかける。

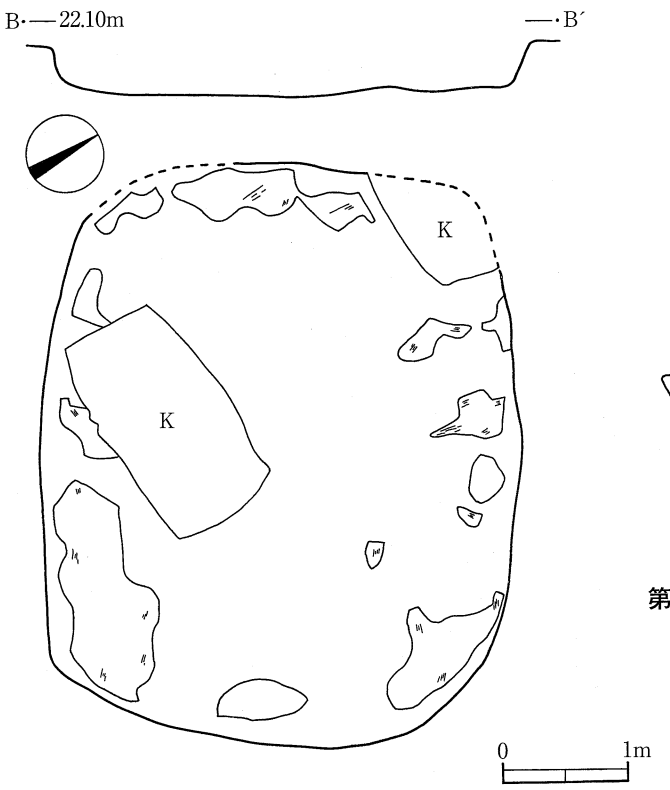
D-D´間土層説明

1．褐　色　土　ローム粒，暗褐色土混合層。しまっている。
2．暗 褐 色 土　ローム，暗褐色土混合層。焼土粒混入。しまっている。
3．暗 褐 色 土　ローム，暗褐色土混合層。焼土粒混入。しまっている。
4．赤 褐 色 土　焼土粒主体。炭化粒混入。
5．暗赤褐色土　3層類似。暗褐色土の混入多い。やや軟質。
6．褐　色　土　ローム粒主体。焼土粒ごく少量混入。
7．褐　色　土　暗褐色土，ローム粒混合層。ややしまっている。

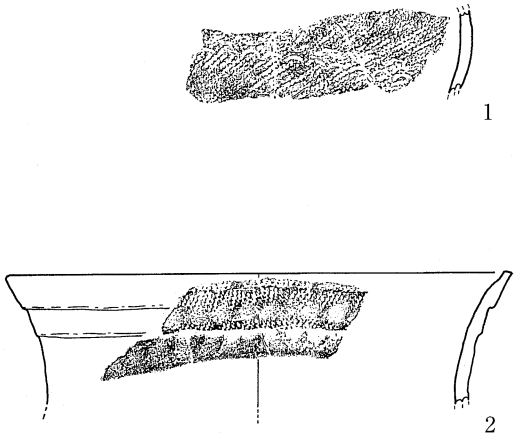
E-E´間土層説明

1．黒 褐 色 土　焼土粒2～3㎜大混入。
2．赤 褐 色 土　焼土ブロック。
3．褐　色　土　ロームブロック。

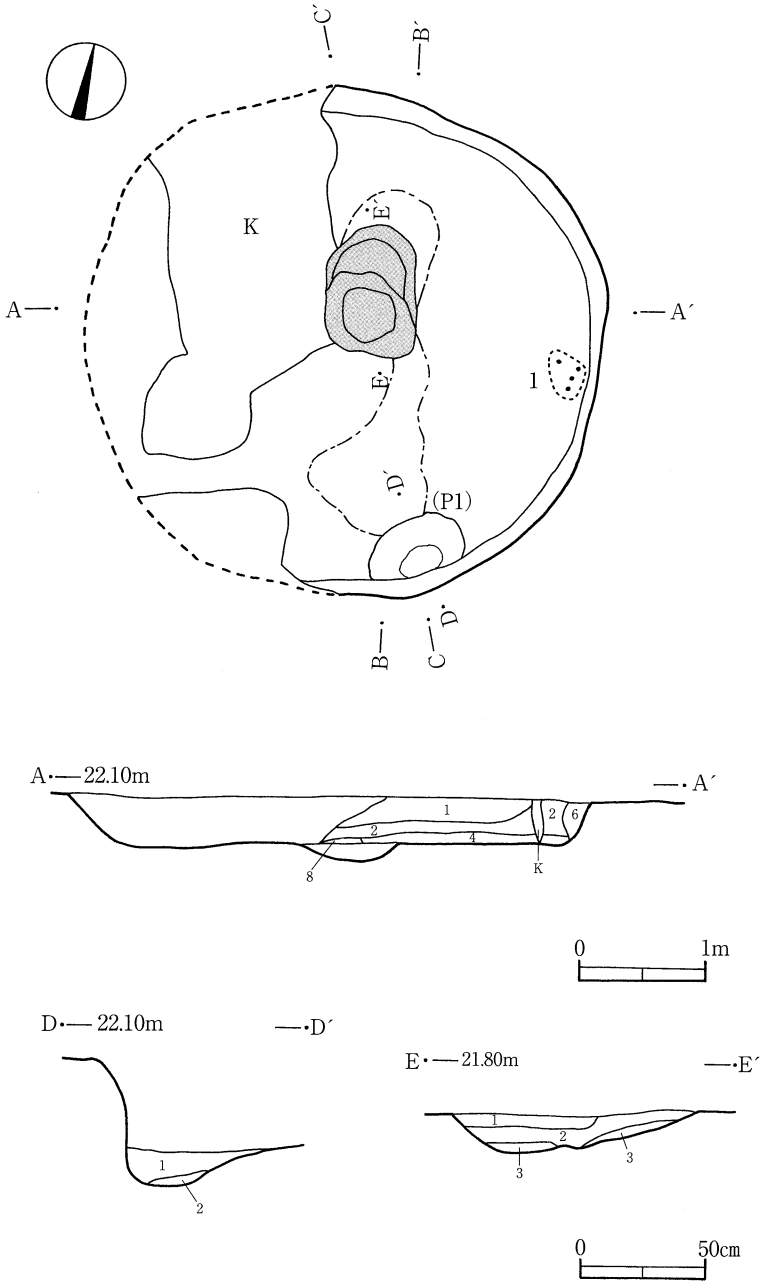
第5図　01D遺構実測図



第6図　01D炭化物検出状況図



第7図　01D出土遺物



02D 土層説明

1．黒褐色土　ローム粒少量含む。ややふわふわ。
2．暗褐色土　1層類似。ローム粒やや多い。ややふわふわ。
3．暗褐色土　ローム，黒色土混合層。しまっている。
4．褐 色 土　ローム主体。暗褐色土粒少量含む。しまっている。
5．暗褐色土　粘性あり。しまっている。
6．褐 色 土　ローム，黒色土混合層。焼土粒，炭化粒ごく少量含む。ややふわふわ。
7．褐 色 土　ローム土主体。ややしまっている。
8．暗褐色土　焼土粒混入。

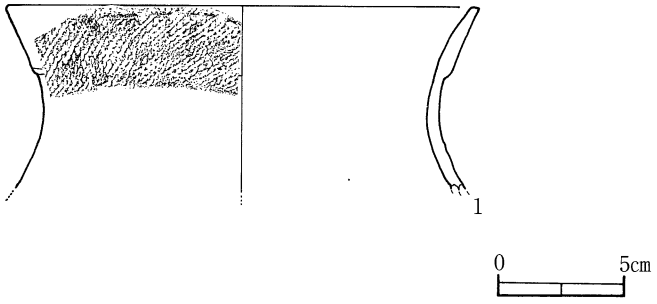
D-D´間土層説明

1．暗褐色土　ローム粒少量混入。粘性あり。しまっている。
2．褐 色 土　ローム粒主に暗褐色土少量混入。

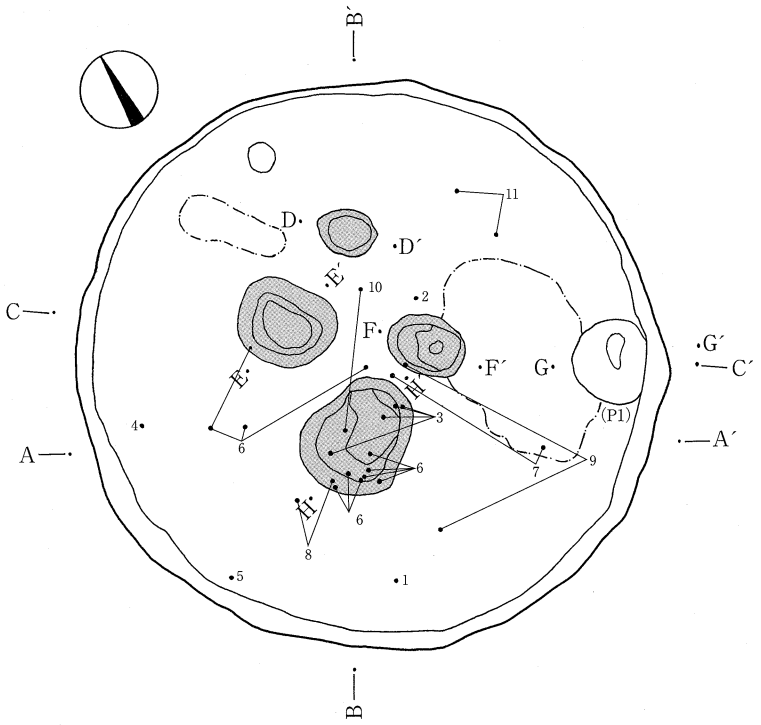
E-E´間土層説明

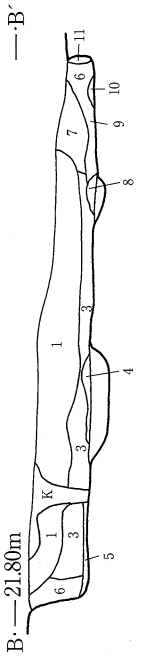
1．黒褐色土　ローム粒，3～5㎜大焼土ブロック，ロームブロック混入。
2．赤褐色土　焼土粒，ローム粒混入。
3．褐 色 土　ローム土主体。やや被熱した状態。

第8図　02D遺構実測図



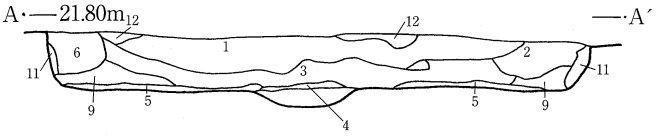
第9図　02D出土遺物

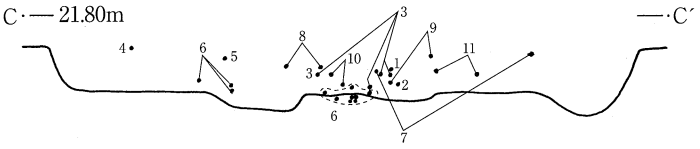


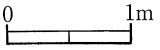


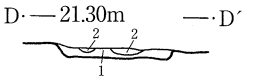
04D 土層説明

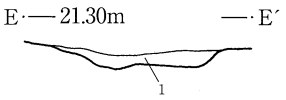
1．黒褐色土　粒子細かい。
2．黒褐色土　1層類似。ややしまっている。
3．暗褐色土　ローム，黒色土混合層。しまっている。
4．暗褐色土　ローム，黒色土混合層。2～3㎜大焼土粒混入。
5．褐 色 土
6．明褐色土　ローム粒，暗褐色土混合層。粒子細かくやや軟質。
7．暗褐色土　ローム，暗褐色土混合層。粒子細かくやや軟質。
8．明褐色土　焼土粒少量混入。
9．暗褐色土　7層類似。ローム粒やや多く，しまっている。
10．暗褐色土　ローム粒主に，暗褐色土少量混入。
11．褐 色 土　ローム土主体。やや軟質。
12．褐 色 土　やや軟質。

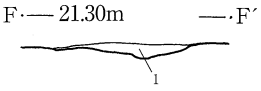


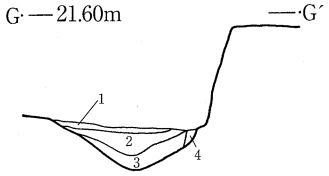












D-D′間土層説明

1．黒褐色土　2～3㎜大焼土粒混入。
2．褐 色 土　ローム土主に黒色土，焼土粒ごく少量混入。

E-E′間土層説明

1．黒褐色土　2～3㎜大焼土粒混入。

F-F′間土層説明

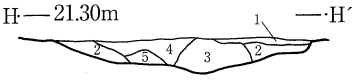
1．黒褐色土　2～3㎜大焼土粒混入。

G-G′間土層説明

1．黒褐色土　粒子細かい。
2．暗褐色土　黒色土，ローム混合層。しまっている。
3．暗褐色土　黒色土，ローム混合層。ローム粒やや多い。

H-H′間土層説明

1．黒褐色土　焼土粒少量含む。
2．褐 色 土　ローム土主に焼土粒少量含む。
3．赤褐色土　焼土粒主に焼土ブロック混入。
4．暗褐色土　黒色土，焼土粒混入。
5．暗褐色土　焼土粒，暗褐色土混合層。



第10図　04D遺構実測図

ピット　P1のみである。68cm ×55cm の楕円形で深さ19cm である。炉及び床の硬化面との位置関係から出入り口ないし貯蔵用にかかる施設と考えられる。

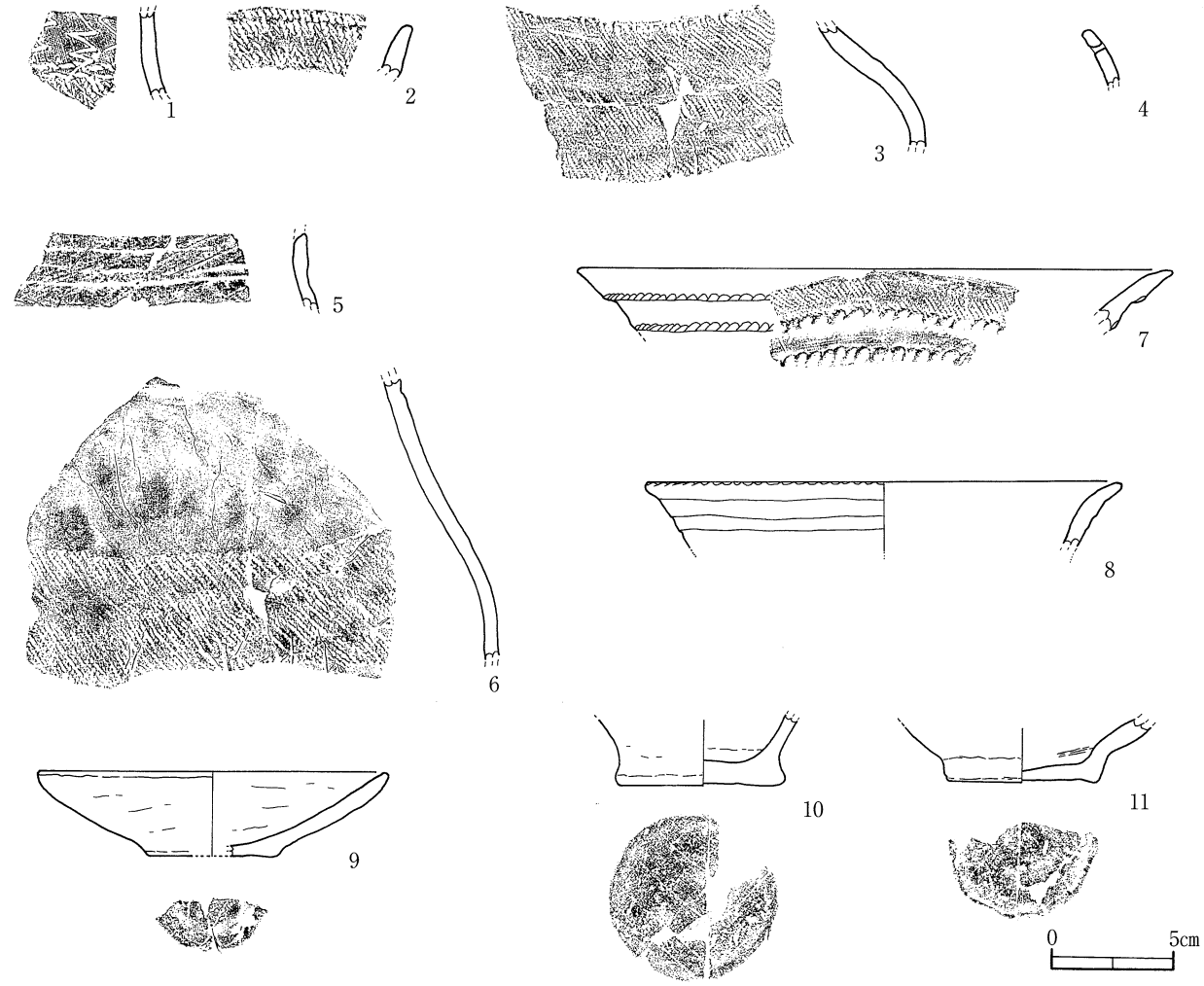
遺　物（第11図　図版11.12 第４表）

全体で150点程度出土している。位置は住居中央から南東側に集中している。全体に覆土中出土の土器が多く6のみが床面直上である。図示した遺物は甕形土器の口縁～胴部を中心に，壺形土器底部，浅鉢等である。

第４表　０４Ｄ出土遺物観察表

（単位：cm）

挿図番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	手　法　上　の　特　徴
第11図１	弥生　甕	—	—	—	長石　雲母小片 砂粒	外淡茶褐色 内暗褐色	縦位山形文。肩部に二段の結節文。２と同一個体　頸部一部のみ
2	弥生　甕	—	—	—	長石　砂粒	淡茶褐色	複合口縁上に付加縄文　口縁部コの字状で同押圧　１と同一個体　口辺部一部のみ
3	弥生　甕	—	—	—	長石　雲母小片	外黒茶褐色 内淡茶褐色	頸部付加縄文で下部 RL 縄文　内面ヘラなで７と同一個体　頸部～胴上半部遺存
4	弥生　無頸壺	—	—	—	長石　雲母小片	暗褐色	両面なで整形　焼成前に２孔一対の穿孔あり　口辺部のみ
5	弥生　甕	—	—	—	石英　雲母小片	淡褐色	多段の輪積痕を持つ　口辺部のみ
6	弥生　甕	—	—	—	石英　雲母小片	淡褐色～橙褐色	口縁下無文帯部分は細いヘラ磨き状縦なで　その下に付加縄文施文　内なで整形後 ヘラ磨き　胴部1/4 遺存
7	弥生　甕	24.0	2.5	—	長石　雲母小片	暗褐色	二段輪積痕の複合口縁で段の下側に押圧による刻目を施文　上段の口縁部に RL 縄文施文　内なで整形　３と同一個体　口縁部1/5 遺存
8	弥生　甕	19.4	2.6	—	長石　石英	淡褐色	多段輪積痕の口縁　口縁部棒状工具による刻目　内なで整形　口縁部1/5 遺存
9	弥生　鉢	14.1	3.3	5.0	長石　雲母小片	茶褐色一部黒斑	内外面ヘラなで整形　底部木葉痕　口縁～底部1/5 遺存
10	弥生　甕	—	2.7	6.7	長石　雲母小片	暗褐色～黒褐色	内外面なで整形　底部木葉痕　底部3/4 遺存
11	弥生　甕	—	2.2	6.0	長石　雲母小片	橙褐色	外面なで整形　内一部ハケなで整形　底部木葉痕　底部1/2 遺存



第11図　04Ｄ出土遺物

第３節　古墳時代

中期の石製模造品工房跡２軒と後期の竪穴遺構１軒，時期不明の土坑１基を検出した。位置は調査区中央から東側において検出されている。また，同遺跡のａ地点では中期の竪穴住居跡が３軒，ｃ地点では中期及び後期の竪穴住居跡が各々24軒と２軒検出されている。中期の遺構はやや時間幅がみられ，中葉から後半に位置づけられる。また，後期についても６世紀代～７世紀初頭とばらつきがみられる。

０３Ｄ住居跡（第12.13.14図　図版６．７．８）

状　況　主軸方向　Ｎ－64°　－Ｗ
　　規　　模　5.5m ×5.55m の隅丸方形

確認面　ソフトローム上面　壁高はＡ－Ａ’間　Ａ41cm　Ａ’34cm　Ｂ－Ｂ’間　Ｂ33cm　Ｂ’41cm

床　面　ソフトローム中を床面としている。住居掘り方はP1～ P4を順に結んだ範囲のやや外側で台状に浅く，それより外側から壁際部分で深くなっている。掘り方から7～12cm ローム土を主体に黒色土を混入した土を埋め戻して床面としている。硬化面は住居中央と炉周辺において顕著である。また，住居掘り方で示した部位でいうと周辺部でやや硬く，中央部でやや軟弱である。

炉　　78cm×47cm の楕円形で深さ10cm である。状態としては，焼土や灰等の堆積もなく底面に強く焼けた痕跡も明瞭ではないため，そう使いこまれているとはいえない。

周溝　部分的に遺存する。幅20cm で床面からの深さは6～7cm である。覆土は暗褐色土でロームと黒色土の混合層である。

ピット　P1～ P8が該当する。P1～ P4が主柱穴，P7 が貯蔵穴，P5.6.8 が工作用ピットと想定できる。
主柱穴はおおむね35～40cm の円形で，深さは P1-33cm，P2-47cm，P3-75cm，P4-48cm である。
貯蔵穴は0.85m ×0.8m の隅丸方形で深さ37cm である。
工作用ピットは P5.6が連結した形で1.75m ×1.05m のひょうたん形，P6から P5にかけてスロープ状に深くなる。５～13cm である。P8は0.63m ×0.4m の不整楕円形で，明確な掘り込みではないが深さ７～９cm である。また，付属施設として P8を囲むように幅25～40cm，高さ5cm 程度の土堤が遺存している。更に，淡灰色粘土が P8 脇から検出された。

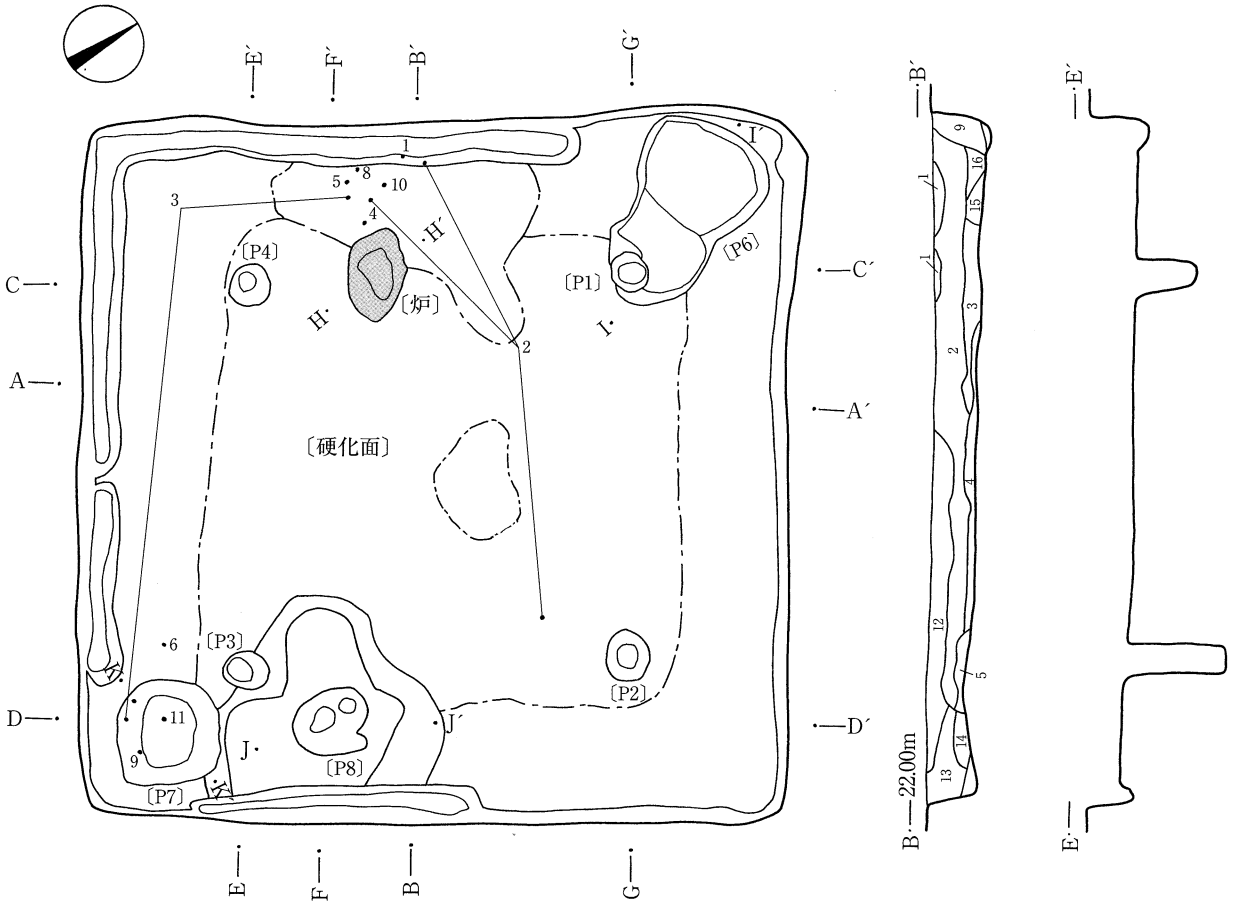
その他　住居壁際を巡る状態で炭化粒，焼土粒混じりの褐色土が検出された。床面に密着し，厚さは10cm 程度である。

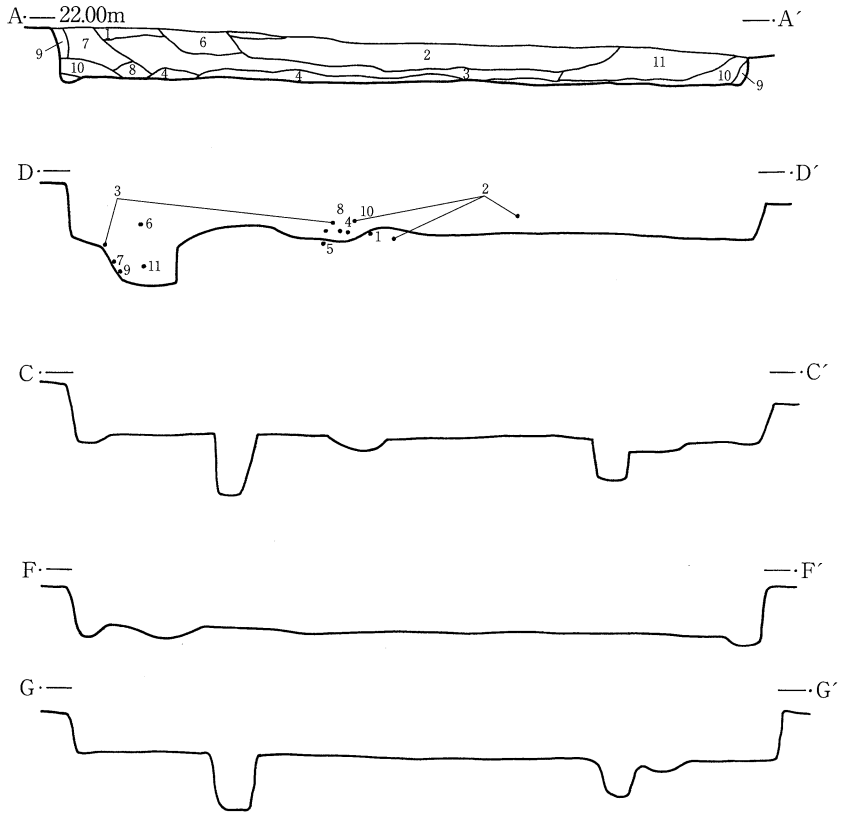
遺　物（第15.16.17.18.19.20.21図　図版12.13.14.15.16　第６．７表）

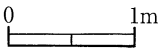
図示した土器は全て，P7 内及び床面に遺棄された一括遺物である。

石製模造品では，荒割段階の石にやや浮いた出土状態のものもあるが，ほぼ床面から出土している。出土地点も炉，P8周辺，P5.6の底面に比較的限定される。作業スペース，剥片・未成品の出土状況や淡灰色粘土等を考慮して工房として性格づけられよう。

遺物総点数は剥片を含めて800点程度出土している。石製模造品の成品・未成品・原石・剥片の総重量は，12.76kg である。



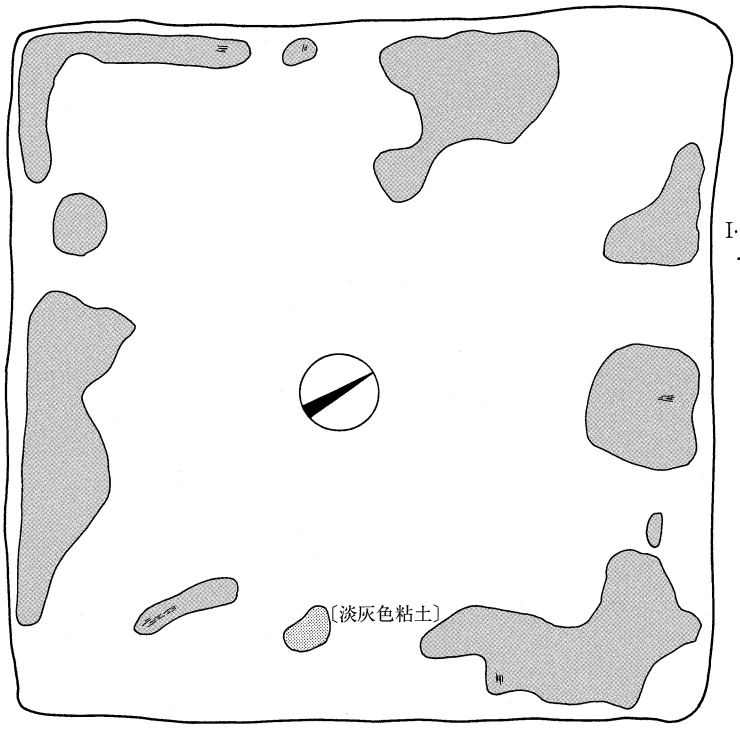




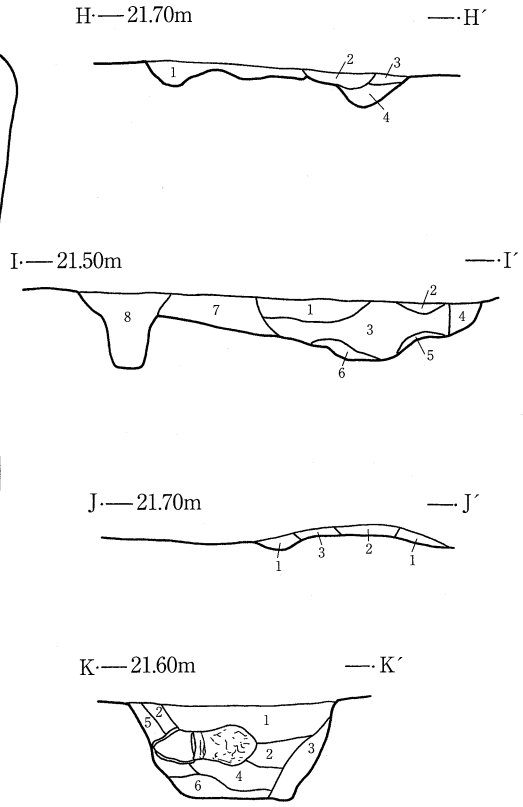
03D土層説明

1．暗褐色土　ローム粒に黒色土粒少量混入。
2．黒褐色土　ローム粒少量含む。ややふかふかする。
3．黒褐色土　ローム粒含まず。ふかふかする。
4．褐 色 土　ローム粒，黒色土粒混合層。ややしまっている。
5．褐 色 土　ローム粒主体。暗褐色土粒少量混入。
6．暗褐色土　ローム，黒色土粒混合層。ややしまっている。
7．褐 色 土　ローム，黒色土粒混合層。ややしまっている。
8．褐 色 土　ローム，黒色土粒混合層。ややしまっている。
9．褐 色 土　ローム粒主体。暗褐色土粒含む。
10．褐 色 土　ローム粒，暗褐色土混合層。焼土粒，炭化粒含む。
11．黒褐色土　ローム粒少量混入。ややふかふかする。
12．黒褐色土　２層類似。ローム粒の割合がやや多い。ややしまている。
13．褐 色 土　暗褐色土粒混入。しまっている。
14．褐 色 土　13層類似。ロームブロック混入。
15．暗褐色土　ローム粒少量混入。炭化粒含む。ややぼそぼそ。
16．暗褐色土　褐色土に近い。ローム粒混入。ややぼそぼそ。

第12図　03Ｄ遺構実測図



第13図　03Ｄ焼土・粘土検出状況図



第14図　03Ｄピット土層断面図

0　1m

0　50cm

H-H′間土層説明
1．褐　色　土　ローム土＋黒色土。
2．暗赤褐色土　焼土粒，黒色土混合層。
3．暗 褐 色 土　焼土粒少量混入。
4．褐　色　土　2～3 ㎜大焼土粒混入＋ローム土。

I-I′間土層説明
1．暗褐色土　ローム，黒色土混合層。しまっている。
2．暗褐色土　ローム，黒色土混合層。しまっている。
3．暗褐色土　黒色土主にローム粒少量混入。しまっている。
4．暗褐色土　ローム粒混入。
5．褐 色 土　ローム主に黒色土混入。
6．褐 色 土　ローム主に暗褐色土混入。
7．暗褐色土　黒色土，ローム混合層。しまっている。
8．黒褐色土　ローム，黒色土混合層。粒子細かい。

J-J′間土層説明
1．褐　色　土　ローム土主に黒色土少量含む。
2．青灰褐色土　粘土主体。黒色土少量含む。
3．暗 褐 色 土　青灰褐色粘土，黒褐色土混入。

K-K′間土層説明
1．黒 褐 色 土　ローム粒，炭化粒混入。
2．暗 褐 色 土　ローム粒混入。
3．黒 褐 色 土　炭化粒混入。
4．暗赤褐色土　焼土粒，黒色土混合層。
5．褐　色　土　ローム主体。炭化粒混入。
6．褐　色　土　ロームブロック＋暗褐色土。

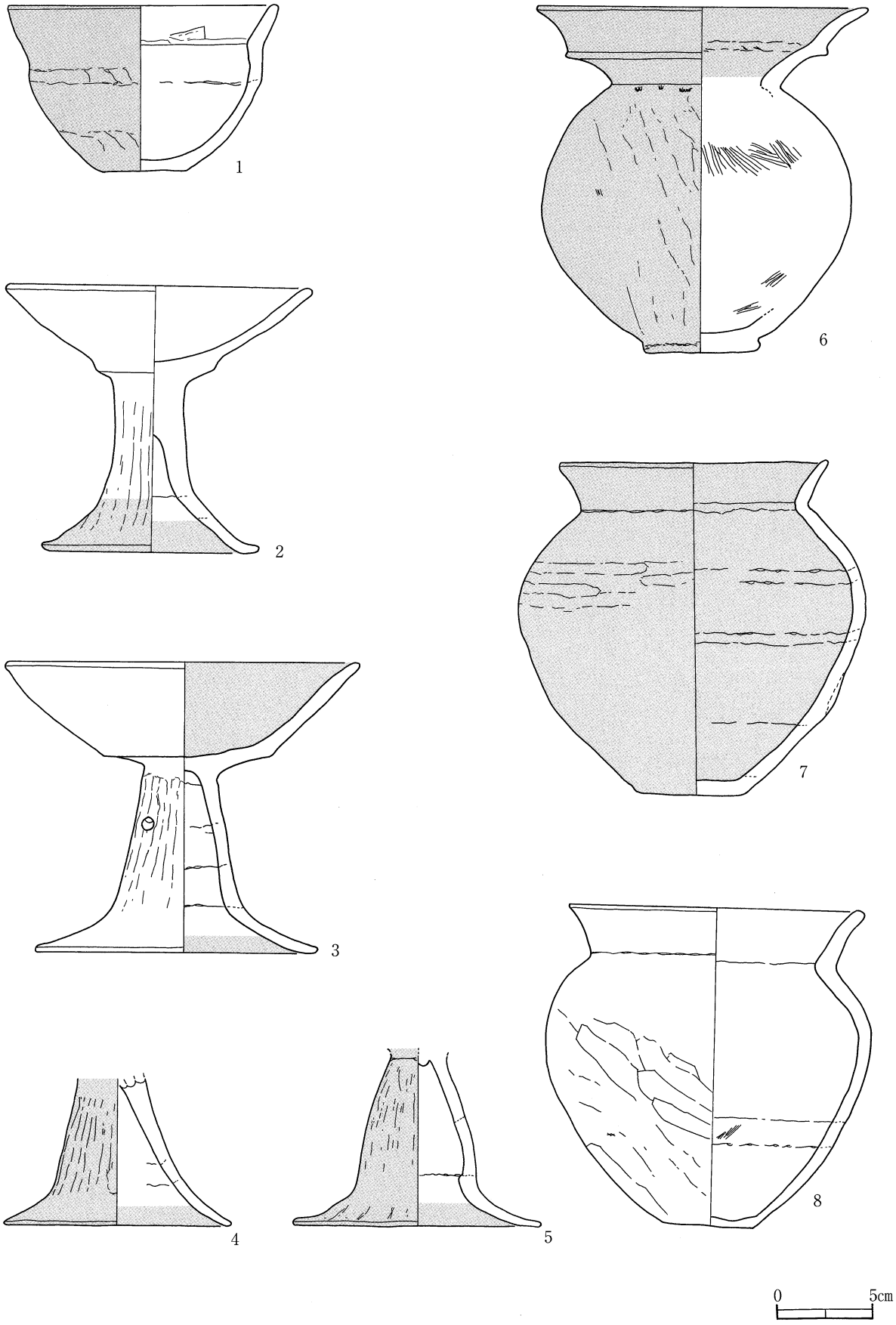
０３Ｄの遺構について

前述したように，本跡は石製模造品の工房跡である。住居施設では炉，主柱４本，貯蔵穴１口からなる。工作用施設では，第22.23 図［石製品・剥片］の遺物分布状況から，炉と P8に集中していることがわかる。また，P5.6の底面に近い位置から，荒割段階の比較的小さい個体が出土しているので，集積場ないしは荒割時の作業場として考えられる。

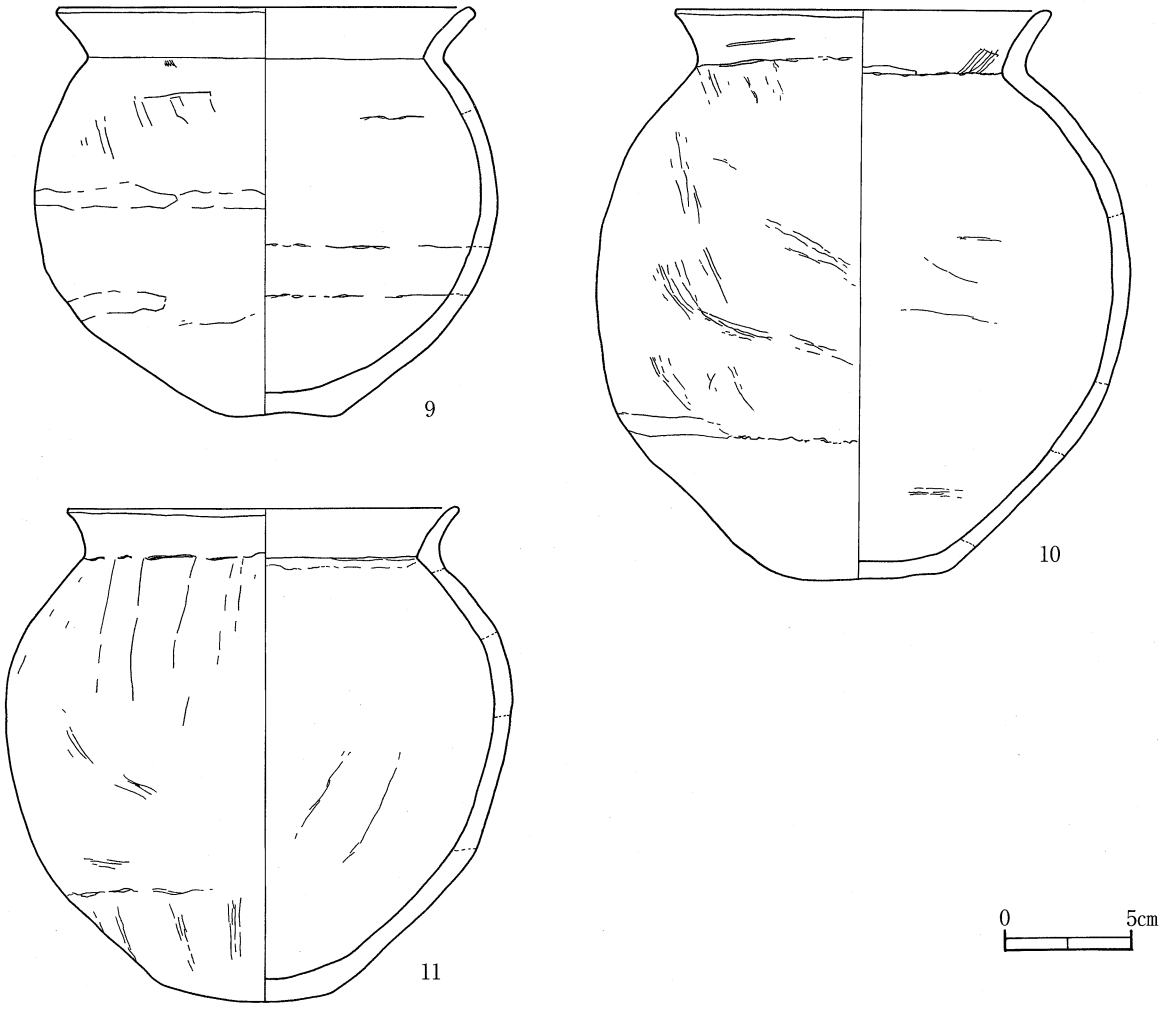
作業場所を，第22.23 図石製模造品の各作成段階の出土状況から想定してみる。

原石～荒割の個体は P2外側の壁際と先述した P5.6に出土している。工具の87は原石とともに出土した。集積場所はこの２カ所に想定される。

臼玉は形割，穿孔，研磨（仕上げ）に従ってみていく。形割は P8と炉に双方出土している。穿孔時には炉周辺に集中する。研磨は P8に集中している。また，穿孔時の台石ないし研磨材と考えられる86は，P8と炉の中間位置から出土している。更に，淡灰色粘土が P8脇に遺存していることから作業にともなうものと想定される。以上のことから形割（P8と炉）→穿孔（炉）→研磨（P8）と区分けした作業導



第15図　03D出土遺物(1)



第16図　03D出土遺物(2)

線が想定される。

剣形品・有孔円板等については，個体数が少ない。P2周辺に出土している。

このように，工房内における各作業段階の区分けが整っていたと想定される。

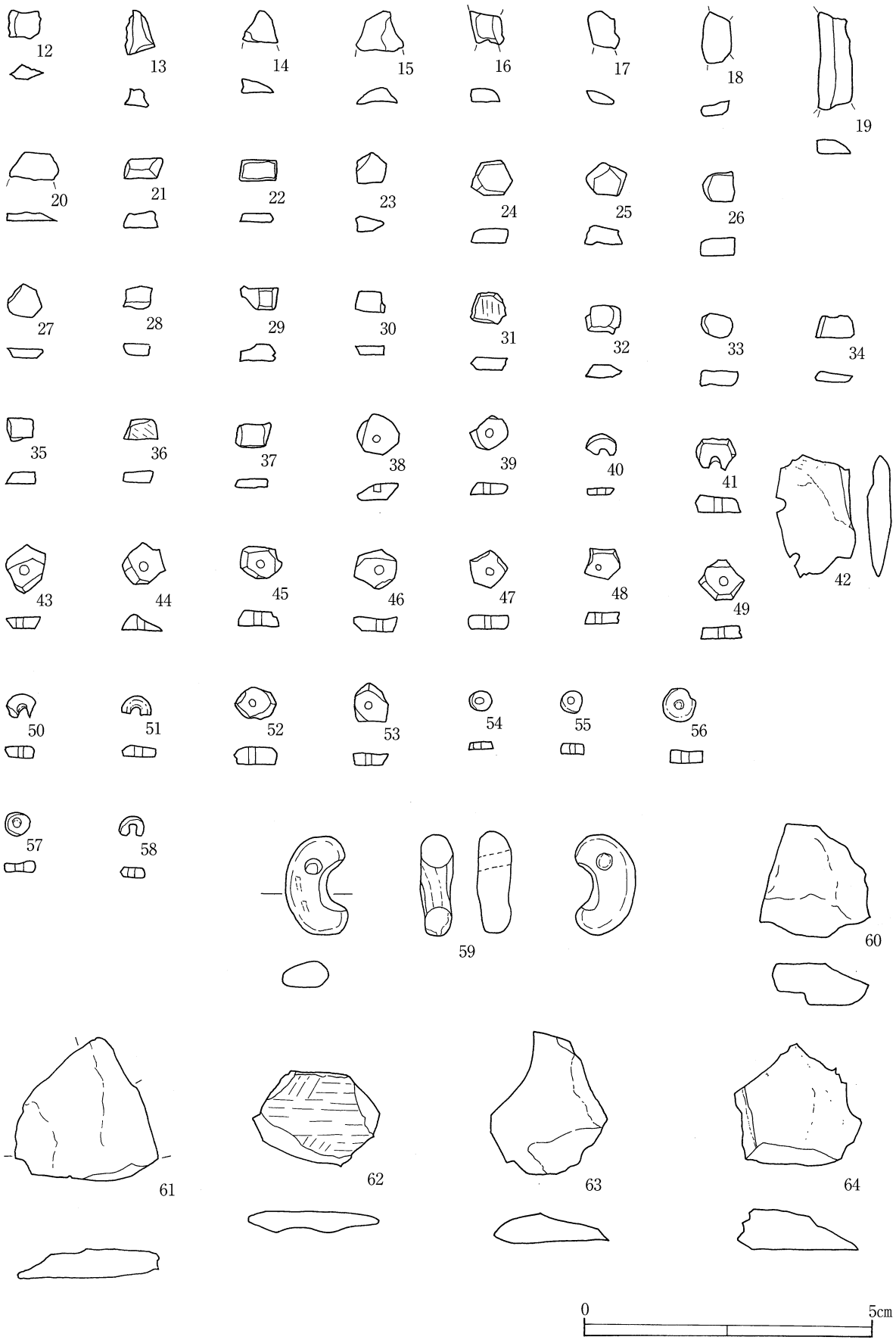
また，基礎データのその他の項で述べたが，焼土粒混じりの褐色土については遺構廃絶時の行為と想定される。それは，P7セクションの４層に同一の土層が見られ，その上層に完形遺物が廃棄されているからである。つまり，住居廃絶の儀式後に遺物の意図的な廃棄を行ったと言えよう。さらに，石製模造品工房にかかる原石，未成品，剥片，工具についても遺棄の可能性が高い。高坏２点は坏部と脚部が互いに離れた地点からの出土であり，意図的な廃棄と言える。

石製模造品について

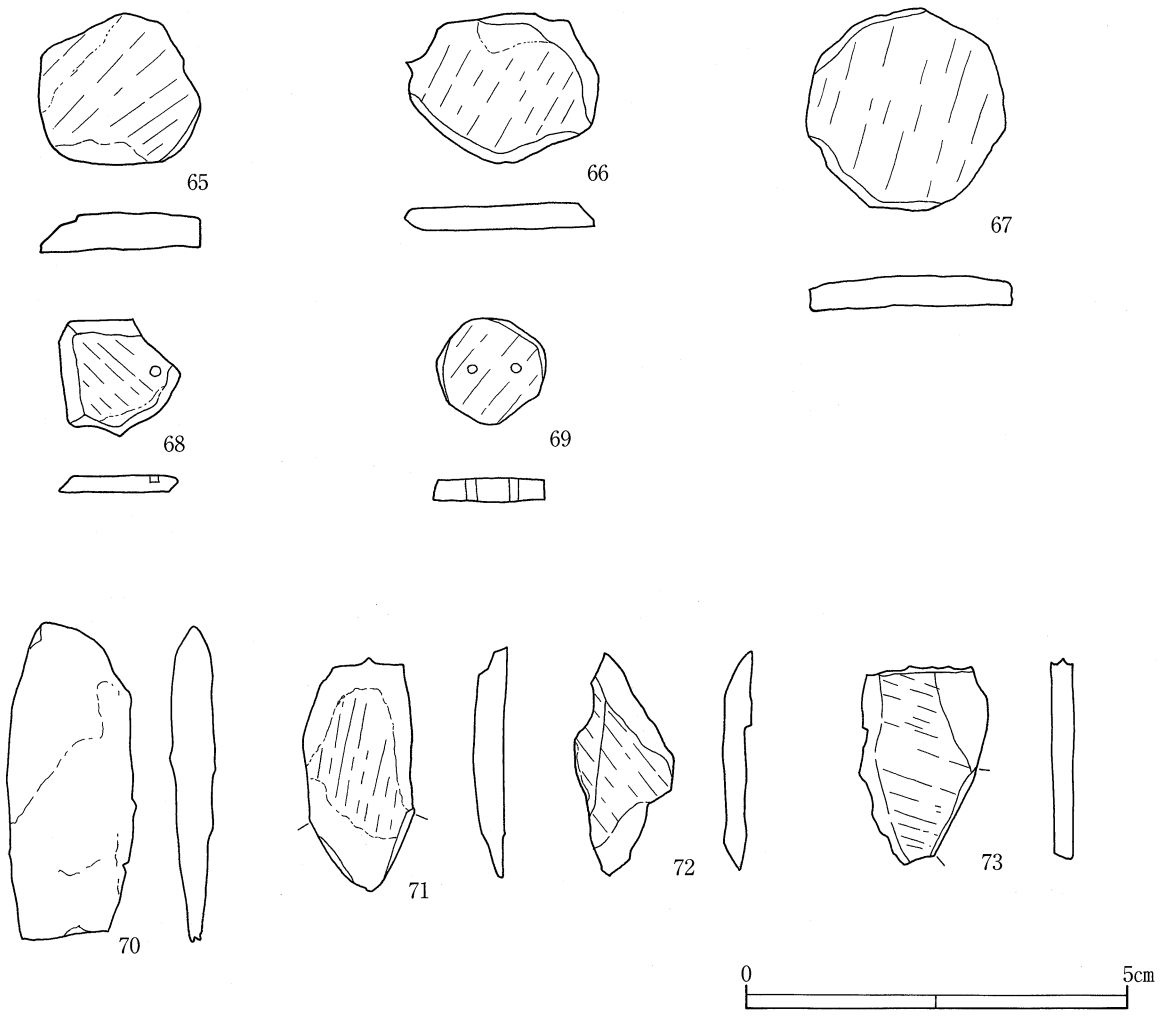
遺構としての石製模造品については前項で述べたが，遺物について若干触れたい。

03D で出土している種類は，臼玉・勾玉・有孔円板・剣形品・器物(特定できず)である。工具では，台石(研磨材としての使用も考慮される)・ハンマーストーン・軽石が出土している。石材では原石及び荒割段階のものが出土している。以下，第17～21図に従って説明を加えたい。

12～58(第17図)は，臼玉の製作工程を示したものである。形割Ⅰ→形割Ⅱ→穿孔→研磨→仕上げの工



第17図　03D出土遺物(3)



第18図　03D出土遺物(4)

程で製作される。12～22は形割Ⅰで，偏平四角体を作る工程である。19は縦長の剥片を四角に切截する前段階である。23～37は形割Ⅱで，四角体の側縁を切截する段階である。31.36では上面に研磨されているがまれである。38～49.52.53は穿孔で，錐状工具により穿孔する段階である。何個か重ねて穿孔することにより，穴の位置がずれたり，貫通してない個体が見受けられる。50.51.54～58は研磨で，側縁と上下面を磨って仕上げている。研磨の段階としては，上下面→側縁の順でおこなっている。54.55 が成品に近いもので，仕上げ研磨段階である。

勾玉は59の１点のみである。ほぼ成品と想定される。立体感のある仕上がりになっている。

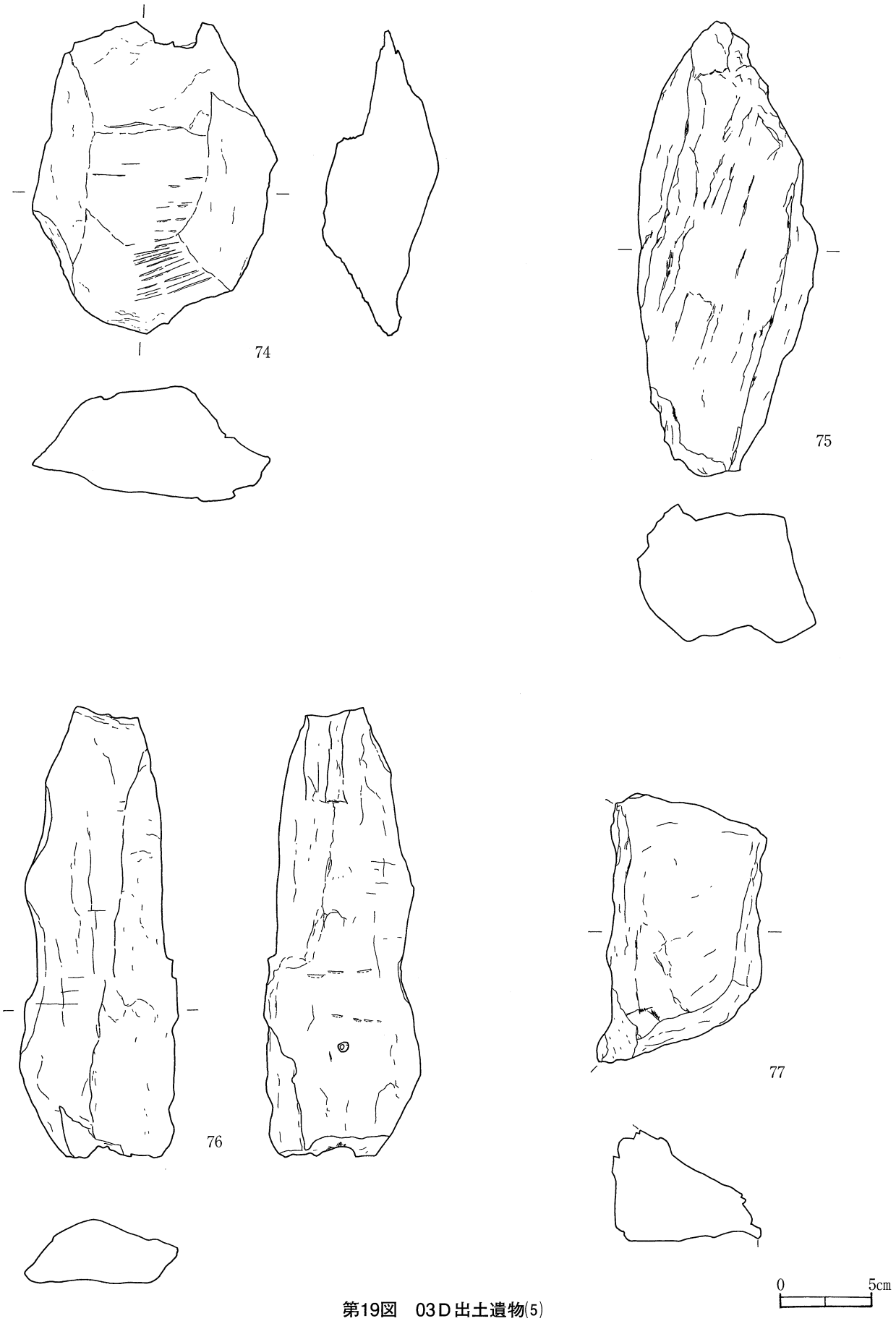
60～69(第17.18 図)は，有孔円板の未成品である。製作工程は，形割→側縁ないし上下面の研磨→穿孔の順をたどれるが，各段階での完結度が甘いようで，整形が不十分でも研磨をし，研磨が不十分でも穿孔している。結果として ,69(第18図)のような成品に仕上がっている。

70～73(第18図)は，剣形品の未成品である。剣形品についても，有孔円板と同様な製作工程が想定される。

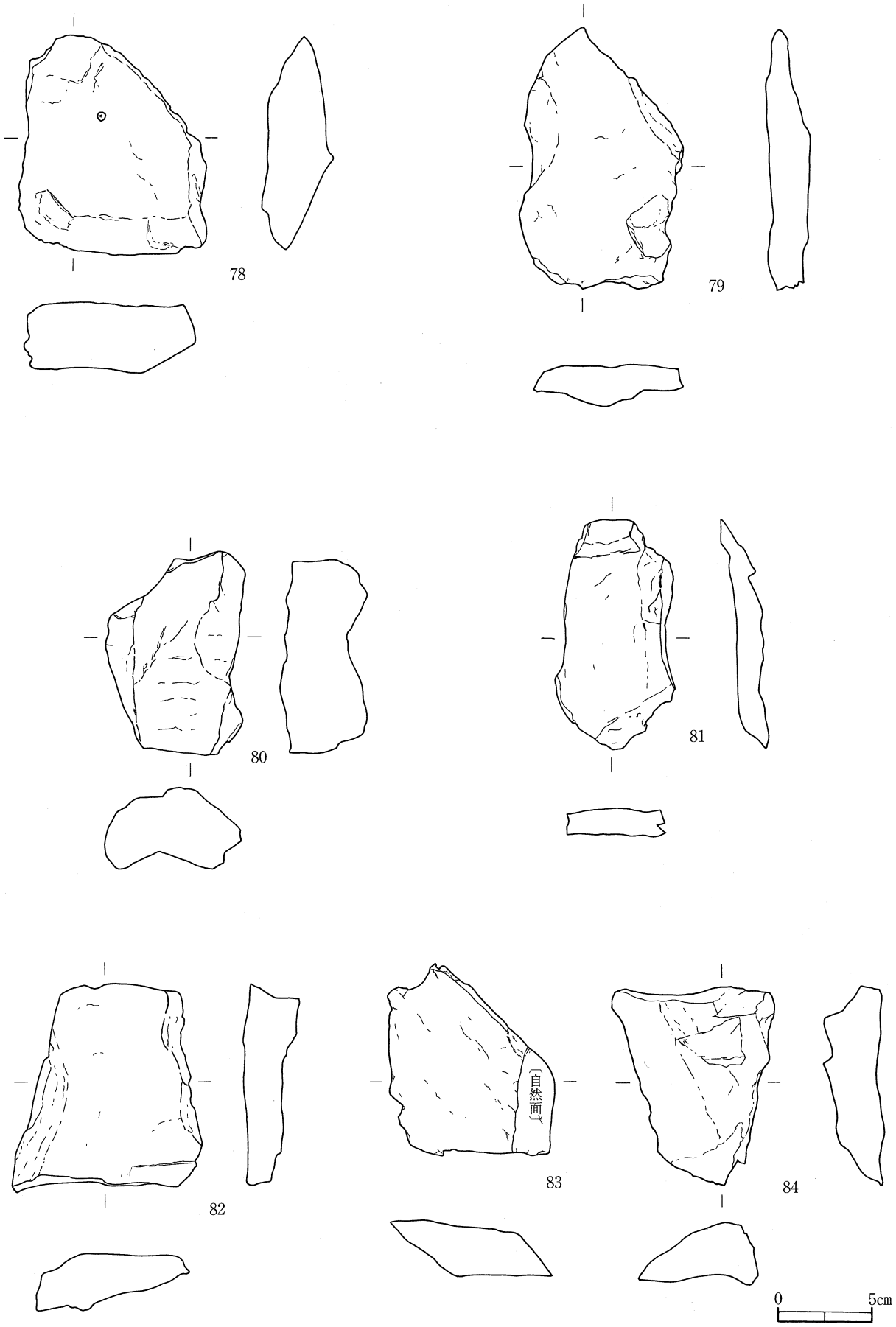
74(第19図)は，製作物は不明だが器物作成段階のものである。

75.76(第19図)は，原石である。この程度の塊で搬入されたものであろう。

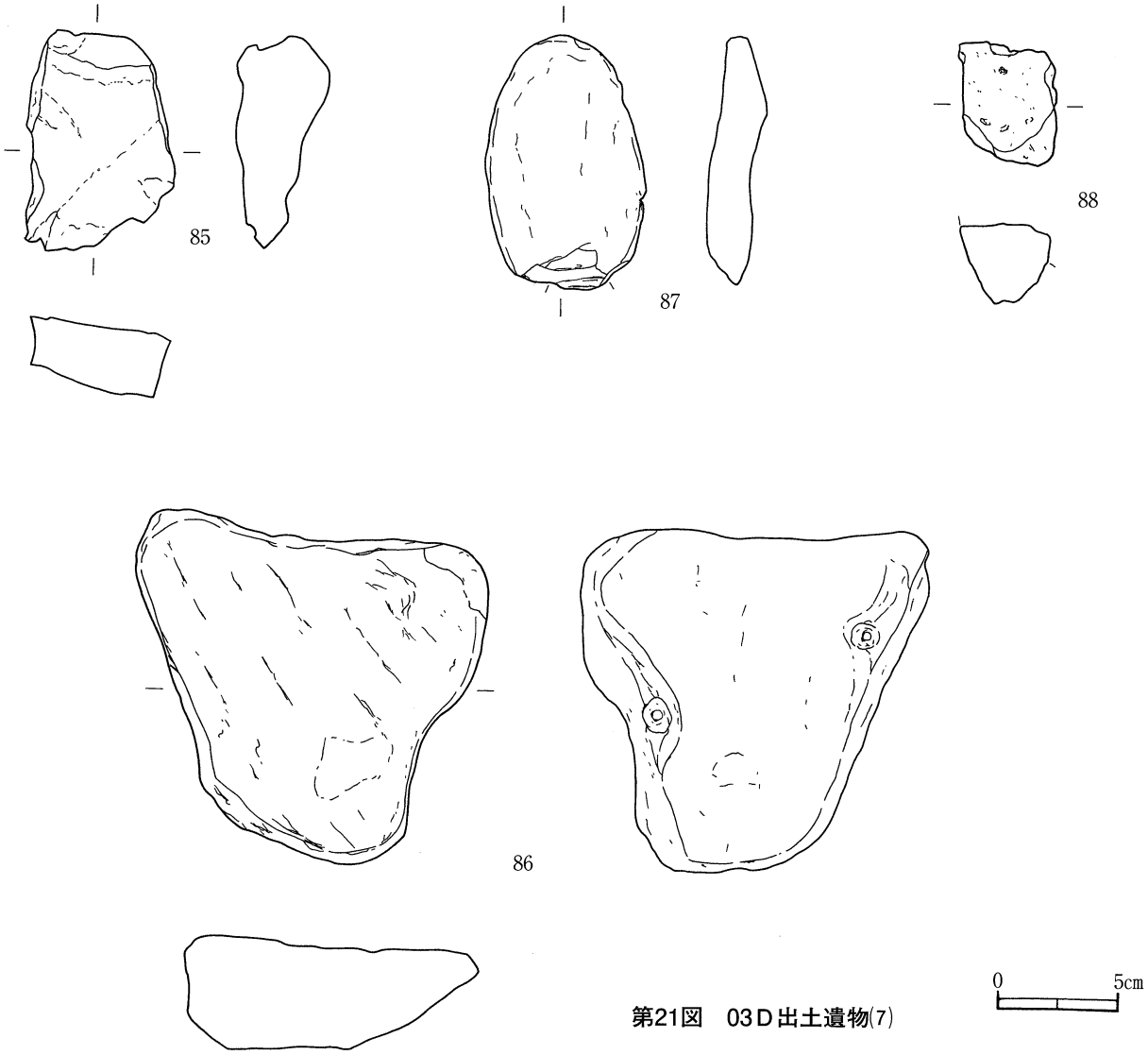
77～85(第19.20.21図)は，荒割段階のものである。段階としては，荒割Ⅰ→荒割ⅡＡ→ⅡＢ→Ⅲの工



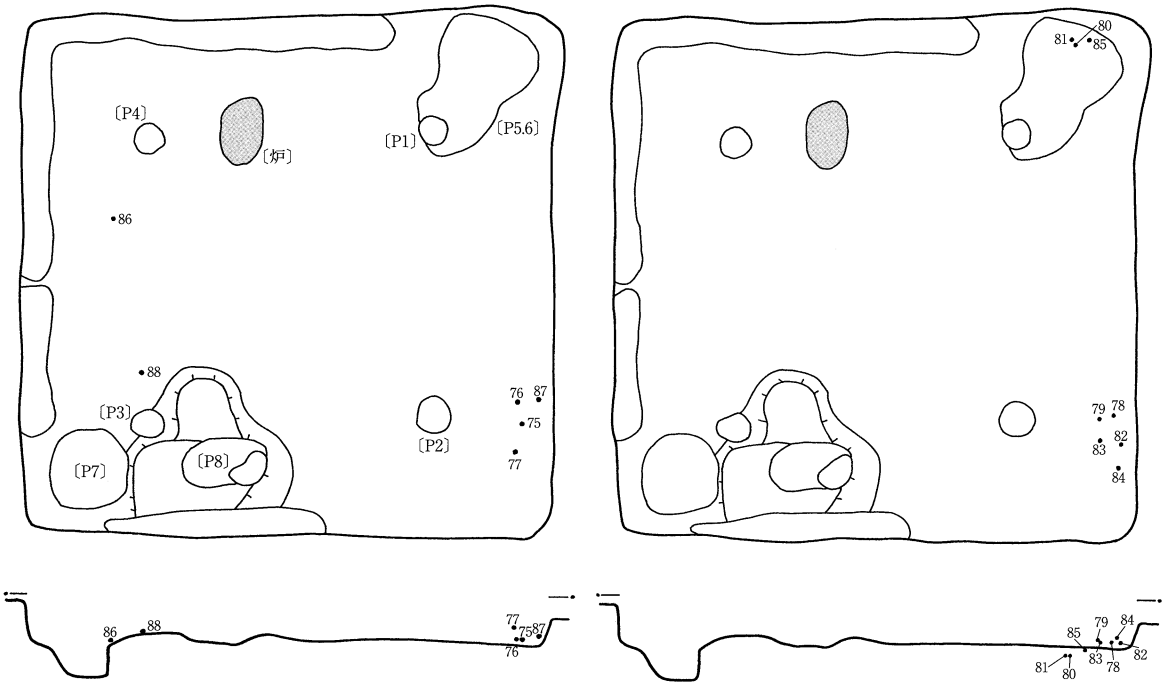
第19図　03D出土遺物(5)



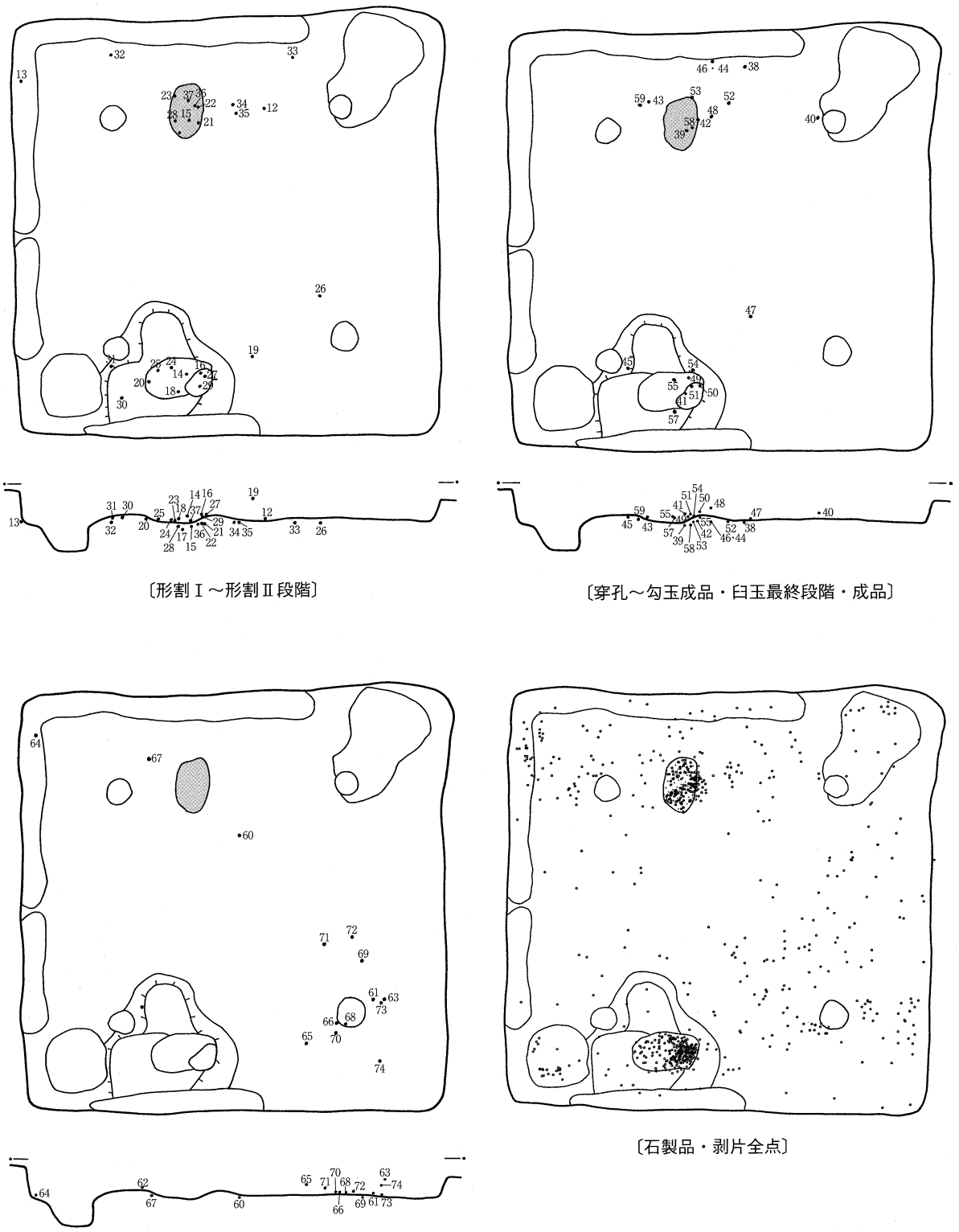
第20図　03Ｄ出土遺物(6)



第21図　03Ｄ出土遺物(7)



第22図　03Ｄ石製模造品等遺物分布図(1)



第23図　03D石製模造品等遺物分布図(2)

程で形割に進めている。77は荒割Ⅰで，原石を1/2分割したものである。78.79 は荒割ⅡＡで，不整形のⅠ段階の本体から直方体をつくりだしている。この時にでた削ぎ落とし部分が83.84 で，荒割ⅡＢ段階にあたる。80.81.82.85（第20.21図）は荒割Ⅲで，最終的に偏平長方体に仕上げて形割の母体にしている。

86.87.88は工具である。86は台石ないし研磨材，87はハンマーストーン，88は研磨材に想定される。また，76.78.86に残された小穴から棒錐の存在，74.76に一文字状に残された痕跡から何らかの工具が想定できる。

０６Ｄ住居跡（第24.25 図　図版８．９．10）

状　況　主軸方向　N－49°－W（炉を奥にして）
　　規　　模　3.6m ×3.18m の隅丸長方形

確認面　ソフトローム上面　壁高Ａ－Ａ’間　A36cm　A’17cm　Ｂ－Ｂ’間　B36cm　B’17cm

床　面　ソフトローム中を床面としている。住居掘り方にローム土を主体に黒色土を混入した土を埋め戻して床面としている。硬化面は住居中央から南西側と炉周辺において顕著である。

炉　　50cm ×35cm の楕円形で深さ７cm である。状態としては，焼土や灰等の堆積もなく底面に強く焼けた痕跡も明瞭ではないため，そう使いこまれているとはいえない。

ピット　P1.4.5.7が該当する。各ピットとも浅く，柱穴に想定できる深いピットはない。石製模造品や剥片等の出土から工房跡としての性格が想定される。遺物の分布状況からは，P4.5.7が工作用ピットに想定される（第29図参照）。この内，P4 と P7はピット内に粘土が充填されている（第24.25図）。各ピットの規模は，P1は0.57m ×0.41m の楕円形で深さ10cm，P4は0.55m の円形で深さ16cm，P5は0.45m ×0.4m の円形で深さ20cm，P7は0.56m ×0.5m の隅丸方形で深さ28cm である。また，付属施設として P5 と P7を囲むように幅35cm，高さ5cm の土堤と北壁コーナー近くに踏台状の施設が検出された。

その他　南壁際を除いて炭化粒，焼土粒混じりの暗褐色土が検出された。床面に密着し，厚さは６cm 程度である。

遺　物（第26.27.28図　図版17.18.19　第８．９表）

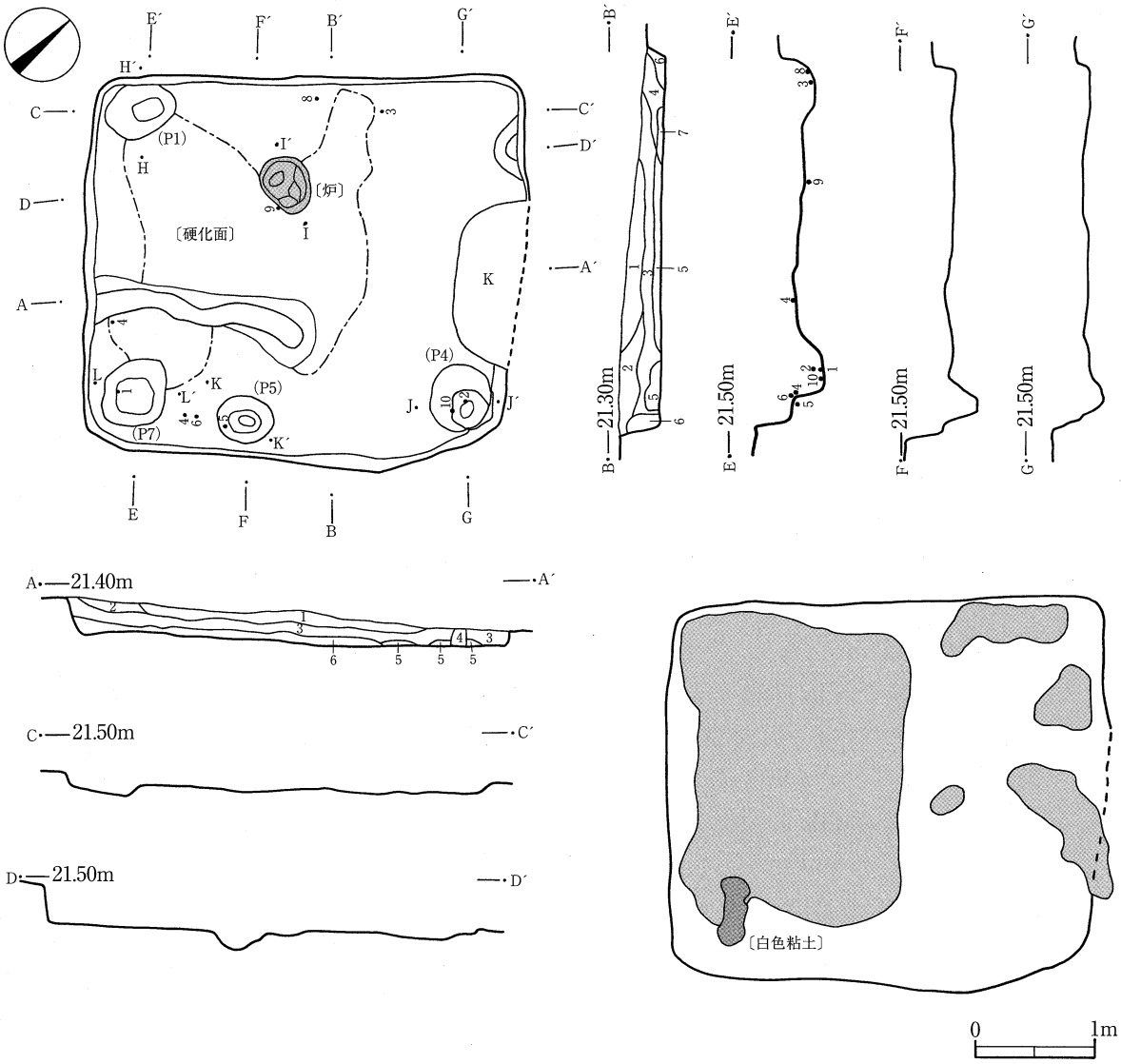
図示した土器は3,8 が床面からやや浮いた状態で出土しているが，その他は床面直上である。

石製模造品は，剥片を含めて住居跡全体に出土しているが，炉と P5周辺にやや集中している（第29図）。遺物はほぼ床面直上出土で，その他に P4.5中から原石・荒割段階のもの，炉脇から有孔円板未成品群，P4 近くから臼玉穿孔後の未成品群等が出土している。また図示できなかったが，ガラス製小玉が１点出土している。

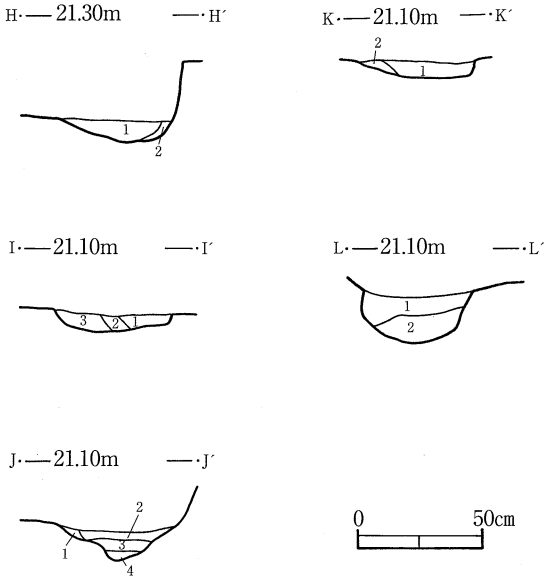
遺物総点数は剥片を含めて1500点超出土している。石製模造品の成品・未成品・原石・剥片の総重量は，1.891kg である。

０６Ｄの遺構について

本跡は，遺物の特殊性や出土状況から石製模造品の工房跡である。施設としては，炉，工作用ピット（P4.5.7），その他のピット（P1）からなる。遺物の項で触れたが，石製模造品製作時にでる剥片等の出土状況（第29図　［石製品・剥片全点］）から P5と炉周辺での作業頻度が高いと想定できる。また P4と P5内から原石・荒割段階の加工品が出土している点や P7内の白色粘土出土から，P4 → P5の導線と P7の包括的作業場所が想定できよう。更に炉と土堤脇での作業も剥片出土状況から想定できる。



第25図　06D焼土・粘土検出状況図



第24図　06D遺構実測図

06D 土層説明

1．黒褐色土　ローム微粒含む。
2．暗褐色土　1層よりも黒色土弱い。
3．暗褐色土　ローム微粒含む。焼土粒，炭化粒少量含む。
4．暗褐色土　ローム微粒多量含む。ロームブロック少量含む。炭化粒，焼土粒少量含む。
5．暗褐色土　ローム微粒多量含む。焼土粒，炭化粒含む。
6．茶褐色土　ロームブロック少量含む。
7．黒褐色土　ローム微粒含む。

H-H´間土層説明

1．黒褐色土　焼土粒，炭化粒混入。
2．褐 色 土　ローム土主に暗褐色土混入。

I-I´間土層説明

1．黒褐色土　焼土粒混入。
2．褐 色 土　ローム土主体。
3．褐 色 土　焼土粒＋ローム土。

J-J´間土層説明

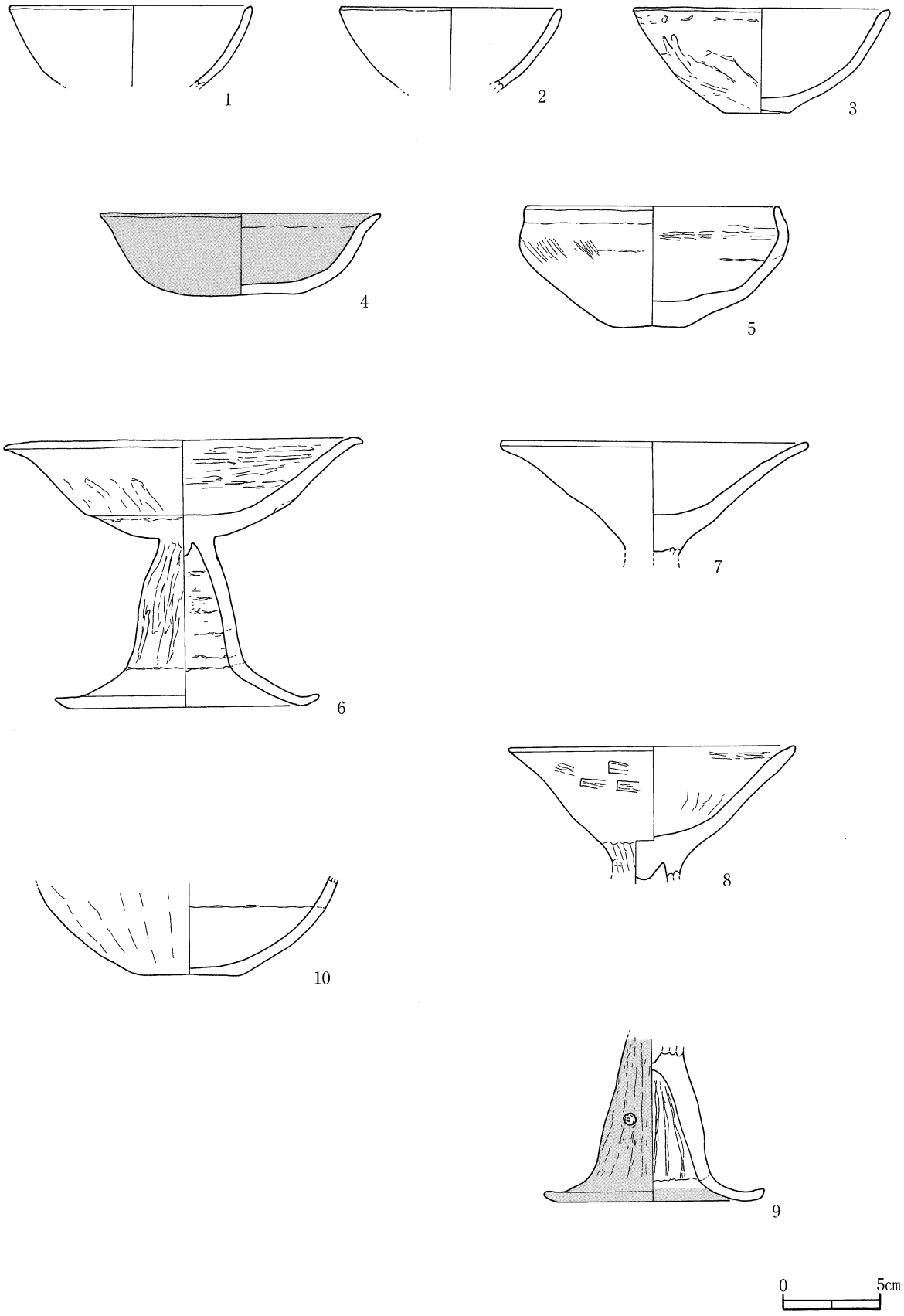
1．暗褐色土
2．黒褐色土　焼土粒，炭化粒混入。
3．暗褐色土　ローム粒，暗褐色土混合層。
4．暗褐色土　暗褐色土主に砂質粘土含む。

K-K´間土層説明

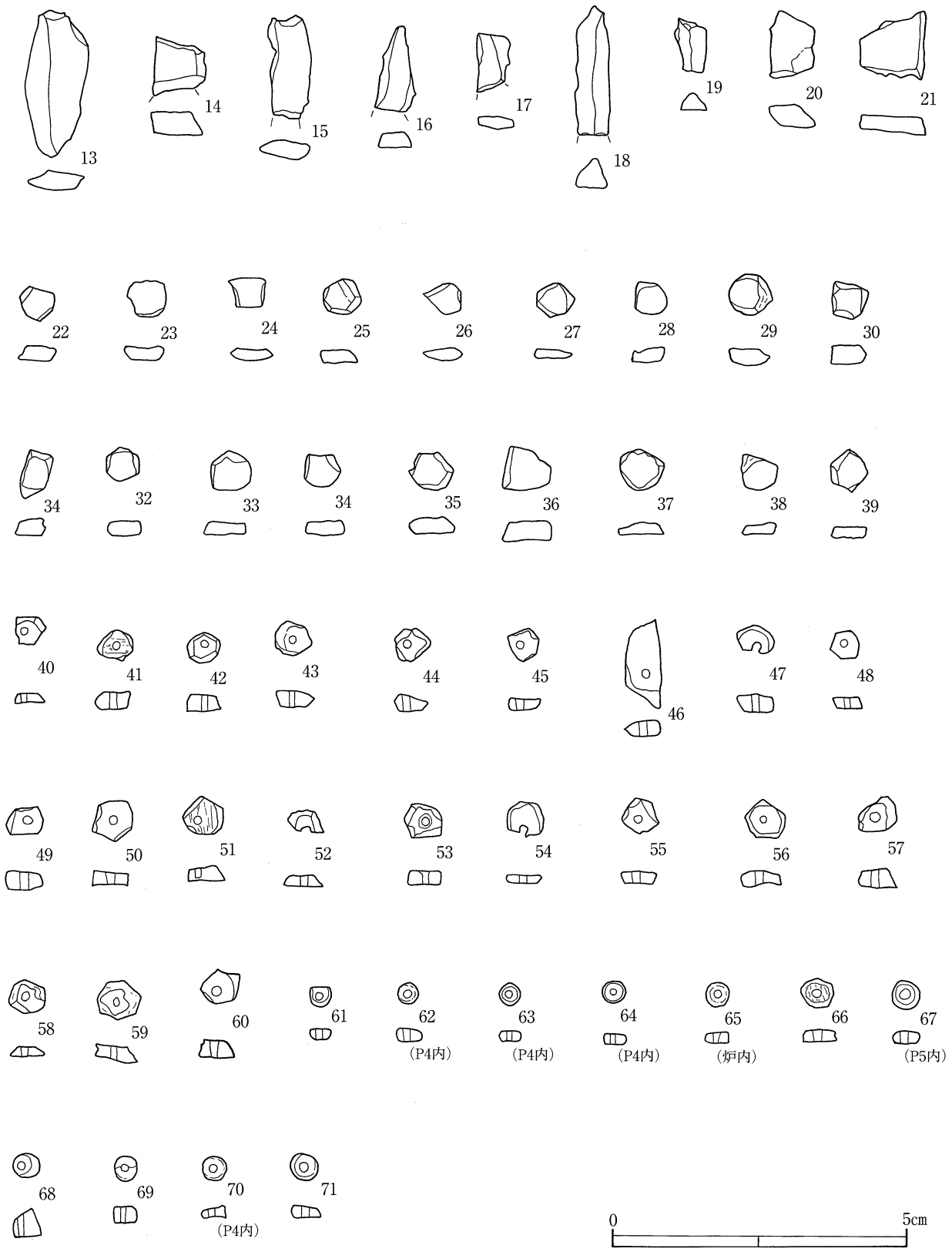
1．暗褐色土　ローム粒，焼土粒混入。
2．褐 色 土　ローム土主に暗褐色土混入。

L-L´間土層説明

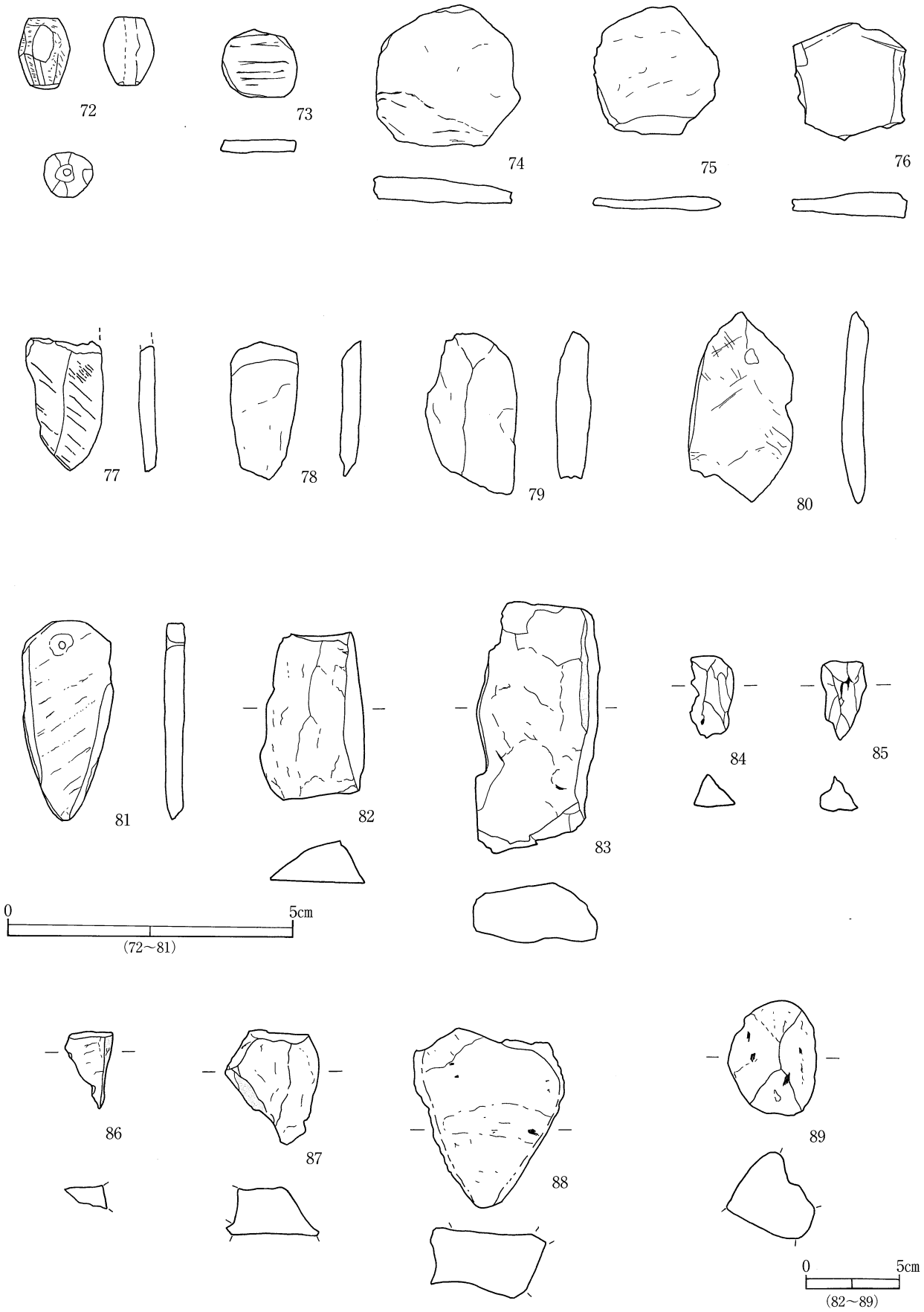
1．暗褐色土　黒色土，炭化粒，焼土粒をごく少量含む。
2．白色粘土　やや砂質。



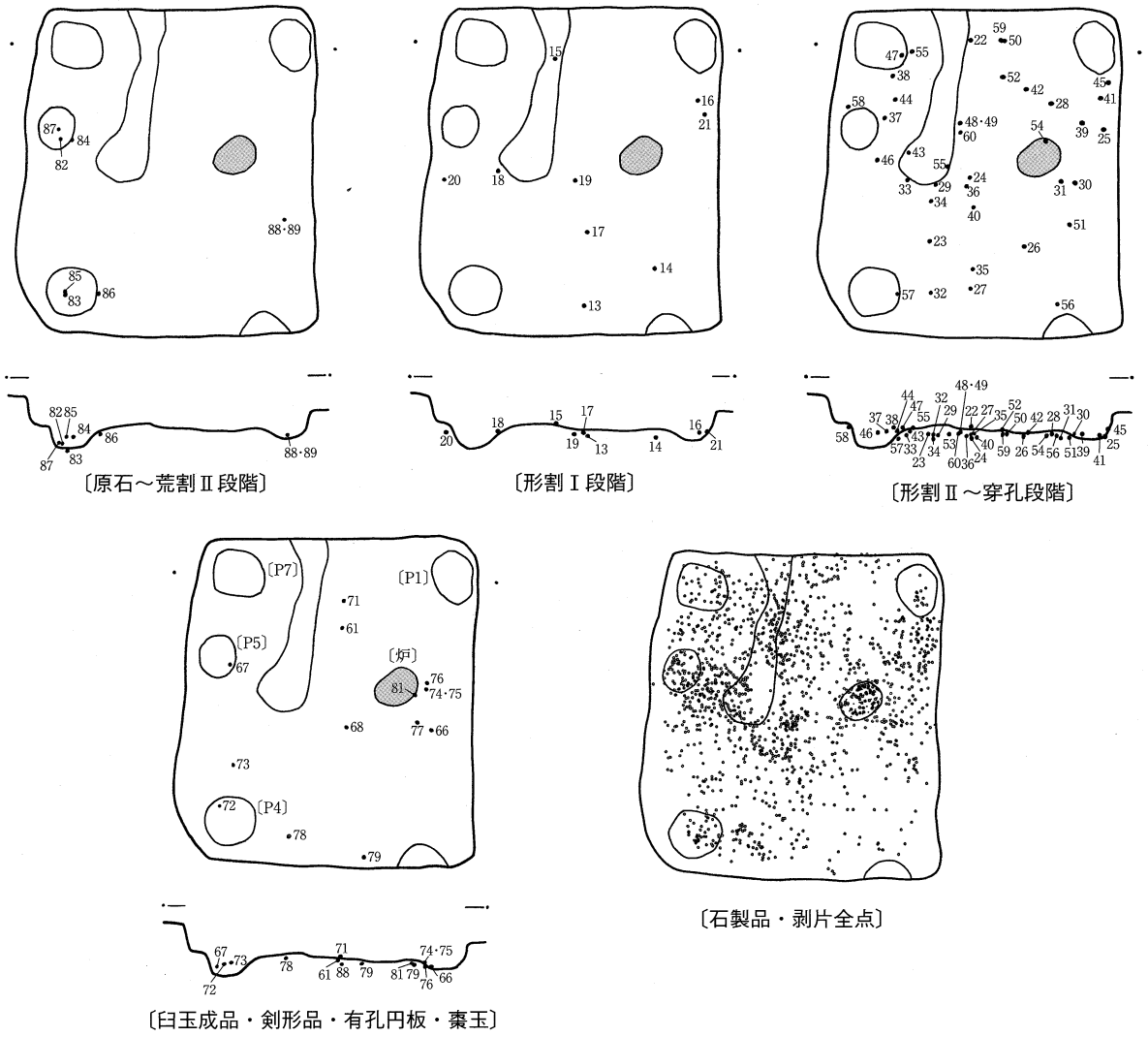
第26図　06Ｄ出土遺物(1)



第27図　06Ｄ出土遺物(2)



第28図　06Ｄ出土遺物(3)



第29図　06Ｄ石製模造品等遺物分布図

石製模造品について

06D で出土している石製模造品の種類は，臼玉･棗玉･有孔円板･剣形品である。工具では軽石である。石材では原石及び荒割段階のものが出土している。以下，第27.28 図に従って説明を加えていきたい。

13～71は，臼玉の製作工程を示したものである。形割Ⅰ→形割Ⅱ→穿孔→研磨Ⅰ→研磨Ⅱ→研磨Ⅲの段階を経て成品としている。13～21は形割Ⅰで，切截によって形割Ⅱの素材にするための偏平四角板をつくる段階である。22～39は形割Ⅱで，側縁を切截によって六角形ないし八角形に整えていく段階である。40～71は穿孔終了後の個体で直径１mm の孔を穿っている。研磨は穿孔後の段階に位置づけられる。研磨の段階に従ってみていくと，41.51.66は研磨Ⅰで，上下面を研磨している。40.42 ～60は研磨Ⅱで，側縁を研磨している。61～71は研磨Ⅲで，仕上げ研磨の段階で，ほとんど仕上がりに近いものもある。

72は棗玉である。側面の面取り後に一方向穿孔し，研磨中途の段階である。

73～76は，有孔円板の未成品である。74.75.76は切截により整形している。上下面と側縁の研磨はまだ行われていない。73は上下面及び側縁の研磨が終了している。製作工程を想定すると，形割整形→研磨Ⅰ（上下面）→研磨Ⅱ（側縁）→穿孔→成品という工程をたどっている。

77～80は剣形品の未成品，81は成品である。78.79は切截により整形している。77.80は側縁及び上下面の研磨段階のものである。製作工程を想定すると，形割整形→研磨（上下面及び側縁）→穿孔→成品という工程をたどっている。剣形品・有孔円板とも，形割整形以前の段階では同じ素材を使用していると判断される。製作工程においても，研磨の細かい部分は不明な点以外，同様な工程で製作されている。

82～87は原石及び荒割段階のものである。82は原石である。荒割は段階としては，荒割Ⅰ→荒割Ⅱの工程で形割に進めている。83は荒割Ⅰで，切削によって形を整えている。84～87は荒割Ⅱで，打撃によってより小さな形割の母体としていくものである。

88. 89は軽石で，両者とも磨られた痕跡が明瞭である。工具と考えられる。

０５Ｄ住居跡（第30.31 図　図版５）

状　況　主軸方向　N－61°－W

規　　模　2.53m ×3.0m 以上の長方形

確認面　ソフトローム上面　壁高はＡ－Ａ’間　A25cm　A’16cm　Ｂ－Ｂ’間　B15cm　B’15cm

床　面　ソフトローム中を床面としている。住居掘り方にローム土を主体に黒色土を混入した土を埋め戻して床面としている。全体的にやや軟弱で硬化面は見られない。

その他　南壁から中央部分に炭化粒，焼土粒混じりの暗褐色土，焼土層が検出された。床面に密着しており，厚さは8 ～17cm 程度である。

遺　物（第32図　図版16　第５表）

遺物は，図示した２点のみで床面直上の出土である。

第５表　０５Ｄ出土遺物　（単位：cm）

挿図番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	手　法　上　の　特　徴
第32図１	土師器　甕	21.0	26.4	7.0	長石　石英　赤色粒多含	黒茶褐色～茶褐色	口辺部横なで　胴部外縦位ヘラ削り　下位斜位ヘラ削り　内削り状のヘラなで　二次焼成による剥離　外面炭化物付着　ほぼ完形
2	土師器　甕	22.2	22.4	—	長石　石英　赤色粒多含	黒茶褐色～茶褐色	口辺部横なで　胴部外縦位ヘラ削り後中位横ヘラ削り下位斜位ヘラ削り　内削り状の縦位ヘラなで　内面下位で二次焼成による剥離　外面炭化物付着　底部欠損

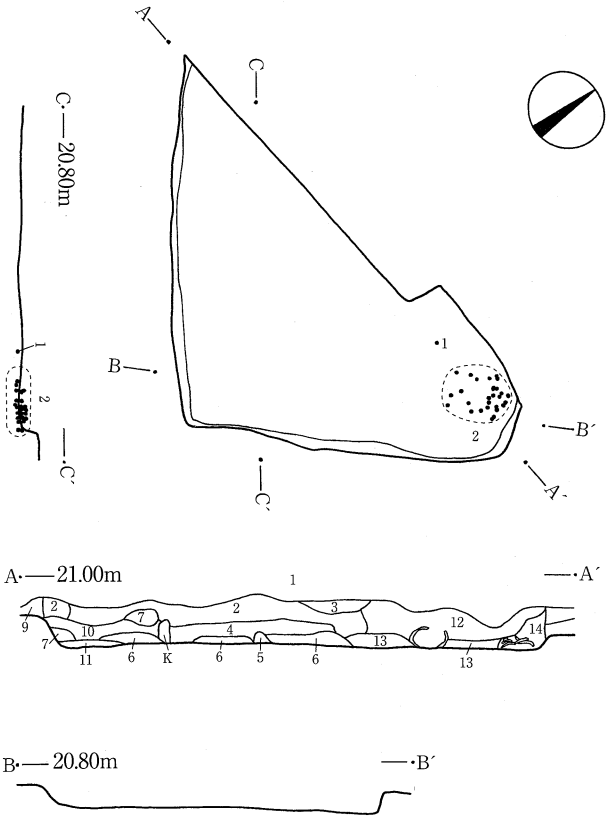
０１Ｐ土坑（第33図）

規模・長軸方位　1.65m の円形で深さ0.5m　方位不明

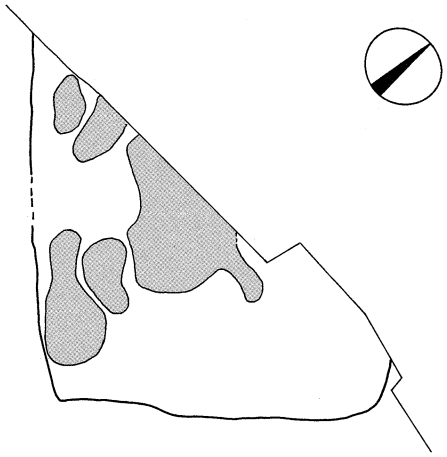
壁・底面の状態　底面から垂直方向に立ち上がる。底面はハードローム中を掘り込んで平らである。

覆 土 の 状 態　黒褐色土を主体とした覆土で，ややふわふわしている。ロームブロックを含んでおり，人為的埋め戻しと考えられる。

出 土 遺 物　出土しなかった。



第30図　05Ｄ遺構実測図

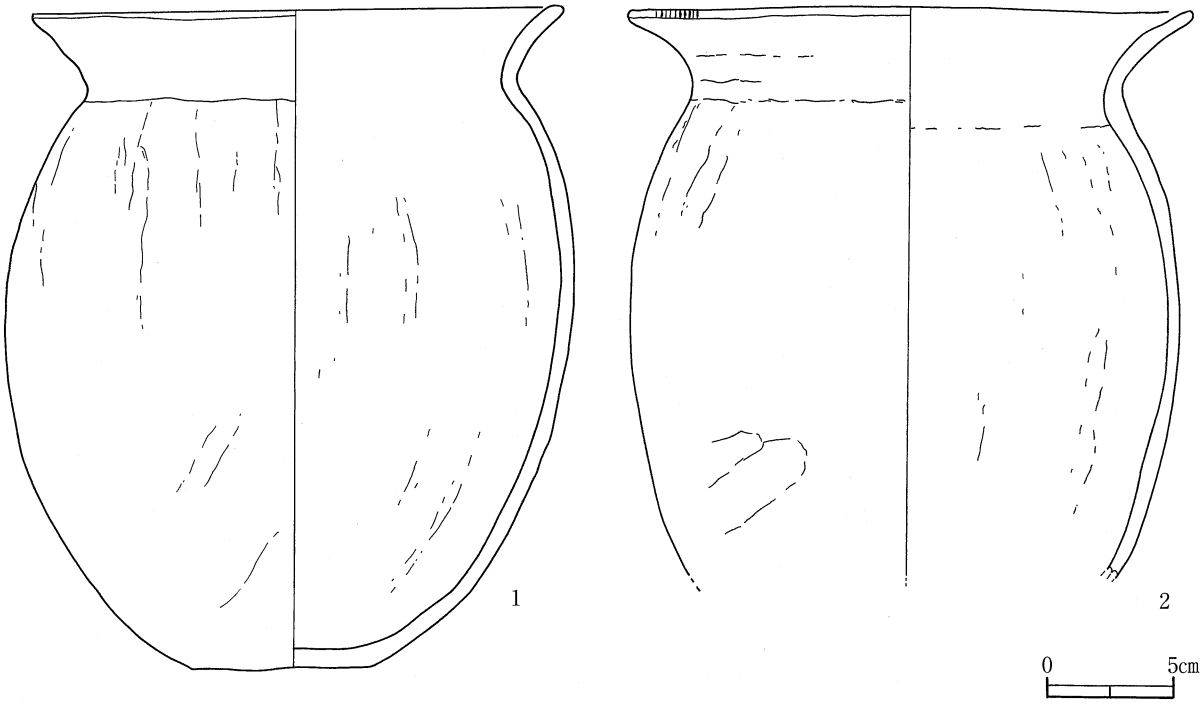


第31図　05Ｄ焼土検出状況図

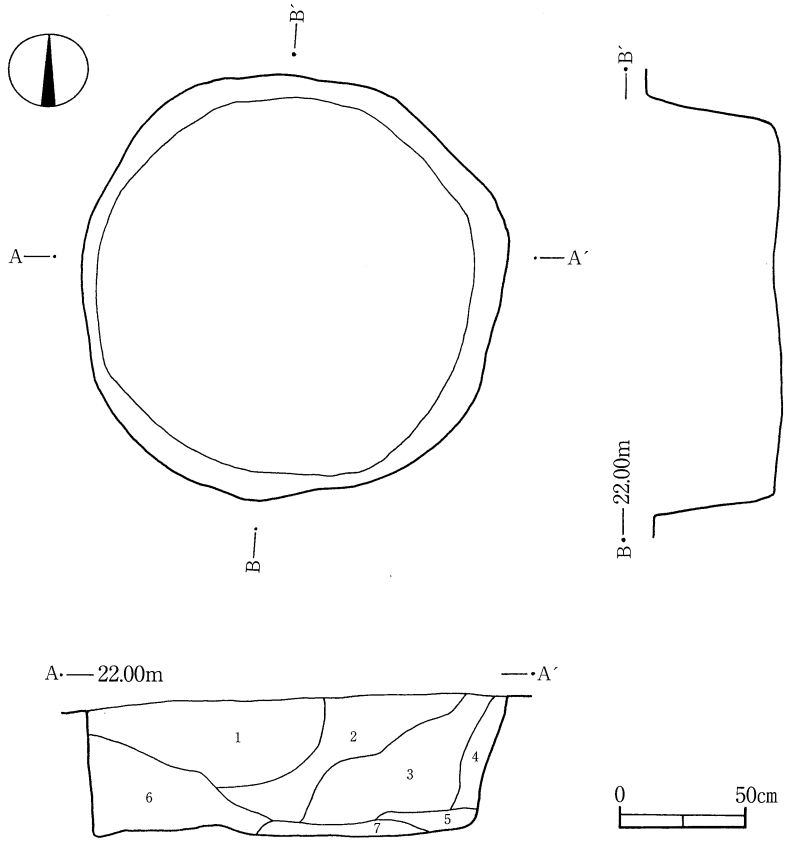
05D 土層説明

1．暗 褐 色 土　整地層。
2．黒 褐 色 土　焼土粒少量混入。
3．暗 褐 色 土　ローム粒混入。
4．黒 褐 色 土　２層類似。ローム粒混入少ない。
5．赤 褐 色 土　焼土粒主体。
6．暗赤褐色土　焼土粒，ローム粒，炭化粒混合層。
7．暗赤褐色土　焼土粒に少量の黒色土混入。
8．暗 褐 色 土　ローム粒に黒色土少量混入。
9．暗 褐 色 土　新期テフラ層下の自然堆積土。
10．黒 褐 色 土　焼土粒部分的に混入。
11．褐　色　土　ローム粒に少量の暗褐色土混入。
12．黒 褐 色 土　ローム粒少量含む。粒子細かい。
13．暗 褐 色 土　ローム，黒色土混合層。やや軟質。
14．暗 褐 色 土　ローム主に黒色土少量含む。ややしまっている。

0　1m



第32図　05Ｄ出土遺物



01P 土層説明

1．黒褐色土　1 ㎜大ローム粒全体に含む。5 ㎜大ローム粒少量混入。ややしまる。
2．黒褐色土　1 ㎜大ローム粒混入。ややふかふかする。
3．暗褐色土　ローム，黒褐色土混合層。2 ㎜大ローム粒全体に含む。しまっている。
4．暗褐色土　ローム粒主に暗褐色土粒混入。
5．褐 色 土　ロームブロック＋黒色土，ややぼそぼそする。
6．暗褐色土　黒色土，ローム土混合層。2～3 ㎜大ローム粒，1～2㎝大ロームブロック混入。ややぼそぼそ。
7．褐 色 土　5層類似。黒色土の混入がやや少ない。

第33図　01Ｐ遺構実測図

第３章　　まとめ

第１節　縄文時代

本遺跡において，縄文時代の遺構は検出されなかった。遺物においても土器片が少量のみで，時期についても前期中葉～中期後半と幅がみられる。周辺の遺構分布は，陥穴遺構のみの検出であり，狩り場としての土地利用が想定される。

第２節　弥生時代

今回の調査において，竪穴住居跡３軒を検出した。遺物から，３軒共に後期中葉の時期に想定される。南隣接地のｃ地点，ｄ地点においても後期中葉～後半の竪穴住居跡が，台地縁辺部及び小さく入り込む谷津沿いに検出されており，継続的にムラが営まれていたと言えるだろう。

遺構では，平面形が円形，隅丸長方形で無柱式の形態である。同形態のものは，ｃ地点では皆無だが，ｄ地点では，同時期の竪穴住居跡５軒の内４軒が該当する。出土遺物から見ると，時期差による形態の違いと考える。

遺物は，付加条縄文を施文する個体を主体としている。

第３節　古墳時代

遺構は，中期の石製模造品工房跡２軒と後期の竪穴遺構１軒である。中期については，隣接調査区のa,c地点において全体で27軒の竪穴住居跡を検出している。この内，石製模造品の出土している住居跡は２軒で，出土状況等からは工房跡とは考えられない。d 地点においては中期の住居跡１軒のみを検出している。このことから，川崎山遺跡における中期の集落としての広がりはｄ地点北側から南部分には展開していないことがおおむね把握されたと思われる。また，後期についてはｃ地点において２軒の竪穴住居跡を検出しているのみで，集落としては小規模化していく状況である。以下，石製模造品工房跡について若干触れていきたい。

１．市域の石製模造品工房跡について

市内で，石製模造品を出土した遺跡は，７遺跡26遺構である。[1] 水系でみると，萱田地区の新川西岸域に菅地ノ台遺跡，権現後遺跡，北海道遺跡，川崎山遺跡，小板橋遺跡の５遺跡，高津川南岸域に高津新山遺跡の１遺跡，神崎川と新川の合流地点に位置する平戸道地遺跡の１遺跡[2] となっており，新川西岸に集中している状況である。遺構の内訳は，竪穴住居６軒，工房15軒，工房？４軒となっている。この内権現後遺跡，北海道遺跡の工房跡に想定される遺構については，前掲書[3] 182～206ページに詳細な分析がなされている。この分析を参考として，今回の調査で検出された03D,06D について言及したいと思う。

３遺跡の位置関係について触れてみる。権現後遺跡，北海道遺跡と川崎山遺跡とは，直線距離にして1.1～1.3km の近さである。水系は前述したように，印旛沼にそそぐ新川西岸を見下ろす台地上縁辺部に位置している。（第１図参照）

川崎山遺跡他地点について触れてみる。今回調査を実施したｈ地点の03D,06D とａ地点[4] の5 ～7 号住とはほぼ南北の近接した位置関係にある。出土土器からみても同時期に想定される。また，ｃ地点[5] では24軒の竪穴住居跡が検出されているが，坩形土器，複合口縁の壺形土器等中期でもやや古い様相を示している。このことからa.h 地点の5 軒＋αをもって一群を構成したと考えられる。

ａ地点５号住から510 点余りの石製模造品にかかる成品，未成品，剥片が出土している。種類は臼玉・棗玉・剣形品・勾玉である。ｈ地点03D,06D からも同じ種類の石製模造品が出土しているが，成品は搬出されているため，その他の種類もあった可能性が高く，現に器物作成段階の未成品が03Dから出土していることからも推察される。

03D,06D の工房としての遺構について触れる。遺構規模は，03D が5.5m の隅丸方形，06D が3.6m × 3.18m の隅丸長方形で両者とも炉を有している。柱穴は03D が４本主柱，06D が無柱である。また，工房としての工作用ピットや炉を使用しての製作工程も想定され，03D では工作用ピットとして P5.6と土堤が巡る P8があり，06D では工作用ピットとして粘土を伴う P4.7と原石等の出土した P5が検出されている。また，両遺構で炉内から剥片・未成品が集中して出土する傾向がみられる。

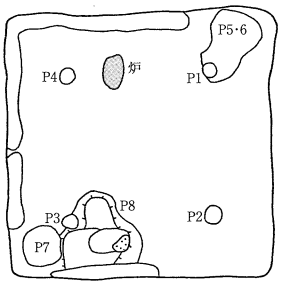
権現後遺跡では，遺構規模は４軒全てが5m ～5.4m の規模である。柱穴は４本主柱が１軒で，無柱が３軒である。また，炉は全ての工房に設置されているが，工作用ピットを有する工房はないということである。

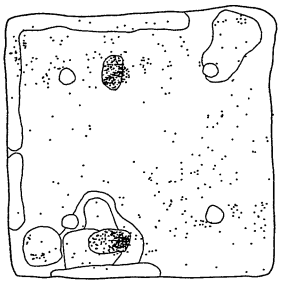
北海道遺跡では，遺構規模にばらつきが見られる。12軒の内訳は６ｍを越えるもの２軒，５ｍを越るもの４軒，4.5m 規模のもの５軒，3.5m 規模のもの１軒となっている。柱穴をもつものは，３軒のみで，4.5m 規模のもの１軒，５ｍを越えるもの１軒，６ｍを越えるもの１軒となっており，規模による差は見られない。工作用ピットは５軒（内１軒は確定的ではない）において見られる。また，炉を設けないものが４

軒見られる。

この３遺跡の工房の違いは，工作用施設と炉を中心とした作業を想定できる川崎山遺跡例と建物内での作業のみで具体的施設を持たない権現後遺跡例，工作用施設を中心とした作業を想定できる場合と具体的施設を持たない場合をもつ北海道遺跡例に大別が可能である。

かかる相違が見られるのは，古墳時代中期でも時期差があることや工人の系譜の違いと言えるのではないだろうか。具体的には，権現後遺跡が５世紀前半～半ば，川崎山遺跡が半ば～後半，北海道遺跡が後半に位置づけられる。遺構については，03D.06D の石製模造品類の出土状況からみた作業導線を想定して結びたいと思う。





〔03D遺物点〕

（03D作業導線）

P2壁際 ⟶ P5･6

〔原石・荒割〕

P5･6 ⟶ 炉

⟶ P8

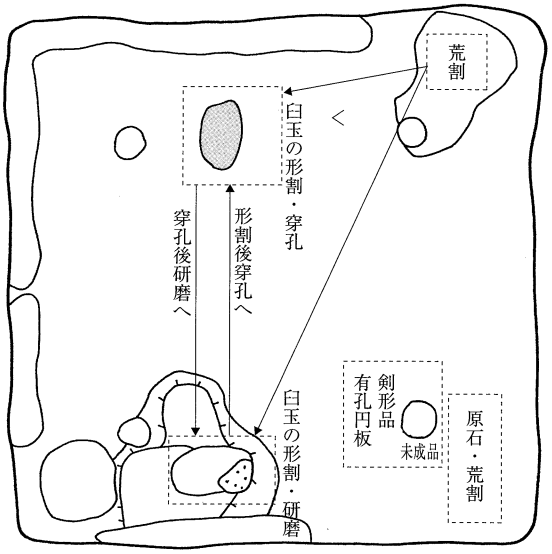
〔臼玉の形割〕

炉 ⟶ P8

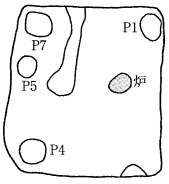
〔臼玉の形割・穿孔後研磨〕

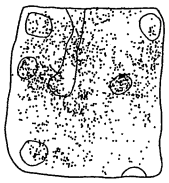
P8 ⟶ 炉

〔臼玉の形割後穿孔〕



〔03D作業導線の想定〕





〔06D遺物点〕

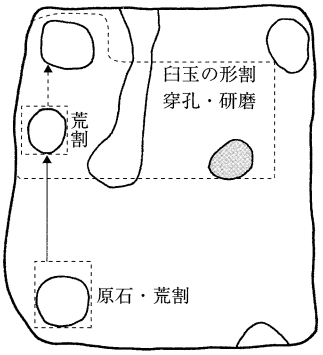
（06D作業導線）

P4 ⟶ P5

〔原石・荒割〕

炉・P5・P7

〔臼玉の形割～成品〕

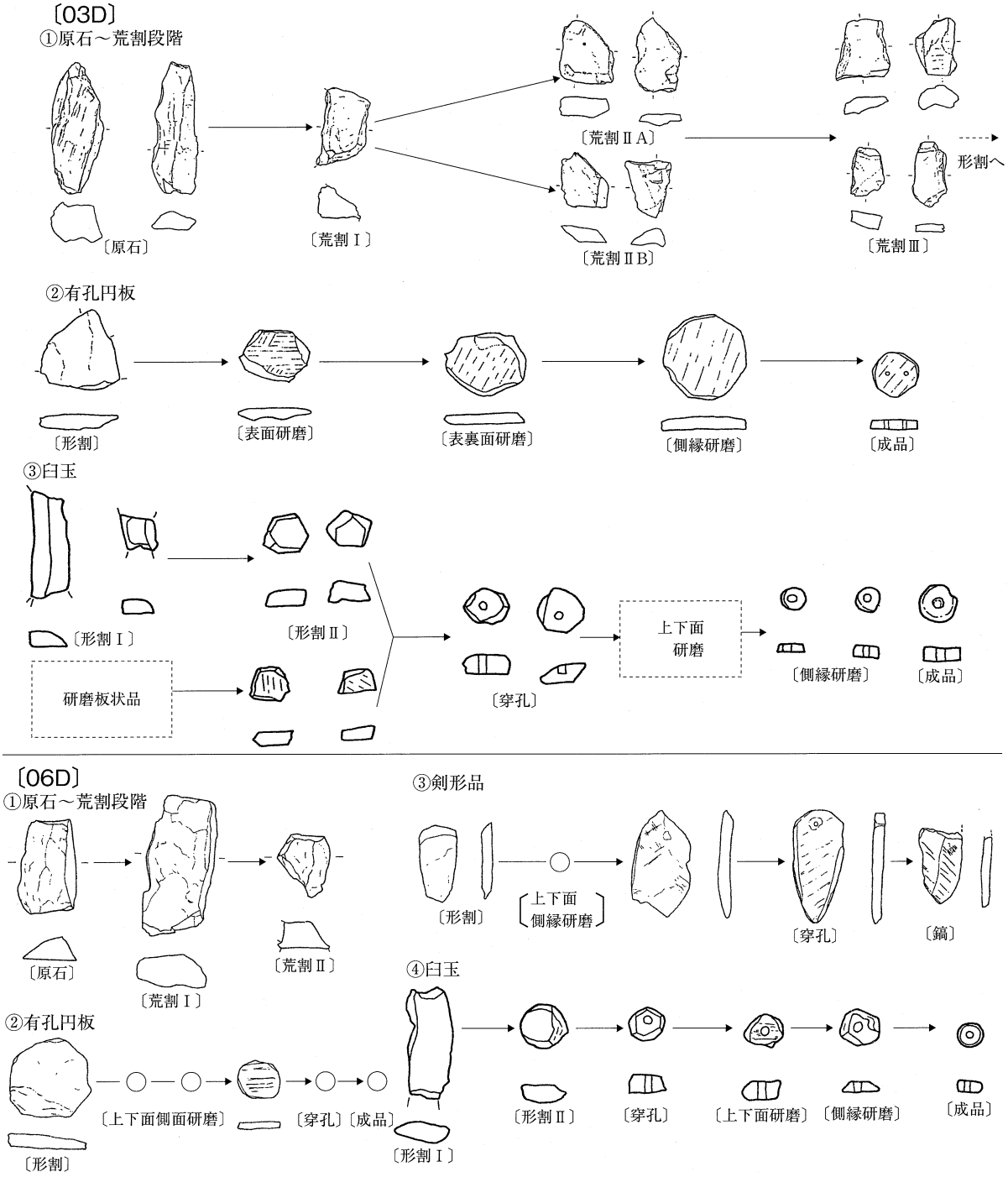


〔06D作業導線の想定〕

第34図　03D・06D 作業導線想定図

2．石製模造品の製作工程について

模造品類の種類は，03Dにおいては，臼玉を主として勾玉，剣形品，有孔円板，器物（特定できない）があげられる。06Dでは03Dと同様に，臼玉を主として棗玉，剣形品，有孔円板が出土した。棗玉においては通有ではあるが，勾玉においても立体感のある精製品として出土している。両遺構とも剥片，荒割段階の石，原石が伴っている。ここでは03D,06D 各々について原石から成品にいたる工程を模式化してみたいと思う。



第35図　03D・06D 石製模造品各工程模式図（縮尺不統一）

０３Ｄ

①では原石から荒割Ｉで半截し，その本体を分割してⅡＡ（本体）とⅡＢ（上下のフレーク）にわける。Ⅲで偏平長方体に仕上げて形割の母体としている。

②では形割の素材を四角形から丸く切截によって整形し，表裏面を研磨。側縁を研磨して穿孔して成品としている。

③では形割Ｉで四角板を作り，Ⅱで多角形状の素材をつくる。また，形割Ⅱの段階で擦痕のある素材が稀少量あり，板状の研磨素材の存在が考慮される。穿孔後上下面→側縁の研磨をして成品としている。

０６Ｄ

①では切削によって形を整えＩとし，打撃によって更に素材として整えている。

②では形割から上下面と側縁に研磨をした後に穿孔し，成品としている。

③でも②と同様な工程を経て最後に鎬をつくりだして成品としている可能性が高い。

④でも03Dと同様な工程で成品としており，各工程品がよい状態で出土している。

以上みてきたが，臼玉を例にとってみると上下面研磨の形割Ⅱの素材が少ない点からは，権現後遺跡よりも北海道遺跡の製作工程に近いと言える。しかし，形割Ｉの四角板の作り方や上下面研磨の存在等基本的な違いも指摘できる。

石製模造品等の資料は，和洋女子大学寺村光晴博士に実見いただいた。また，石製模造品各工程模式図の原案については，寺村博士に全面的に関与いただいた。2日間にわたって，細かい資料を丹念に分析いただき，記して感謝の意を表したい。また，筆者の力量不足から理解の至らない部分，誤認等や実測表現の方法といった点で未熟な部分が多々あると思われるが，全て筆者の責によるものであることをお断りしておく。

註

1）加藤正信　小林清隆　山口典子1992『千葉県文化財センター研究紀要13』56～59ページ古墳時代玉類出土遺跡一覧を基礎として，平成15年10月までの八千代市教育委員会・八千代市遺跡調査会調査による成果を加えた。

2）林勝則1986『千葉県八千代市平戸道地遺跡』八千代市教育委員会

3）2）に同じ

4）平岡和夫他1979『萱田町川崎山遺跡発掘調査報告書』八千代市・八千代市遺跡調査会

5）小川和博他1999『千葉県八千代市川崎山遺跡　—埋蔵文化財発掘調査報告書—』八千代市川崎山遺跡調査会

参考文献

寺村光晴　1973『下総国の玉作遺跡』千葉県教育委員会

寺村光晴　1980『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館

加藤修司他1984『八千代市権現後遺跡　—萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ｉ』千葉県文化財センター

藤岡孝司他1985『八千代市北海道遺跡　—萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』千葉県文化財センター

加藤正信他1992『千葉県文化財センター研究紀要13』　生産遺跡の研究２　—玉—

常松成人他2003『千葉県八千代市川崎山遺跡ｄ地点』八千代市遺跡調査会

第６表　０３Ｄ出土遺物観察表（１）〔13. 14ページ〕

（単位：cm）

挿図番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	手　法　上　の　特　徴
第15図１	土師器　小型鉢	13.9	8.7	4.1	長石　雲母小片 黒色粒	橙褐色一部黒斑	口辺部外ヘラなで後横なで　体部中位横位ヘラ削り　下位～下端斜位ヘラ削り　外 面赤彩か？完形
2	土師器　高坏	15.7	14.0	11.2	長石　石英	橙褐色一部黒斑	坏部内外ヘラなで後なで整形 脚部外縦位細かなヘラ削り　内ヘラなで　脚裾部内外面赤彩か？　坏部1/2 欠損
3	土師器　高坏	18.4	15.3	14.6	長石　石英　小石片	橙褐色一部黒斑	坏部内外ヘラなで後なで整形 脚部外縦位ヘラ削り　裾部なで整形　内ヘラなで脚部上位に6.5mm の焼成前穿孔１箇所あり　脚・坏部内面赤彩か？　脚裾部1/2 欠
4	土師器　高坏	—	7.7	11.7	長石　石英　雲母片	淡赤褐色～橙褐色	脚部外縦位ヘラ削り　裾部なで整形　内なで整形　脚部外面全体と裾部内面赤彩　脚部全周遺存
5	土師器　高坏	—	9.0	12.9	長石　石英　雲母片	淡赤褐色～橙褐色	脚部外細かな縦位ヘラ磨き　裾部なで整形　内なで整形　脚部外面全体と裾部内面赤彩　脚部全周遺存
6	土師器　壺	17.3	18.2	5.7	長石　雲母片 小石片	淡赤褐色	口辺部外横なで　内横位ヘラ磨き後横なで　胴部外粗いハケ目調整後斜位ヘラ削り内ハケ目調整後なで整形　外面全体と口辺部内面赤彩　胴部外面中位に円形状の炭化物付着　口辺部内外面と胴部外面に墨状の痕跡（筆先？）が見られる。完形
7	土師器　甕	13.9	17.6	5.7	長石　石英　雲母片	淡赤褐色外面一部黒斑	口辺部内外なで　胴部外上半～中位横位ヘラ削り下位斜位ヘラ削り後なで整形　内ヘラなで後なで整形　内外面赤彩か？　内面下位～下端に炭化物付着　完形
8	土師器　甕	15.3	16.8	4.5	長石　石英　雲母片	茶褐色内外面一部黒斑	口辺部外縦位ヘラなで後横なで　内横位ヘラなで後横なで　胴部外斜位ヘラ削り後なで整形　内なで整形　完形
第16図９	土師器　甕	16.4	16.2	4.9	長石　雲母片	暗褐色～黒褐色	口辺部内外横なで　胴部外上半縦位ヘラ削り中位～下端横位ヘラ削り　内横位ヘラなで内面の頸部～底部全面に暗褐色の塗布物が見られる。口辺部1/4 欠損
10	土師器　甕	15.0	22.2	5.6	長石　石英　雲母片	橙褐色	口辺部内外木口状工具によるなで後横なで　胴部外ヘラ削り後同工具による斜位なで整形　内面底部に火熱による黒色の剥離が見られる。胴下半部一部欠損
11	土師器　甕	15.3	19.4	6.6	長石　石英　雲母片	橙褐色	口辺部内外木口状工具によるなで後横なで　胴部外縦位ヘラ削り後同工具による縦位～斜位なで　内なで整形　完形

第７表　０３Ｄ出土遺物観察表（２）〔15～19ページ〕

（単位：mm．g）

挿図番号	種　別	段　階	全長	全幅	厚さ	重量	孔径	手　法　上　の　特　徴
第17図12	臼玉	形割Ⅰ	5.0	6.0	2.1	0.1	—	12～22偏平四角体作成段階　偏平四角形状　断面菱形状
13	臼玉	形割Ⅰ	8.0	5.0	3.0	0.1	—	偏平三角形状　断面台形状
14	臼玉	形割Ⅰ	6.0	6.0	2.0	0.1	—	偏平台形状　断面台形状　下切截
15	臼玉	形割Ⅰ	7.0	8.0	2.5	0.2	—	偏平台形状　断面三角形状　下切截
16	臼玉	形割Ⅰ	6.0	6.0	2.3	0.1	—	偏平四角形状　断面四角形状　上下切截
17	臼玉	形割Ⅰ	7.0	5.0	2.0	0.1	—	偏平不整形状　断面三角形状　下切截
18	臼玉	形割Ⅰ	6.0	5.0	2.0	0.2	—	偏平長方形状　断面四角形状　上下切截
19	臼玉	形割Ⅰ	17.0	6.0	2.7	1.4	—	偏平長方形状　断面四角形状　下切截　側面研磨
20	臼玉	形割Ⅰ	5.0	9.0	1.1	0.1	—	偏平長方形状　断面四角形状　下切截
21	臼玉	形割Ⅰ	4.0	7.0	2.5	0.0	—	偏平長方形状　断面四角形状
22	臼玉	形割Ⅰ	4.0	6.5	2.1	0.0	—	偏平長方形状　断面四角形状
23	臼玉	形割Ⅱ	5.5	5.5	2.2	0.0	—	23～37四角体の側縁切截段階　五角形状
24	臼玉	形割Ⅱ	6.1	7.5	2.1	0.2	—	六角形状
25	臼玉	形割Ⅱ	6.5	7.0	2.9	0.3	—	五角形状
26	臼玉	形割Ⅱ	5.0	6.0	3.0	0.2	—	五角形状
27	臼玉	形割Ⅱ	6.0	6.0	1.5	0.0	—	六角形状
28	臼玉	形割Ⅱ	4.8	5.0	2.0	0.0	—	五角形状
29	臼玉	形割Ⅱ	4.0	6.5	3.0	0.1	—	四角形状に近い
30	臼玉	形割Ⅱ	4.0	5.5	1.3	0.0	—	四角形状
31	臼玉	形割Ⅱ	6.0	6.0	2.0	0.1	—	五角形状　上面研磨
32	臼玉	形割Ⅱ	5.5	6.0	2.2	0.1	—	五角形状
33	臼玉	形割Ⅱ	4.5	5.5	2.0	0.0	—	四角形状
34	臼玉	形割Ⅱ	4.0	7.0	1.7	0.0	—	四角形状
35	臼玉	形割Ⅱ	4.5	5.0	2.0	0.0	—	四角形状
36	臼玉	形割Ⅱ	4.0	6.0	1.8	0.1	—	四角形状　上面研磨
37	臼玉	形割Ⅱ	4.5	6.5	1.2	0.0	—	四角形状
38	臼玉	穿孔	7.0	7.0	3.0	0.2	1.5	38～49.52.53臼玉穿孔段階　未貫孔である
39	臼玉	穿孔	6.0	7.0	2.0	0.1	1.5	六角形状
40	臼玉	穿孔	4.0	5.0	1.2	0.0	1.5	1/2 欠　側縁研磨段階の破損
41	臼玉	穿孔	6.0	7.0	2.8	0.2	1.3	1/3 欠　六角形状
42	臼玉	穿孔	22.0	14.0	4.0	1.6	1.5	不整長方形　側面に二孔
43	臼玉	穿孔	8.0	7.0	2.0	0.1	1.3	六角形状
44	臼玉	穿孔	7.0	7.0	2.3	0.2	1.2	六角形状
45	臼玉	穿孔	5.0	7.0	2.5	0.2	1.2	五角形状
46	臼玉	穿孔	8.0	7.0	2.8	0.3	1.6	六角形状
47	臼玉	穿孔	7.0	7.0	2.1	0.1	1.5	五角形状

第７表　０３Ｄ出土遺物観察表（２）続き〔15～19ページ〕

（単位：mm．g）

挿図番号	種　別	段　階	全長	全幅	厚さ	重量	孔径	手　法　上　の　特　徴
第17図48	臼玉	穿孔	5.0	6.0	2.0	0.0	1.2	五角形状
49	臼玉	穿孔	7.0	8.0	2.0	0.1	1.3	六角形状
52	臼玉	穿孔	6.0	7.0	3.0	0.3	1.5	四角形状
53	臼玉	穿孔	7.0	6.0	1.8	0.0	1.2	五角形状
50	臼玉	研磨	4.0	5.0	1.8	0.0	1.2	50.51.54～58臼玉研磨段階　1/2 弱欠　研磨段階破損　表裏・側縁研磨中
51	臼玉	研磨	3.0	5.0	1.8	0.0	1.8	1/2 欠　研磨段階破損　表裏・側縁研磨中
54	臼玉	研磨	4.0	4.0	1.2	0.1	1.2	表裏・側縁研磨　仕上げ段階　成品に近い
55	臼玉	研磨	4.0	4.0	1.9	0.1	1.2	表裏・側縁研磨　仕上げ段階　成品に近い
56	臼玉	研磨	6.0	5.0	2.2	0.2	1.9	表裏・側縁研磨中
57	臼玉	研磨	4.0	5.0	1.8	0.1	1.5	表裏・側縁研磨中
58	臼玉	研磨	4.0	4.0	1.8	0.0	1.3	1/3 欠　研磨段階破損　表裏・側縁研磨中
59	勾玉	ほぼ成品	18.0	11.0	6.0	1.4	3.0	
60	有孔円板	未成品	20.0	19.0	7.0	3.1	—	60～69有孔円板未成品　形割段階
61	有孔円板	未成品	25.0	25.0	5.0	3.1	—	形割段階　二側縁に打ち欠き
62	有孔円板	未成品	17.0	22.0	4.0	1.9	—	片面研磨　側縁未研磨
63	有孔円板	未成品	25.0	20.0	5.0	2.4	—	形割段階
64	有孔円板	未成品	21.0	22.0	7.0	3.8	—	形割段階
第18図65	有孔円板	未成品	20.0	21.0	5.0	3.2	—	両面・側縁研磨中
66	有孔円板	未成品	20.0	25.0	3.0	2.4	—	両面研磨済　側縁未研磨　打ち欠き段階
67	有孔円板	未成品	27.0	21.0	4.0	4.1	—	両面・側縁研磨中
68	有孔円板	未成品	16.0	15.0	2.0	0.9	1.2	両面研磨済　側縁未研磨　１箇所穿孔あるが未貫孔
69	有孔円板	未成品	14.0	14.0	2.5	0.9	1.2	両面・側縁研磨中　仕上げ段階
70	剣形品	未成品	42.0	17.0	5.5	4.8	—	70～73剣形品未成品　側縁打ち欠き及び研磨見られる　両面未研磨
71	剣形品	未成品	31.0	14.5	3.8	2.9	—	両面研磨　側縁打ち欠き及び研磨
72	剣形品	未成品	29.0	13.0	2.8	1.1	—	両面研磨　側縁打ち欠き　この段階で破損
73	剣形品	未成品	27.0	16.0	2.8	1.9	—	両面研磨　側縁打ち欠き　この段階で破損
第19図74	器物	未成品	171.0	127.0	62.0	1256.8	—	器物特定できず　工具による一文字状痕跡が明瞭
75	原石	—	249.5	86.0	66.0	2200.0	—	斜行方向に沿って切り出されている。
76	原石	—	247.5	83.0	34.0	1016.4	—	両面に工具による一文字状痕跡が明瞭　裏面に6 ×6mm, 深さ2.5mm の穿孔あり
77	原石小割	荒割Ⅰ	148.0	92.0	62.0	886.4	—	左側面と裏面に割りさいた部分が見られる。原石1/2 分割
第20図78	原石小割	荒割ⅡA	118.0	101.0	36.0	571.7	—	荒割Ⅰを整え，直方体に仕上げている。表面に5 ×5mm, 深さ1.5mm の穿孔あり
79	原石小割	荒割ⅡA	141.0	80.0	22.0	358.5	—	直方体に仕上げる。
80	原石小割	荒割Ⅲ	110.0	71.0	43.0	466.1	—	荒割ⅡAを偏平化させ，長方体に仕上げ，形割の母体とする。
81	原石小割	荒割Ⅲ	123.0	65.0	14.0	150.2	—	ほぼ長方体に仕上がっている。
82	原石小割	荒割Ⅲ	111.0	102.0	21.0	460.0		
83	原石小割	荒割ⅡB	103.0	89.0	27.0	251.8	—	荒割ⅡA段階の削ぎ落とし部を使用して直方体に仕上げていく。
84	原石小割	荒割ⅡB	106.0	75.0	25.0	305.8		
第21図85	原石小割	荒割Ⅲ	93.0	62.0	27.0	276.6		
86	台石	—	149.0	147.0	42.0	1463.2	—	雲母片岩　台石ないし平砥石として使用　側縁に二箇所10×12mm, 深さ3 ～6mm の穿孔あり
87	ﾊﾝﾏｰｽﾄｰﾝ	—	106.0	67.0	18.0	192.2	—	先端に敲打痕があり，ハンマーストーンとしての工具の可能性あり。
88	軽石	—	51.0	42.0	31.0	28.5	—	上面～側面一部に磨り跡が確認される。

第８表　０６Ｄ出土遺物観察表（１）〔23ページ〕

（単位：cm）

挿図番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	手　法　上　の　特　徴
第26図１	土師器　椀	12.4	4.1	—	長石　石英　赤色粒	茶褐色～暗茶褐色	内外面なで整形　口縁～体部1/3 遺存
2	土師器　椀	11.2	4.2	—	長石　雲母片　赤色粒	暗茶褐色	内外面なで整形　口縁～体部1/5 遺存
3	土師器　椀	12.8	5.2	3.3	長石　赤色粒	外茶褐色　内淡橙褐色	口辺部～体部外斜位ヘラ削り後なで整形　内なで整形　完形
4	土師器　坏	14.2	4.2	—	長石　石英　小石粒	淡赤褐色部分的に黒斑	外ヘラ削り後なで整形　内ヘラなで後なで整形　内外面赤彩か？　ほぼ完形口縁部一部欠損
5	土師器　椀	12.8	6.2	3.1	長石　赤色粒　小石粒	淡橙褐色	内外面なで整形　両面に３～４本単位の粗い擦痕が見られる。外面に化粧土を塗布した痕跡が見受けられる。完形
6	土師器　高坏	18.1	13.7	13.2	長石　石英　小石粒	淡赤褐色一部黒斑	坏部外縦位のなで状磨き　内横位ヘラ磨き　脚部外縦位ヘラ磨き　内なで整形　坏部の一部と脚裾部2/3 欠損
7	土師器　高坏	15.6	5.7	—	長石　小石粒	外淡橙褐色　内黒灰褐色	坏部外口縁～体部ヘラ削り後なで整形　内なで整形　焼成時に亀裂生じた失敗品　坏部全周遺存
8	土師器　高坏	14.4	6.8	—	長石　赤石粒	暗茶褐色	坏部内外面木口状工具によるなでと磨き状なで整形　下端外面縦位ヘラ削り　坏部全周遺存
9	土師器　高坏	—	8.3	11.6	長石　雲母片	淡橙褐色	脚部外細い縦位ヘラ削り　内ヘラなで整形　裾部内外横なで　脚部中位に直径6mm の焼成前穿孔（未貫通）１箇所あり　石製模造品製作用の工具と想定される。（棒錐か）脚部外面と裾部内面に赤彩か？　脚裾部1/6 遺存
10	土師器　甕	—	4.7	4.9	長石　石英　雲母片	外暗茶褐色　内黒灰褐色	外縦位ヘラ削り後なで整形　内なで整形　甕欠損後底部のみ二次使用　底部2/3 遺存

第９表　０６Ｄ出土遺物観察表（２）〔24.25ページ〕

（単位：mm. g）

挿図番号	種別	段階	全長	全幅	厚さ	重量	孔径	手法上の特徴
第27図13	白玉	形割Ⅰ	25.0	11.0	3.2	1.2	—	13～21形割Ⅱの素材作成　偏平四角板を作成する段階　断面四角形状
14	白玉	形割Ⅰ	10.0	9.0	4.0	0.5	—	偏平四角形状　断面四角形状　下切截
15	白玉	形割Ⅰ	18.0	8.0	2.9	0.7	—	偏平長方形状　断面四角形状　下切截
16	白玉	形割Ⅰ	15.0	7.0	2.9	0.4	—	偏平三角形状　断面四角形状　下切截
17	白玉	形割Ⅰ	10.0	6.0	2.0	0.2	—	偏平長方形状　断面四角形状　上切截
18	白玉	形割Ⅰ	22.0	6.0	5.0	0.9	—	偏平長方形状　断面三角形状　下切截
19	白玉	形割Ⅰ	9.0	5.0	3.0	0.2	—	偏平長方形状　断面三角形状
20	白玉	形割Ⅰ	12.0	8.0	3.5	0.4	—	偏平長方形状　断面四角形状
21	白玉	形割Ⅰ	12.0	11.0	2.8	0.6	—	偏平台形状　断面四角形状
22	白玉	形割Ⅱ	6.0	6.0	2.5	0.1	—	22～39四角体の側縁切截段階　六角形状
23	白玉	形割Ⅱ	6.0	6.0	2.1	0.2	—	四角形状
24	白玉	形割Ⅱ	5.0	7.0	1.8	0.0	—	四角形状
25	白玉	形割Ⅱ	6.0	6.0	2.1	0.0	—	六角形状
26	白玉	形割Ⅱ	6.0	7.0	2.1	0.1	—	五角形状
27	白玉	形割Ⅱ	6.0	7.0	1.5	0.0	—	五角形状
28	白玉	形割Ⅱ	6.0	5.0	2.1	0.0	—	五角形状
29	白玉	形割Ⅱ	7.0	7.5	2.2	0.3	—	六角形状
30	白玉	形割Ⅱ	6.0	6.0	3.0	0.2	—	五角形状
31	白玉	形割Ⅱ	9.0	6.0	2.7	0.2	—	五角形状
32	白玉	形割Ⅱ	6.0	6.0	2.5	0.2	—	六角形状
33	白玉	形割Ⅱ	7.0	7.0	2.0	0.1	—	五角形状
34	白玉	形割Ⅱ	6.0	6.0	2.0	0.2	—	六角形状
35	白玉	形割Ⅱ	7.0	8.0	2.9	0.2	—	六角形状
36	白玉	形割Ⅱ	8.0	8.0	3.5	0.4	—	四角形状
37	白玉	形割Ⅱ	7.0	8.0	2.0	0.1	—	六角形状
38	白玉	形割Ⅱ	6.0	7.0	1.8	0.0	—	六角形状
39	白玉	形割Ⅱ	8.0	6.0	1.8	0.0	—	六角形状
40	白玉	穿孔～研磨Ⅱ	5.0	5.0	1.8	0.1	1.1	40～71穿孔終了後段階　両面研磨済・側縁研磨中
41	白玉	穿孔～研磨Ⅰ	6.0	6.0	2.8	0.0	1.2	両面研磨済・側縁未研磨
42	白玉	穿孔～研磨Ⅱ	5.0	6.0	2.5	0.2	1.2	両面研磨済・側縁研磨中　六角形状
43	白玉	穿孔～研磨Ⅱ	6.0	6.0	2.7	0.1	1.0	両面研磨済・側縁研磨中
44	白玉	穿孔～研磨Ⅱ	6.0	6.0	1.8	0.0	1.3	両面研磨済・側縁研磨中　四角形状
45	白玉	穿孔～研磨Ⅱ	6.0	5.0	2.0	0.0	1.2	両面研磨済・側縁研磨中　五角形状
46	白玉	穿孔～研磨Ⅱ	16.0	6.0	2.9	0.5	1.4	両面研磨済・側縁研磨中　長方形板状品
47	白玉	穿孔～研磨Ⅱ	5.0	6.5	2.7	0.1	1.2	両面研磨済・側縁研磨中に破損　3/5 遺存
48	白玉	穿孔～研磨Ⅱ	5.5	5.0	1.8	0.0	1.3	両面研磨済・側縁研磨中　六角形状
49	白玉	穿孔～研磨Ⅱ	5.0	6.0	3.0	0.1	1.5	両面研磨済・側縁研磨中　六角形状
50	白玉	穿孔～研磨Ⅱ	7.0	7.0	1.8	0.0	1.2	両面研磨済・側縁研磨中　五角形状
51	白玉	穿孔～研磨Ⅰ	7.0	6.5	2.0	0.0	1.2	両面研磨済・側縁未研磨　未貫孔　六角形状
52	白玉	穿孔～研磨Ⅱ	4.0	6.0	1.6	0.0	1.1	両面研磨済・側縁研磨中に破損　1/2 弱遺存
53	白玉	穿孔～研磨Ⅱ	6.0	6.0	2.0	0.0	1.2	両面研磨済・側縁研磨中　六角形状
54	白玉	穿孔～研磨Ⅱ	6.0	6.0	1.4	0.0	1.2	両面研磨済・側縁研磨中　穿孔位置ずれる
55	白玉	穿孔～研磨Ⅱ	6.0	6.0	2.0	0.1	1.4	両面研磨済・側縁研磨中　五角形状
56	白玉	穿孔～研磨Ⅱ	7.0	7.0	2.0	0.2	1.4	両面研磨済・側縁研磨中　五角形状
57	白玉	穿孔～研磨Ⅱ	6.0	6.5	2.9	0.2	1.5	両面研磨済・側縁研磨中
58	白玉	穿孔～研磨Ⅱ	6.0	6.0	1.8	0.0	1.2	両面研磨済・側縁研磨中　六角形状

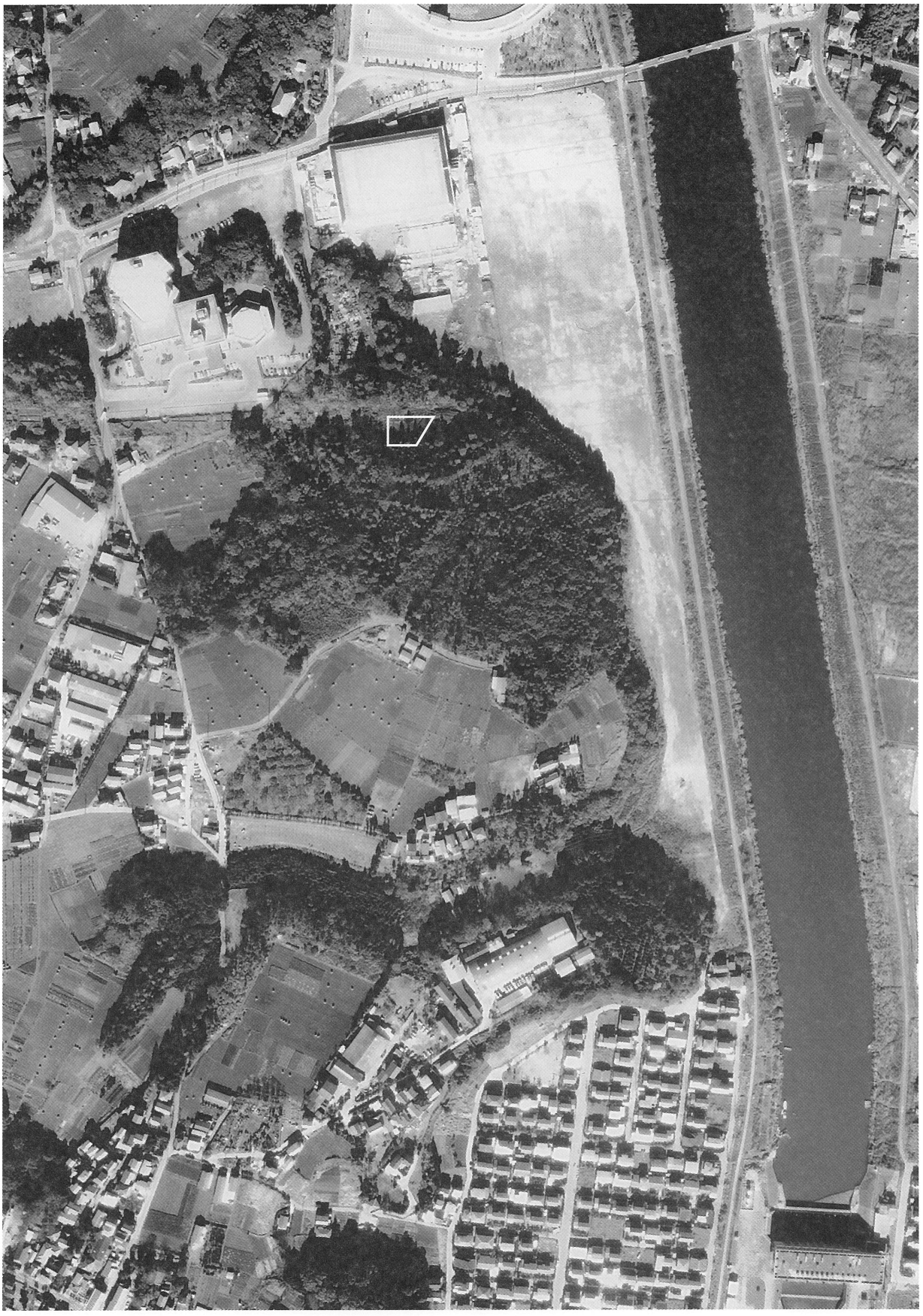
第９表　０６Ｄ出土遺物観察表（２）続き〔24.25ページ〕

（単位：mm．g）

挿図番号	種　別	段　階	全長	全幅	厚さ	重量	孔径	手　法　上　の　特　徴
第27図59	白玉	穿孔～研磨Ⅱ	7.0	8.0	2.0	0.2	1.2	両面研磨済・側縁研磨中　七角形状
60	白玉	穿孔～研磨Ⅱ	6.5	7.0	3.0	0.2	1.4	両面研磨済・側縁研磨中
61	白玉	穿孔～研磨Ⅲ	4.0	4.0	1.8	0.0	1.2	両面研磨済・側縁仕上げ研磨中に破損
62	白玉	穿孔～研磨Ⅲ	4.0	4.0	1.8	0.0	1.3	両面研磨済・側縁仕上げ研磨
63	白玉	穿孔～研磨Ⅲ	4.0	4.0	2.0	0.0	1.4	両面研磨済・側縁仕上げ研磨
64	白玉	穿孔～研磨Ⅲ	4.0	4.0	2.0	0.0	1.3	両面研磨済・側縁仕上げ研磨
65	白玉	穿孔～研磨Ⅲ	5.0	4.0	1.8	0.0	1.2	両面研磨済・側縁仕上げ研磨
66	白玉	穿孔～研磨Ⅰ	5.0	6.0	2.0	0.0	1.4	両面研磨済・側縁未研磨
67	白玉	穿孔～研磨Ⅲ	5.0	5.0	2.0	0.0	1.3	両面研磨済・側縁仕上げ研磨
68	白玉	穿孔～研磨Ⅲ	5.0	5.0	5.0	0.1	1.3	両面研磨済・側縁研磨　棒状品を切断したものか？
69	白玉	穿孔～研磨Ⅲ	5.0	4.0	2.8	0.1	1.2	両面研磨済・側縁仕上げ研磨
70	白玉	穿孔～研磨Ⅲ	4.0	4.0	1.8	0.0	1.2	両面研磨済・側縁仕上げ研磨
71	白玉	穿孔～研磨Ⅲ	5.0	5.0	1.8	0.0	1.5	両面研磨済・側縁仕上げ研磨
72	棗玉	穿孔～研磨	13.0	9.0	9.0	1.4	2.0	側面面取り後に一方向穿孔し，研磨中途段階
73	有孔円板	研磨	12.0	13.0	2.1	0.7	—	両面・側縁研磨終了段階
74	有孔円板	未成品	35.0	26.0	4.5	4.2	—	切截による形割整形段階
75	有孔円板	未成品	23.0	22.0	2.0	1.8	—	切截による形割整形段階
76	有孔円板	未成品	21.0	20.0	4.0	2.1	—	切截による形割整形段階
77	剣形品	研磨	24.0	14.0	3.0	1.2	—	両面・側縁研磨段階時基部欠損
78	剣形品	未成品	25.0	12.0	3.2	1.7	—	切截による形割整形段階
79	剣形品	未成品	29.0	16.0	6.0	3.3	—	切截による形割整形段階
80	剣形品	研磨	34.0	18.0	4.0	4.1	—	両面・側縁研磨段階時先端部欠損か？
81	剣形品	成品	35.0	16.0	3.0	3.5	0.8	穿孔部上端３．８mm
82	原石	—	89.0	56.0	20.0	141.6		
83	原石小割	荒割Ⅰ	133.0	66.0	30.0	285.1	—	切削による整形段階
84	原石小割	荒割Ⅱ	43.0	24.0	16.0	17.6	—	打撃によって形割の母体を作成する段階
85	原石小割	荒割Ⅱ	42.0	24.0	17.0	15.1	—	打撃によって形割の母体を作成する段階
86	原石小割	荒割Ⅱ	41.0	25.0	10.0	11.7	—	打撃によって形割の母体を作成する段階
87	原石小割	荒割Ⅱ	61.0	50.0	25.0	79.9	—	打撃によって形割の母体を作成する段階
88	軽石	—	95.0	79.0	27.0	80.1	—	上面と右側面に磨り跡が見られる。
89	軽石	—	60.0	47.0	45.0	34.3	—	下面と右側面に磨り跡が見られる。

図版1

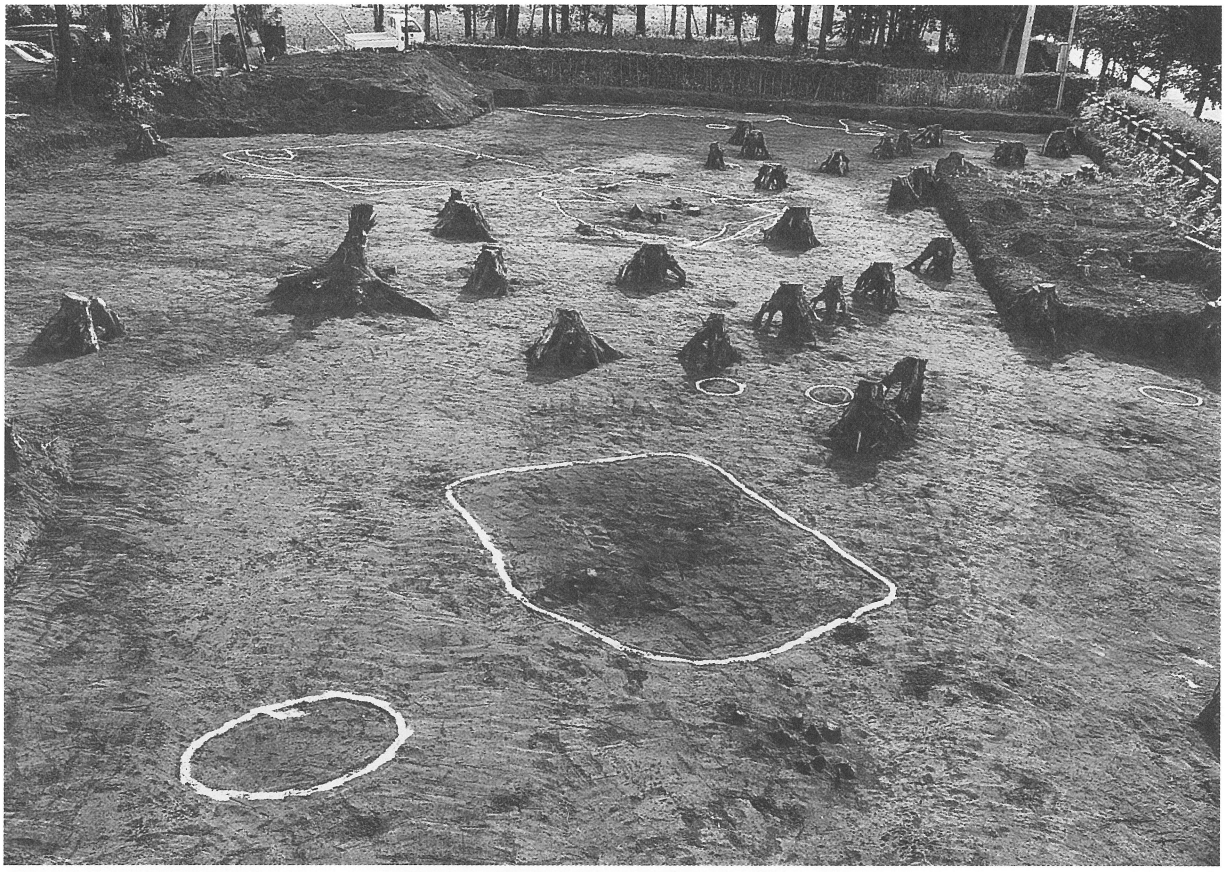
ー遺跡周辺の地形ー



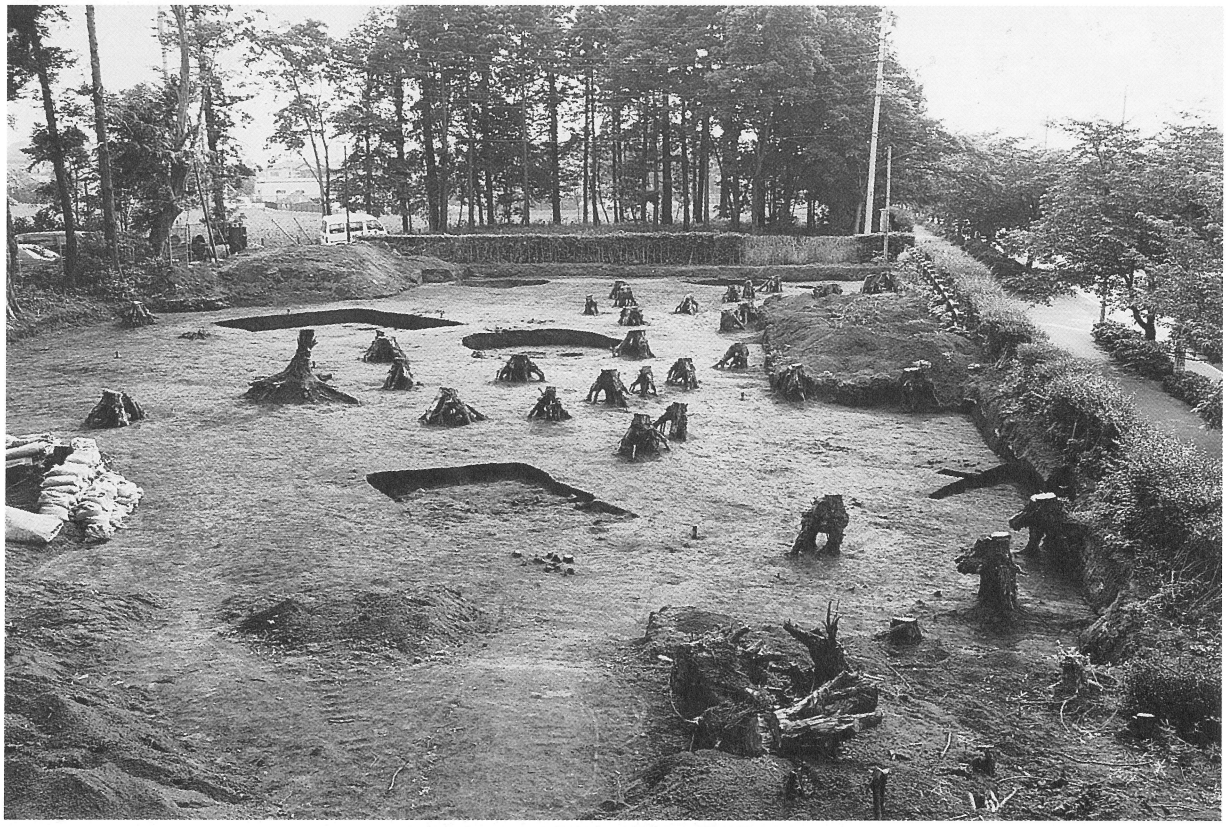
遺跡周辺の地形（昭和54年撮影）

図版2

ー遺跡全景ー



遺構プラン確認状況



遺構検出状況全景

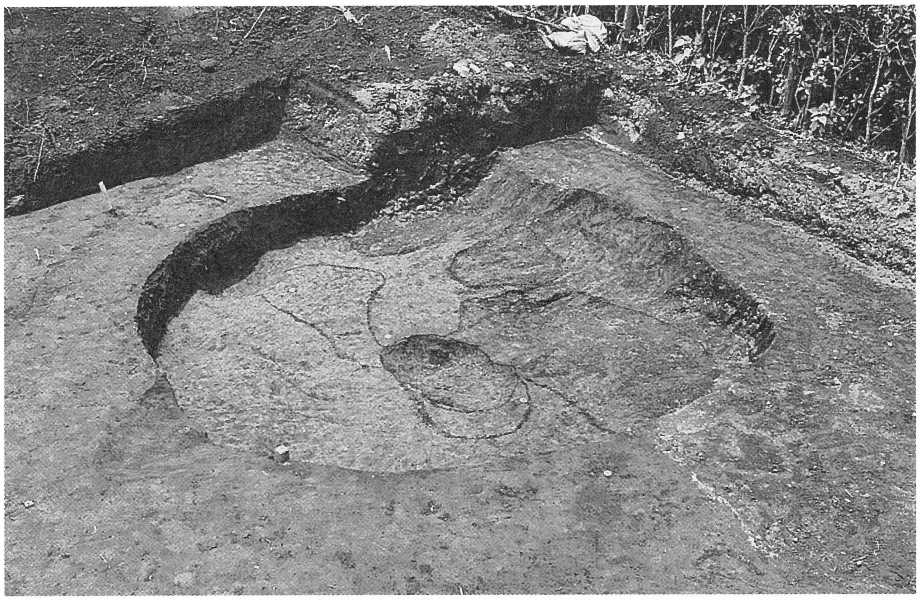
01D遺構

01D炭化材・焼土検出状況

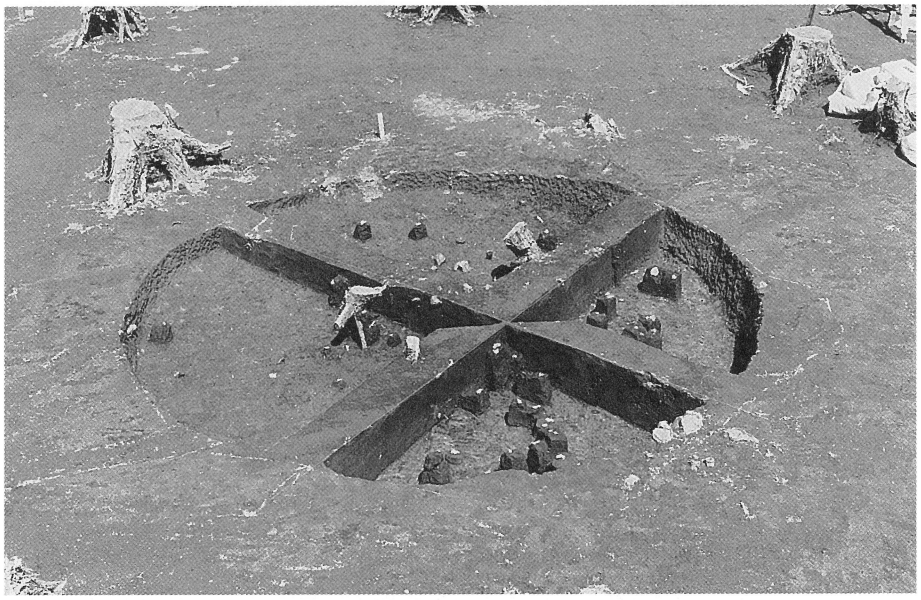
01D完掘状況

図版4

02D・04D遺構



02D完掘状況



04D遺物出土状況

04D完掘状況

05D遺構

05D遺物出土状況

05D完掘状況

図版6

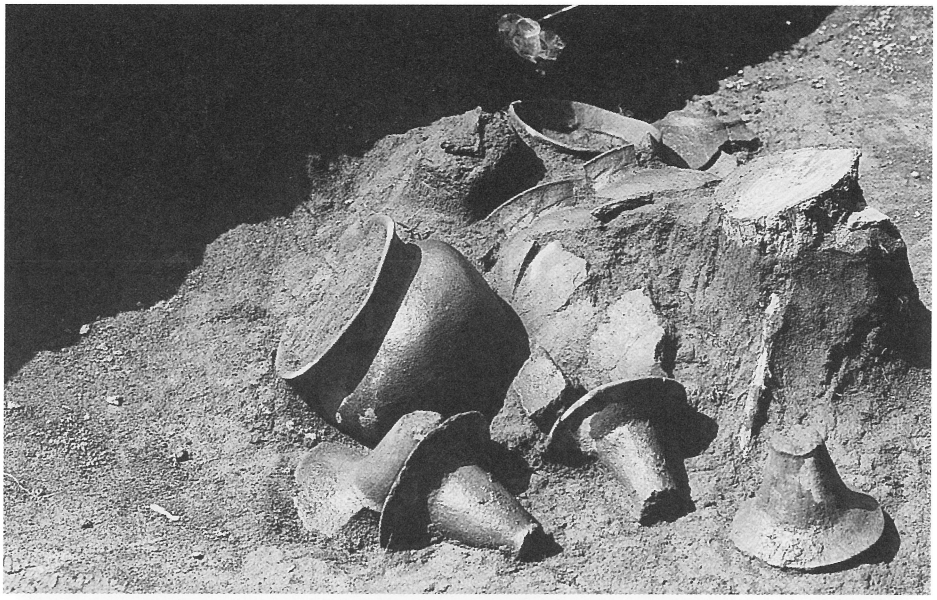
03D遺構（1）

03D遺物出土状況

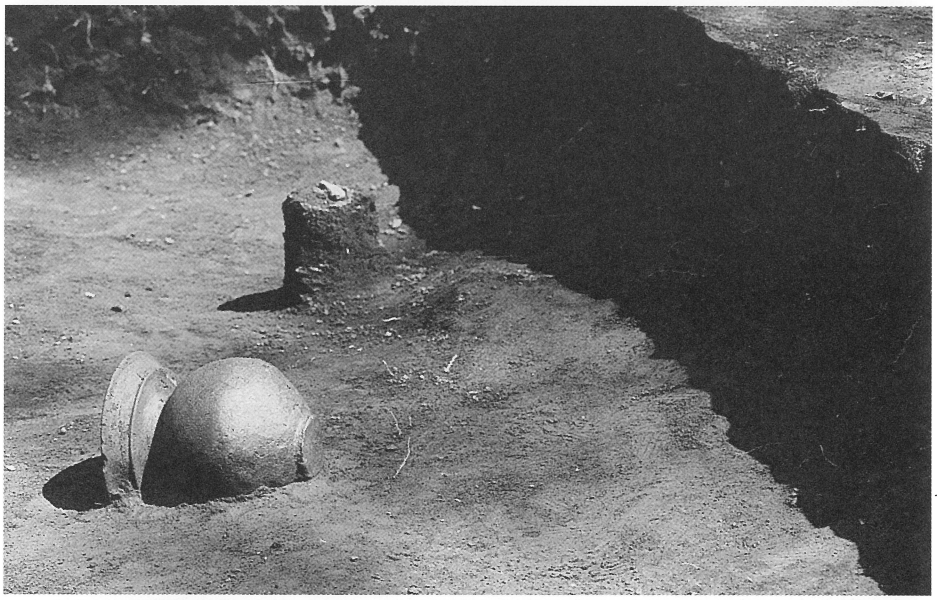
03D原石等出土状況

03D原石出土状況

03D遺構(2)



遺物出土状況(1)

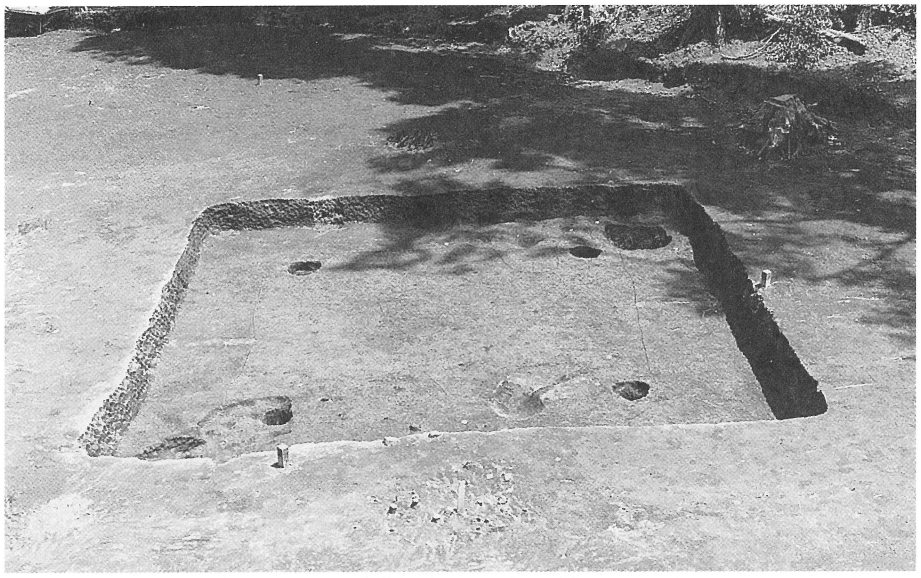


遺物出土状況(2)

P-7内遺物出土状況

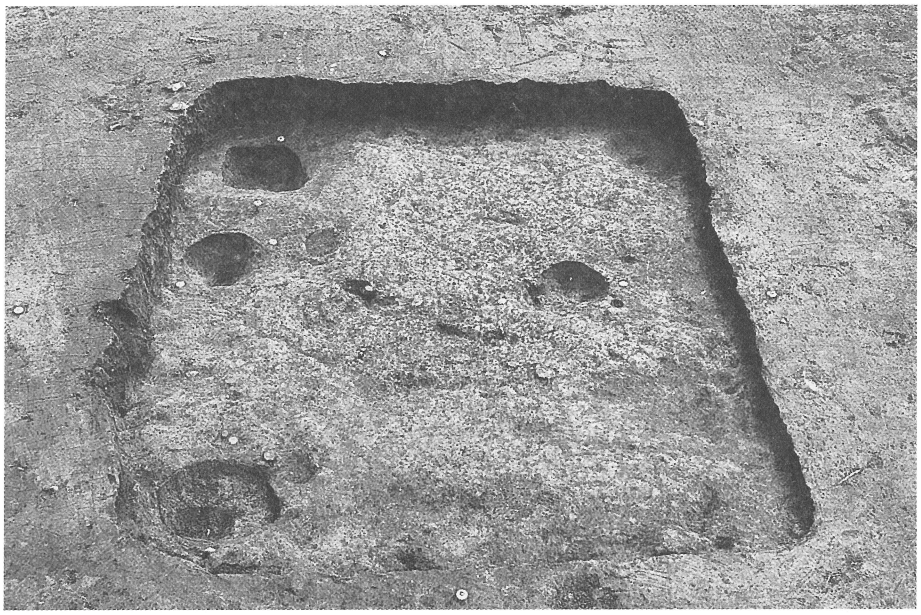
図版8

03D遺構(3)・06D遺構(1)



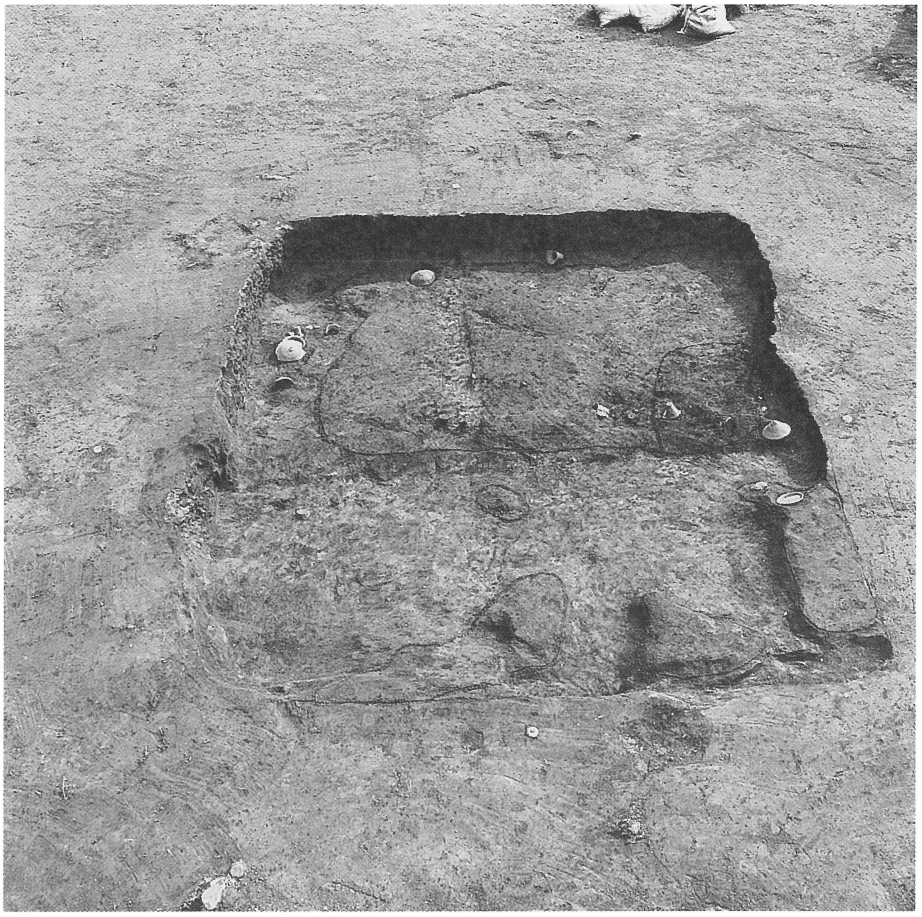
03D完掘状況

06D床面精査状況



06D完掘状況

06D遺構(2)

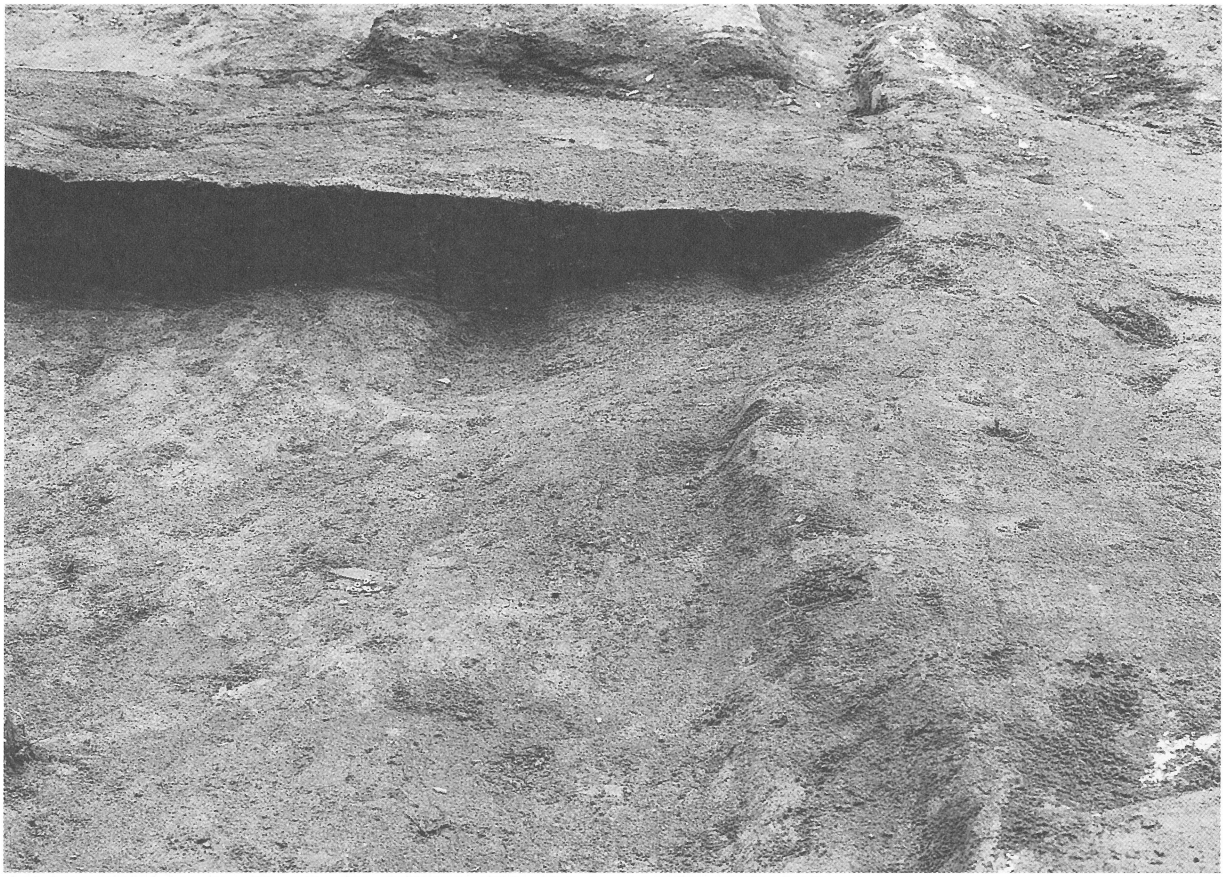


06D焼土・遺物
出土状況

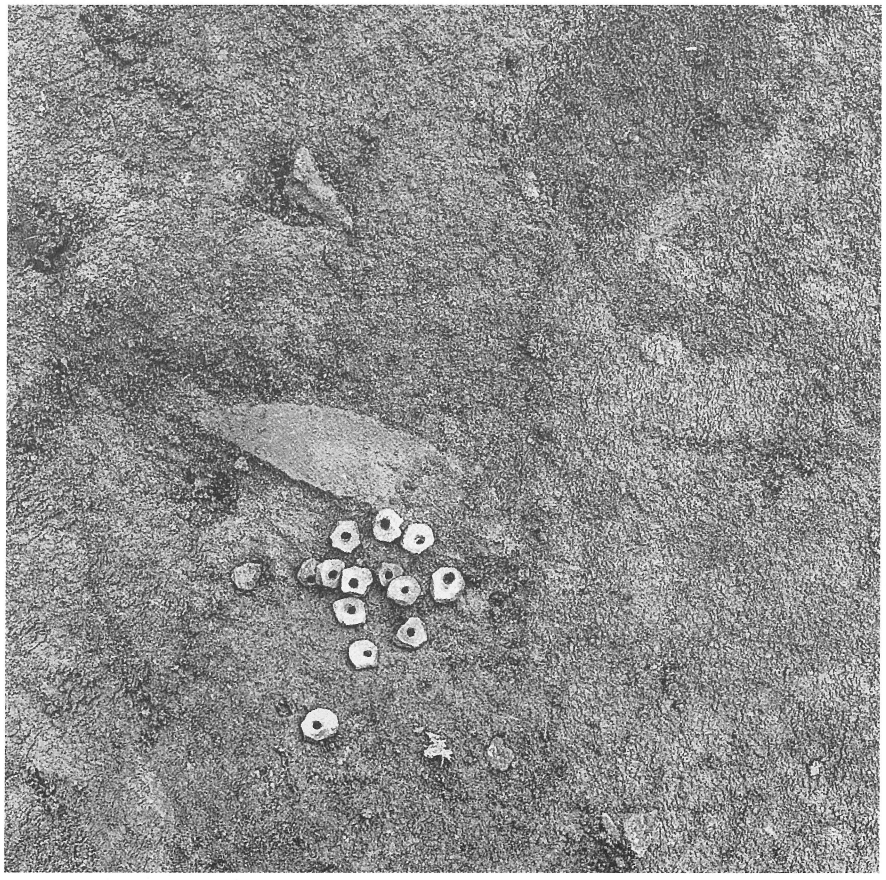
遺物出土状況

図版10

06D遺構(3)

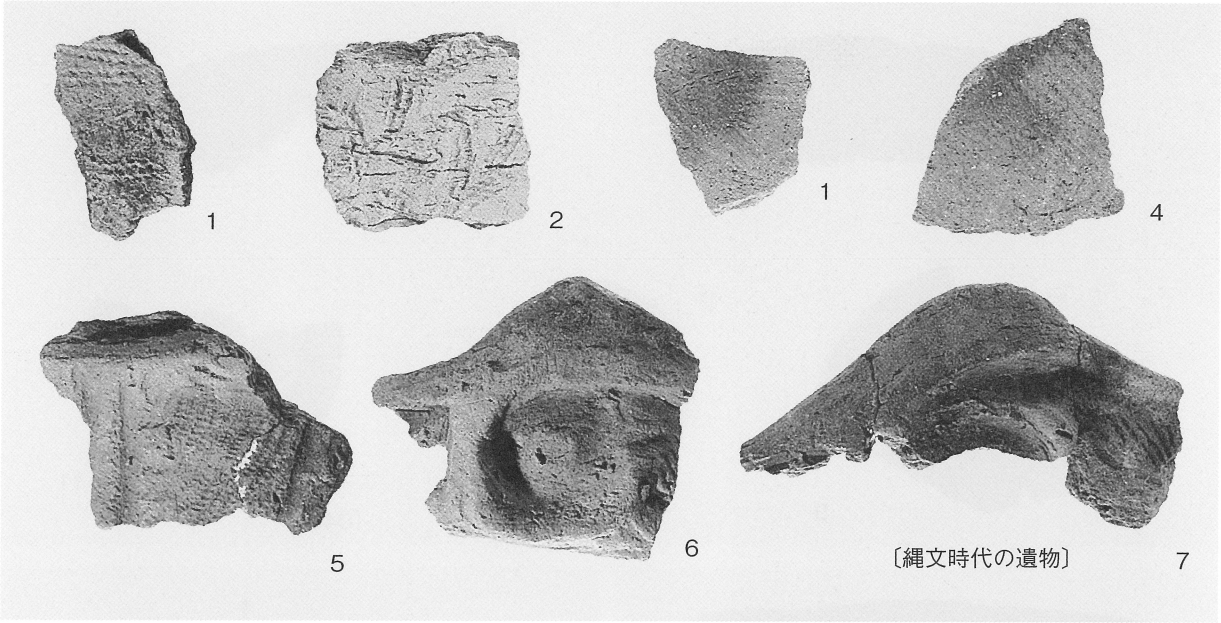


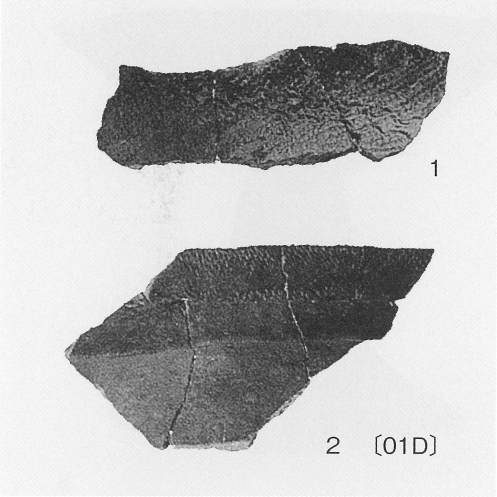
06D炭臼玉未製品・剣形品出土状況

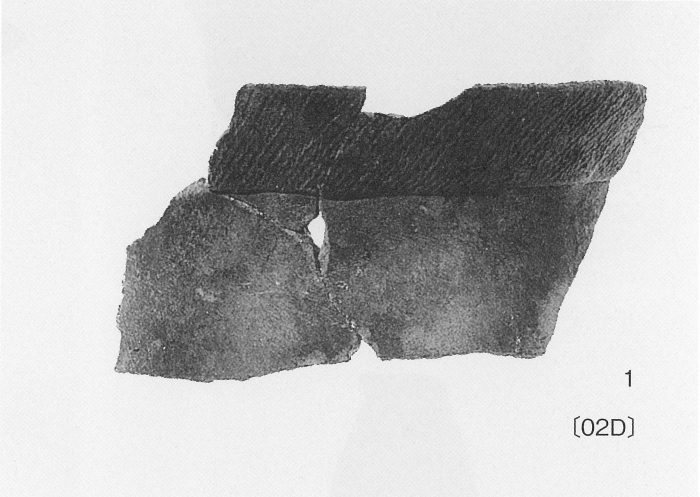


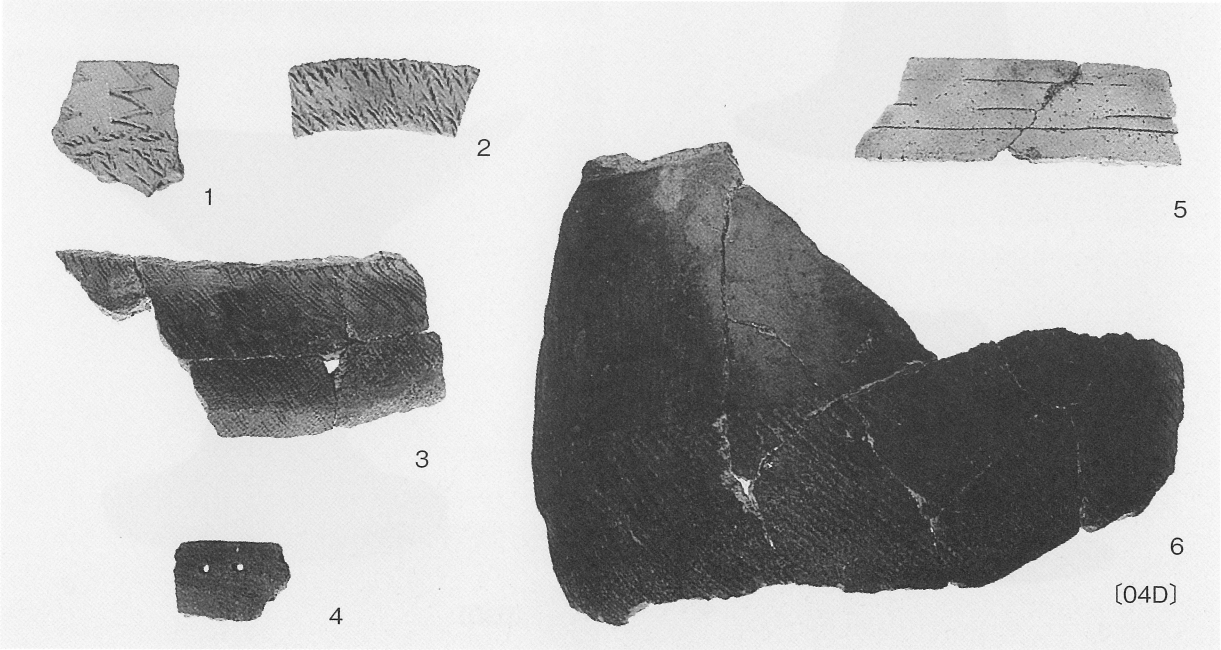
同拡大状況

縄文時代・01・02・04D遺物



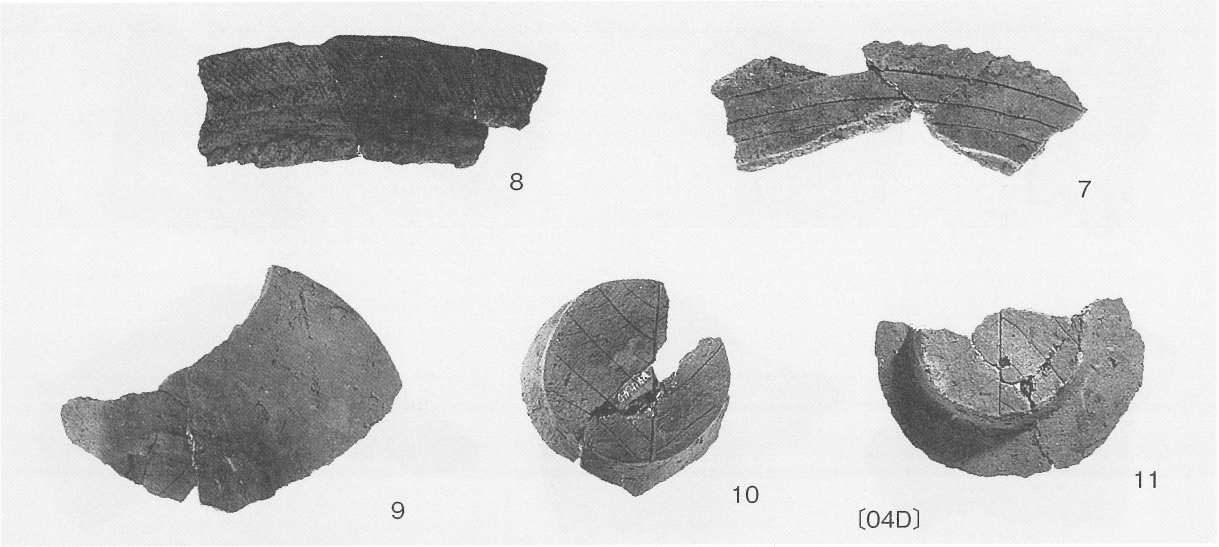






図版12

04・03D遺物



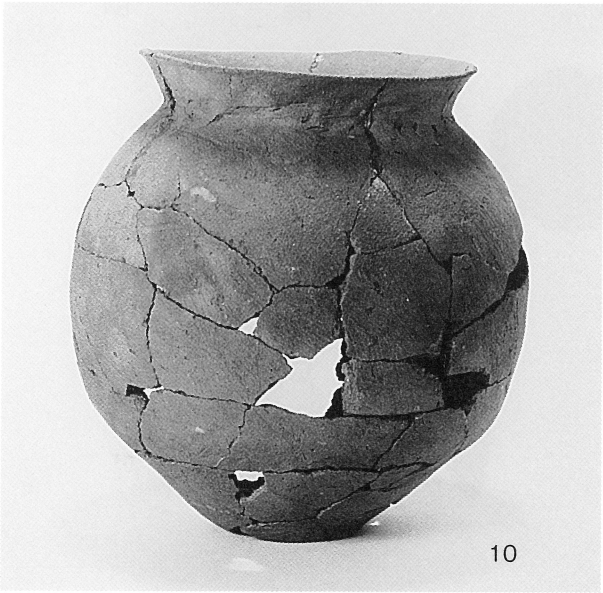
03D遺物(2)

6

7

8

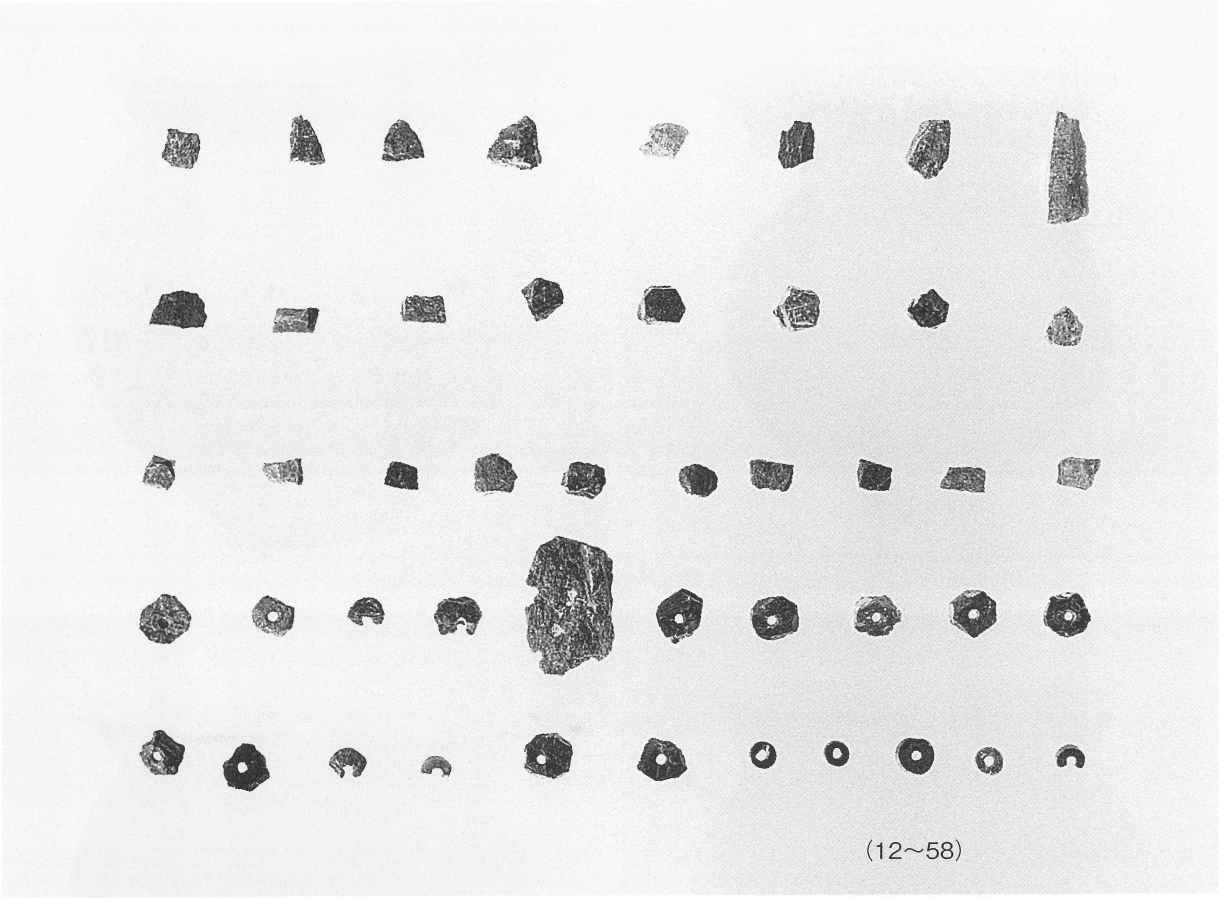
9

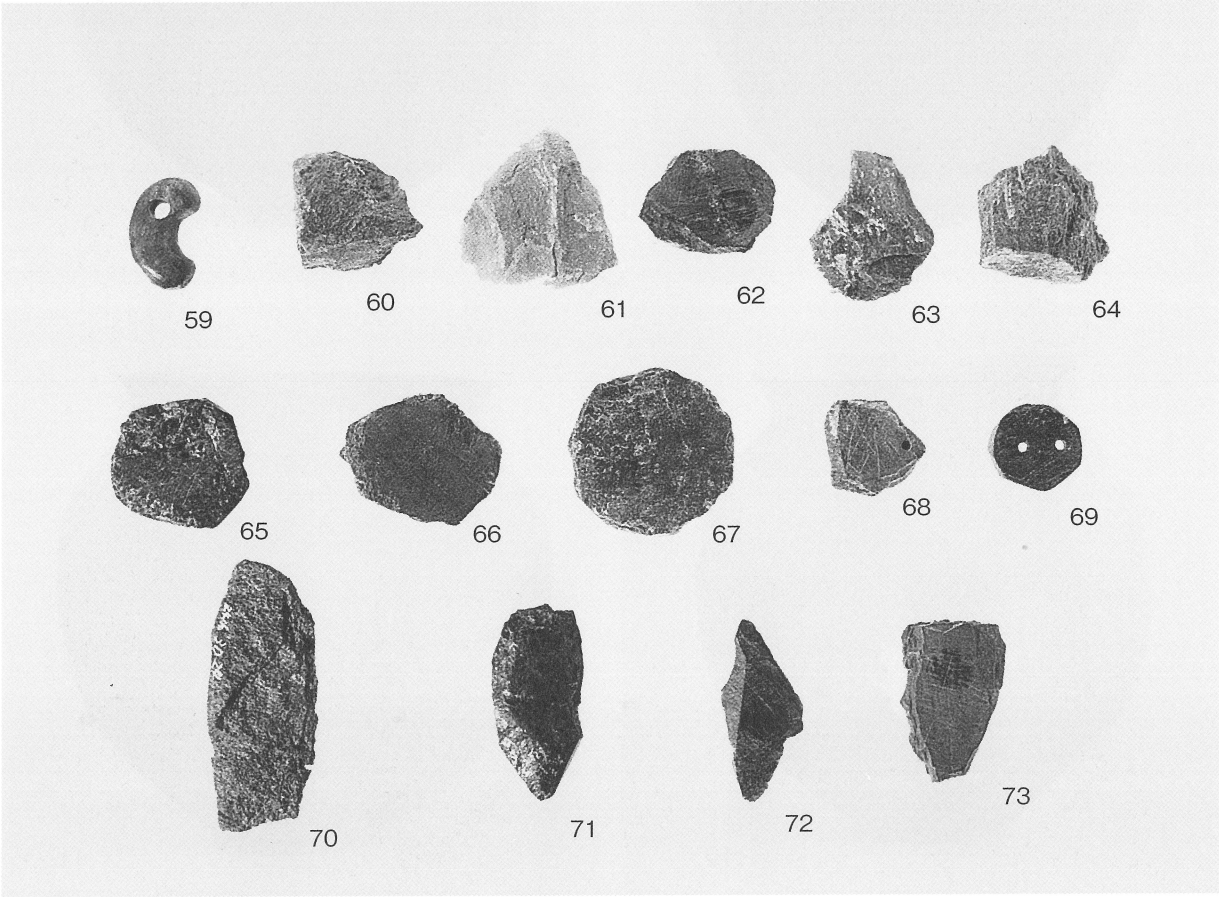

10

11

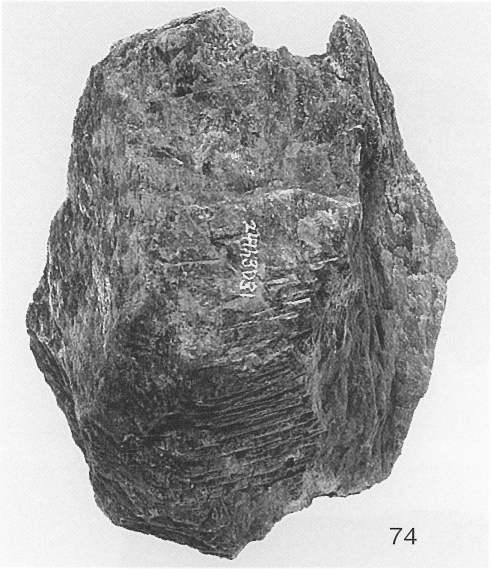
図版14

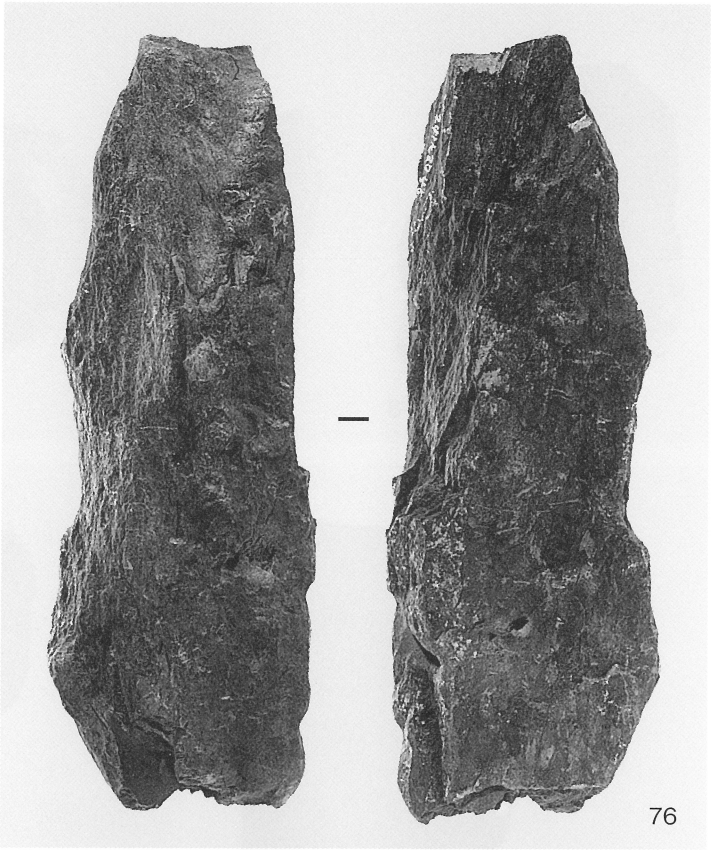
03D遺物(3)





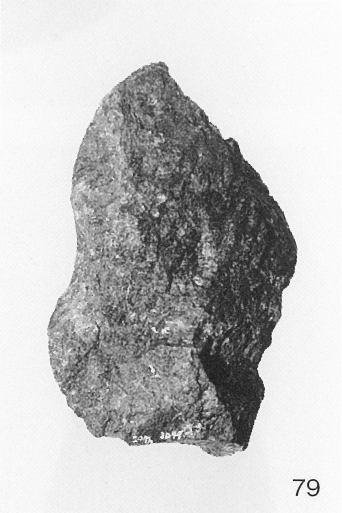
03D遺物(4)

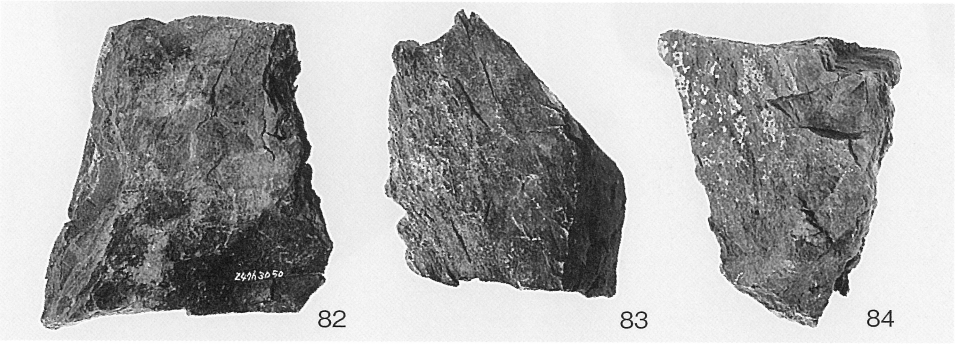

74


76

75

77

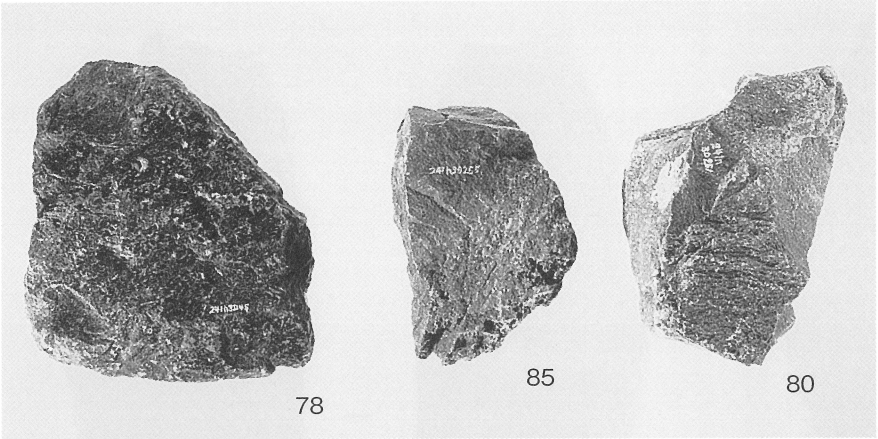

79

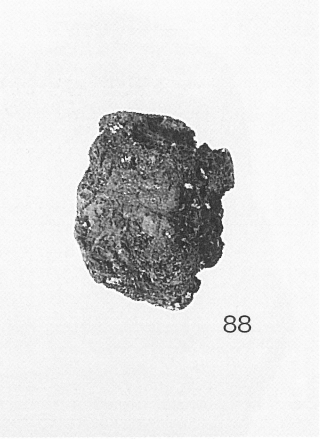

82 83 84

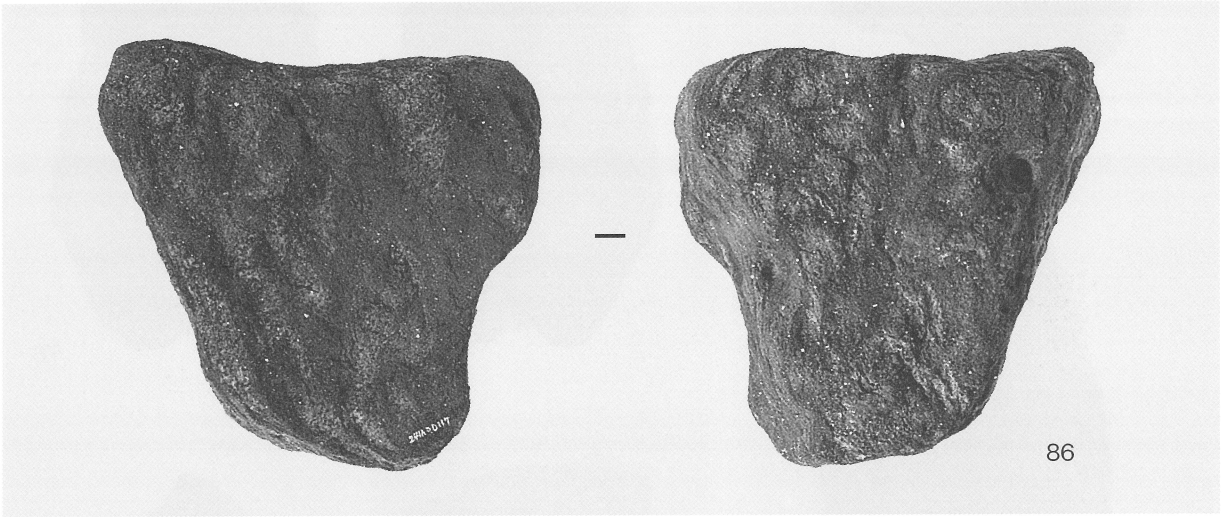
81

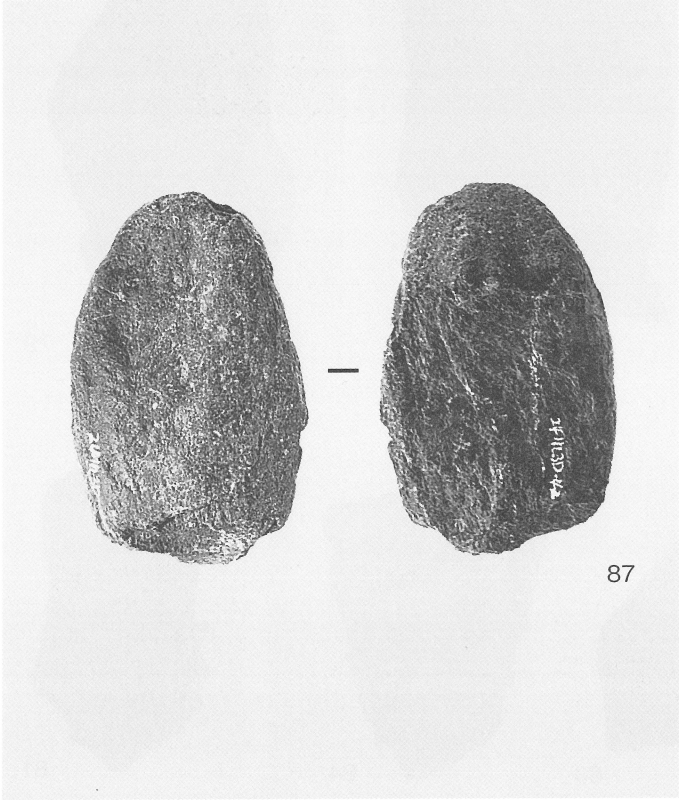
図版16

03D遺物(5)・05D遺物







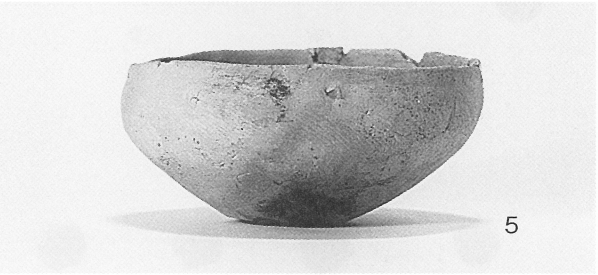


06D遺物(1)

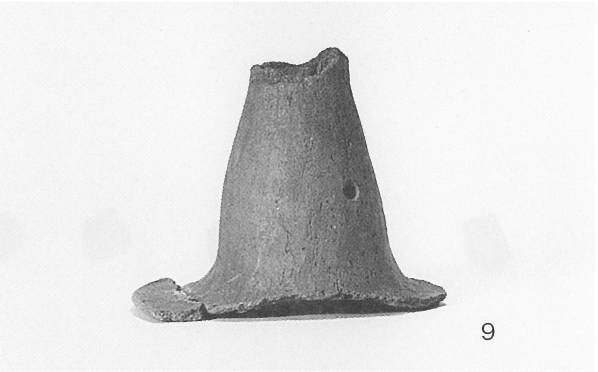
1

4

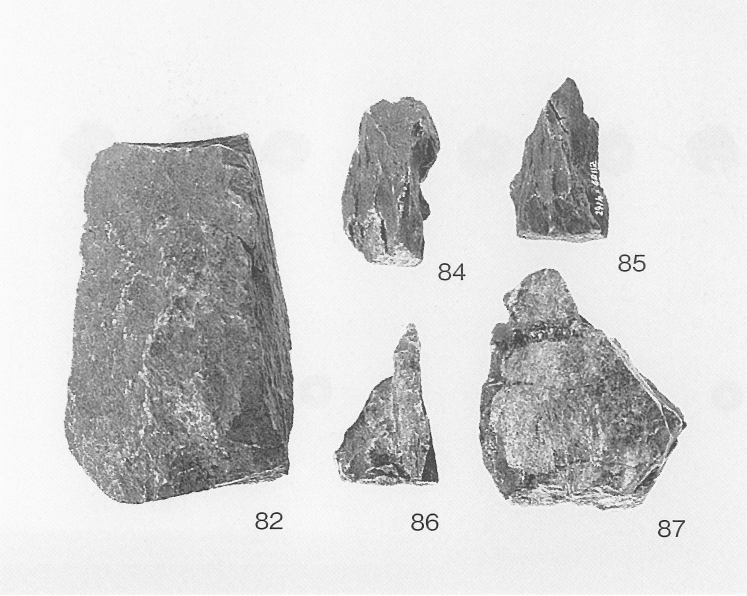
8


5

6


9

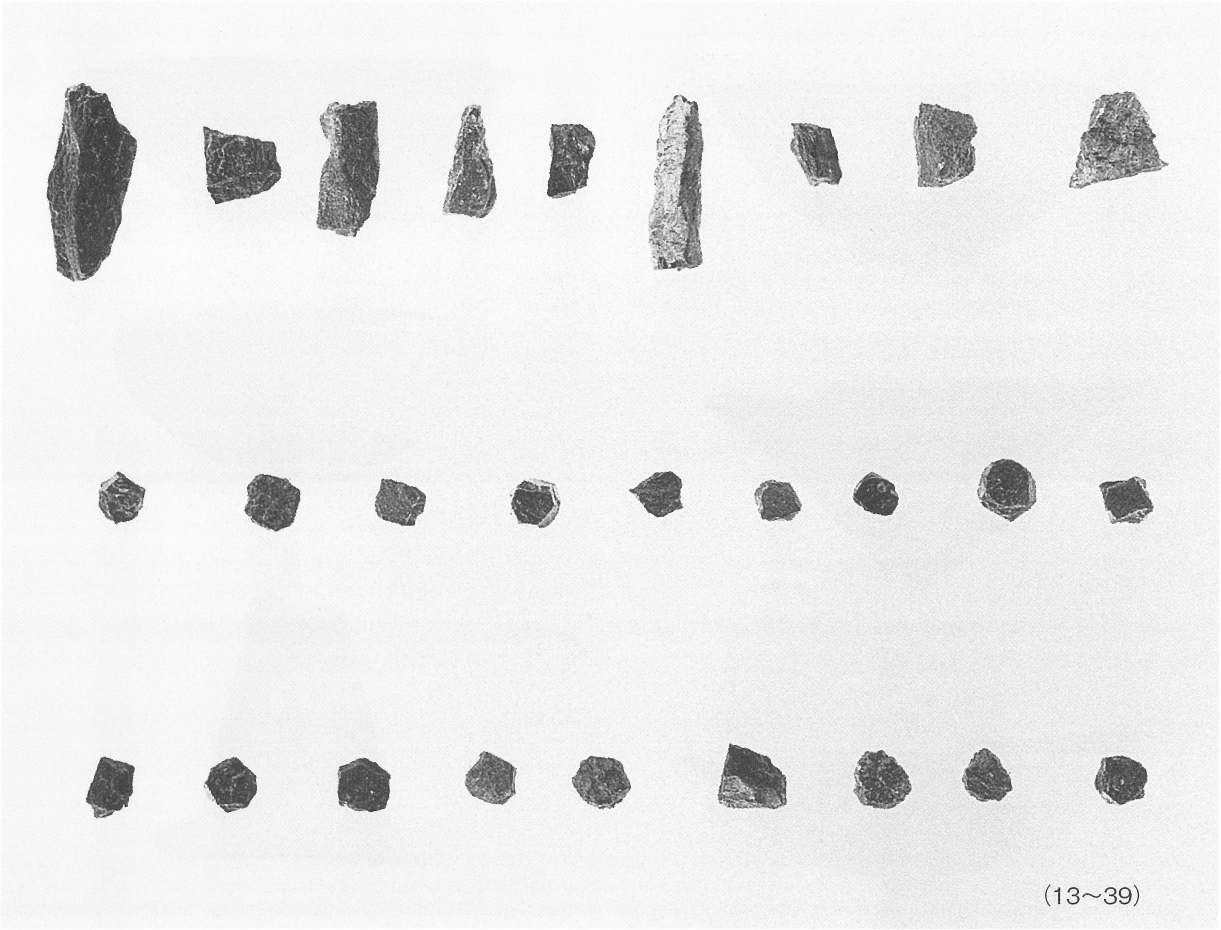
10

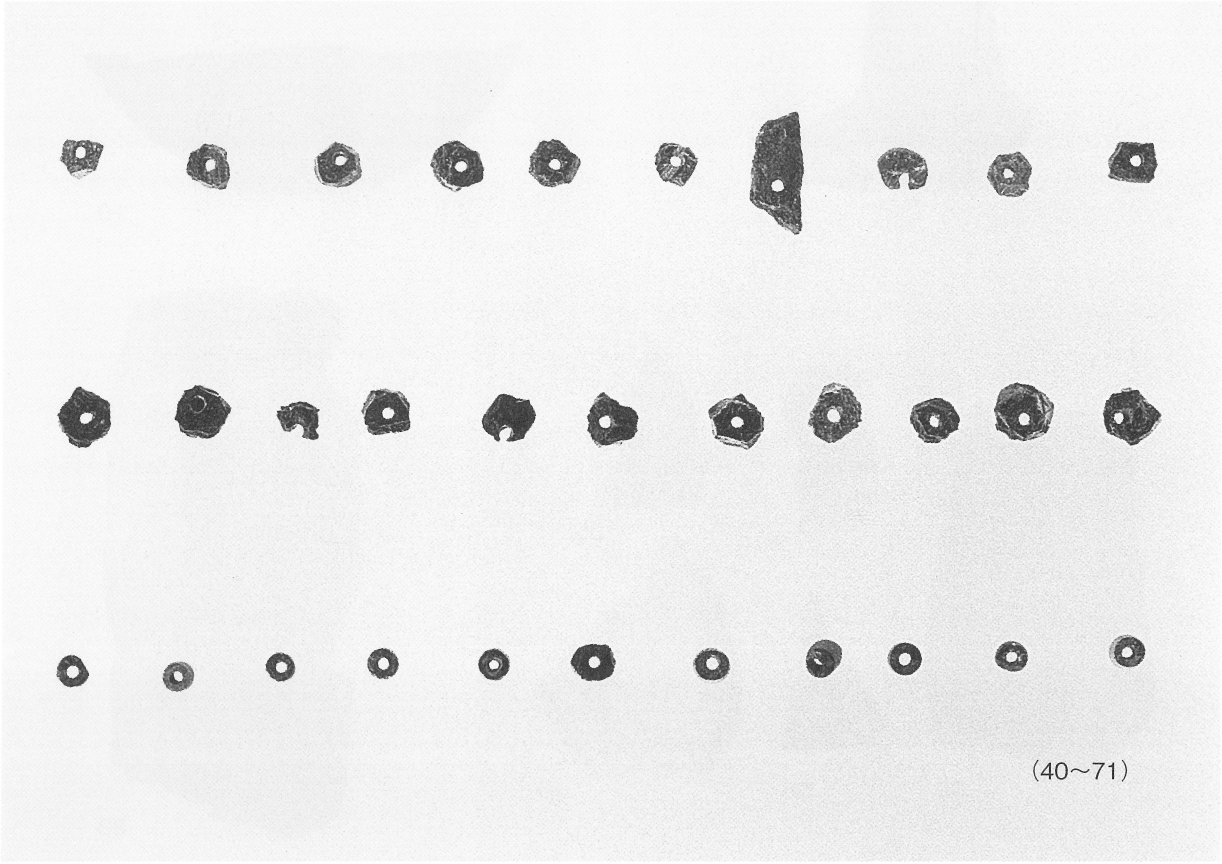

82 84 85 86 87

83

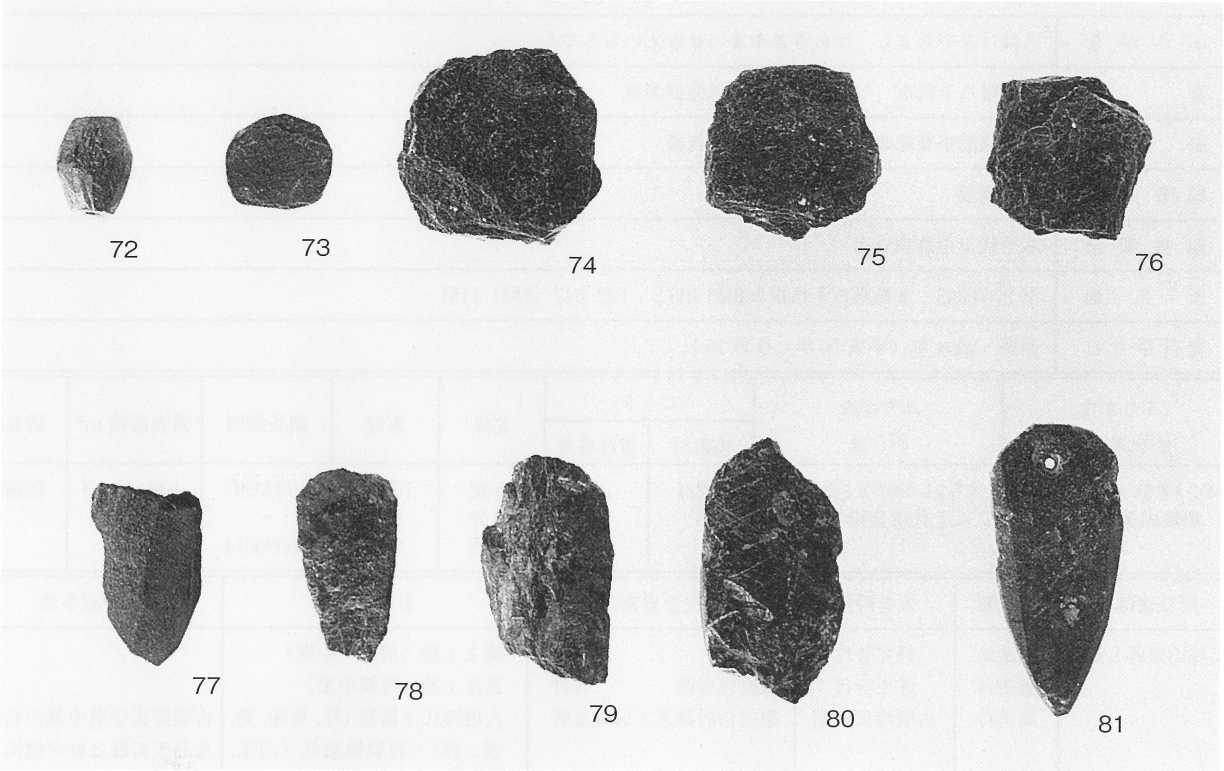
図版18

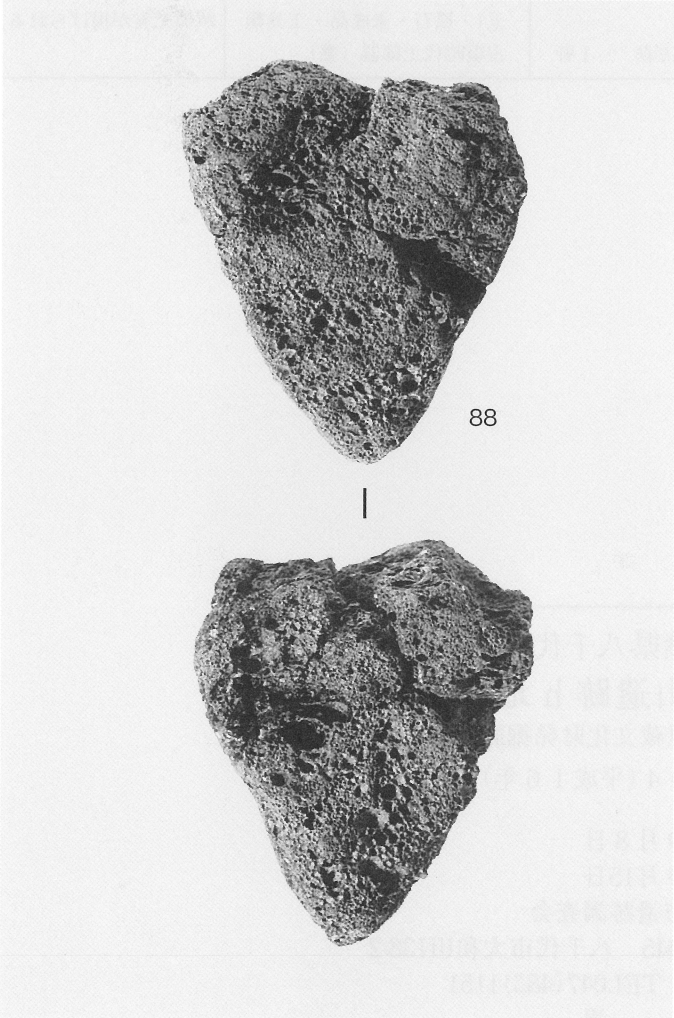
06D遺物(2)





06D遺物(3)





報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよし　かわさきやまいせきえいちちてん
書名	千葉県八千代市　川崎山遺跡ｈ地点発掘調査
副書名	店舗建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	森　竜哉
編集機関	八千代市遺跡調査会
所在地	〒276-0045　千葉県八千代市大和田138-2　TEL.047（483）1151
発行年月日	西暦　2004年（平成16年）9月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かわさきやまいせきえいちちてん 川崎山遺跡ｈ地点	やちよしかやだあざなかだい 八千代市萱田字中台 2292-1	12221	241	35度 43分 12秒	140度 06分 50秒	19990507 ～ 19990614	上層 $966m^2$	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川崎山遺跡ｈ地点	包蔵地	縄文時代		縄文土器（前期・中期）	
	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡　3軒	弥生土器（後期中葉）	
	集落跡	古墳時代中期	竪穴住居跡兼工房跡2軒	古墳時代土師器（坏，高坏，甕，壺，鉢）・石製模造品（臼玉，剣形品，有孔円板，棗玉，勾玉）・原石・未成品・工具類	古墳時代中期中葉の石製模造品工房跡2軒を検出。工房としての諸条件，未成品類の充実が掲げられる。
	集落跡	古墳時代後期	竪穴遺構（住居跡？）1軒	古墳時代土師器（甕）	

千葉県八千代市

川崎山遺跡ｈ地点

－店舗建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書－

２００４（平成１６年）

印刷日　2004年９月８日
発行日　2004年９月15日
編　集　八千代市遺跡調査会
〒276-0045　八千代市大和田138-2
TEL047（483）1151
発　行　寺沢　鴻